埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第325集

所　沢　市

膳棚東Ⅱ／東内手／北久米

都市計画道路飯能所沢線関係埋蔵文化財発掘調査報告
―Ⅲ―

２００６

埼　玉　県

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では「人と自然にやさしい道づくり」を基本理念に、県民の生活圏拡大や多様化する産業活動の円滑化を図るため、体系的な道路網整備と総合的な交通渋滞対策を実施し、誰もが安心・安全・快適に通行できる道路空間の形成と地域を元気にする道づくりを推進しています。

所沢市は東京都と接し、武蔵野の面影を今に伝える緑豊かな都心のベッドタウンとして発展してきました。都市計画道路飯能所沢線は、所沢市内における混雑の緩和や連絡時間の短縮などに大いに寄与することが期待されています。

また、所沢市は恵まれた自然環境にあり、旧石器時代から江戸時代に至るまで多くの埋蔵文化財の所在が知られている地域でもあります。なかでも国指定文化財となった旧石器時代の砂川遺跡や、古代の官道である東山道が発見された東の上遺跡は大きな関心を集めています。

都市計画道路飯能所沢線の建設用地内には、膳棚東遺跡・東内手遺跡・北久米遺跡が所在し、その取り扱いについて埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。発掘調査は、埼玉県の委託を受け当事業団が実施しました。

今回の調査の結果、膳棚東遺跡では既に報告書にまとめた円墳跡の東側の周溝の一部と粘土を用いた埋葬施設が新たに発見され、ガラス小玉が出土しました。また、南側に隣接して新たな円墳跡も発見されました。東内手遺跡では奈良時代の住居跡等、北久米遺跡では平安時代の住居跡等が発見されました。住居跡からは土師器・須恵器などの土器類が出土し、当地域の歴史を解明する上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護・普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、川越県土整備事務所、所沢市教育委員会、所沢市立埋蔵文化財センター並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成18年３月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　福田陽充

例　言

1　本書は、埼玉県所沢市山口新田349－1他に所在する膳棚東遺跡・東内手遺跡・北久米遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の略号と代表地番及び発掘調査に対する指示通知は以下のとおりである。

膳棚東遺跡（ＺＮＤＮＨＧＳ）

埼玉県所沢市山口新田349－1他

平成14年5月13日付け　教文第２－９号

東内手遺跡（ＨＧＳＵＴＤ）

埼玉県所沢市荒幡60番地他

平成14年9月3日付け　教文第２－57号

北久米遺跡（ＫＴＫＭ）

埼玉県所沢市久米2,894番地他

平成14年9月3日付け　教文第２－56号

3　発掘調査は、都市計画道路飯能所沢線建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、埼玉県の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。本事業の発掘調査については山本禎・伴瀬宗一が担当し、膳棚東遺跡が平成14年4月8から平成14年4月30日まで、東内手遺跡・北久米遺跡が平成14年9月1日から平成15年1月31日まで実施した。整理・報告書作成事業は、村田健二が担当し、平成17月11月1日から平成18年3月24日まで実施した。

5　遺跡の基準点測量は、株式会社未央測地設計・精進測量設計株式会社に委託し、空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルに委託した。

6　写真は、発掘調査時の撮影を各担当者が行い、遺物の撮影は山本が行った。

7　出土品の整理・図版の作成は村田が行い、山本禎・大谷徹・渡辺清志の協力を得た。

8　本書の執筆は、Ⅰ－1を埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵを山本、Ⅳを大谷、付編を大屋道則、縄文時代の遺物を渡辺が行った。

9　本書の編集は、村田が行った。

10　本書に掲載した資料は、平成18年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

11　発掘調査から報告書の刊行まで下記の方々に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。

所沢市教育委員会

所沢市立埋蔵文化財センター

（敬称略）

凡　例

1　本書中におけるＸ・Ｙの数値は、日本測地系（旧測地系）による平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値（m）を示し、各挿図における方位は、全て座標北を示す。

2　遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設定し、10ｍ×10ｍを基本グリッドとしている。

3　グリッドの名称は、遺跡ごとに北西杭を基準として、東西方向は西から東へ１、２、３…、南北方向は北から南へＡ、Ｂ、Ｃ…と付けている。
（例　Ａ－２グリッド）

4　本書の遺構の略号は以下のとおりである。
ＳＪ　竪穴住居跡　　ＳＫ　土坑
ＳＤ　溝跡　　ＳＥ　井戸跡
ＳＳ　古墳

5　本書の挿図の縮尺は、原則として以下のとおりである。
遺構　全体図　…１：400
住居跡・土坑・井戸跡・溝跡　…１：60
溝跡断面　…１：40
古墳跡　…１：160（遺構図）
１：80（断面図）
遺物　土器　…１：４
縄文土器拓影図　…１：３
石器　…２：３
金属製品　…１：２
その他の物に関しては、スケール及び縮尺率をその都度表記している。

6　須恵器は、断面を黒塗りしてあるが、酸化焔焼成となっているものは塗っていない。また、灰釉陶器については、施釉範囲を網かけで示した。
網は、灰釉５％、各陶器断面40％である。

7　遺構図における水平数値は、海抜高度を示しており、単位はｍである。

8　遺物観察表は次のとおりである。
・口径・器高・底径は、㎝を単位とする。
・（　）内の数値は推定値である。
・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。
Ａ：白色粒子　Ｂ：角閃石　Ｃ：石英
Ｄ：雲母　Ｅ：長石　Ｆ：赤色粒子
Ｇ：黒色粒子　Ｈ：白色針状物質　Ｉ：片岩
Ｊ：砂粒　Ｋ：小礫
・焼成は、良好・普通・不良の３段階に分けた。
・残存率は、図示した器形の部分に対して％で表した。
・（　）は現存の長さ・径を表す。

9　本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の１/50,000地形図と白地図１/2,500を使用した。

目　次

序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　発掘調査に至るまでの経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3　発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅲ　膳棚東遺跡 …… 8
　1　遺跡の概要 …… 8
　2　遺構と遺物 …… 12
　　（1）　古墳跡 …… 12
　　（2）　土坑 …… 17
　　（3）　ピット …… 19
Ⅳ　東内手遺跡 …… 21
　1　遺跡の概要 …… 21
　2　遺構と遺物 …… 24
　　（1）　住居跡 …… 24
　　（2）　土坑 …… 36
　　（3）　井戸跡 …… 50
　　（4）　溝跡 …… 51
　　（5）　ピット …… 53
　　（7）　グリッド出土遺物 …… 57
Ⅴ　北久米遺跡 …… 61
　1　遺跡の概要 …… 61
　2　遺構と遺物 …… 63
　　（1）　住居跡 …… 63
　　（2）　土坑 …… 65
　　（3）　井戸跡 …… 74
　　（4）　溝跡 …… 75
　　（5）　ピット …… 84
　　（6）　性格不明遺構 …… 89
　　（7）　グリッド出土遺物 …… 90
Ⅵ　まとめ …… 92
付編 …… 94
写真図版

挿 図 目 次

第１図　埼玉県の地形図 …… 4
第２図　周辺の遺跡 …… 5

〈膳棚東遺跡〉

第３図　調査区位置図 …… 9
第４図　膳棚東遺跡全体図 …… 10
第５図　調査区全測図 …… 11
第６図　第１号墳周溝出土遺物 …… 12
第７図　第１号墳・主体部 …… 13
第８図　第１号墳主体部出土遺物 …… 14
第９図　第２号墳 …… 15
第10図　第２号墳周溝出土遺物 …… 16
第11図　土坑 …… 18
第12図　ピット …… 19

〈東内手遺跡〉

第13図　東内手遺跡調査区全測図（１） …… 21
第14図　東内手遺跡調査区全測図（２） …… 22
第15図　東内手遺跡調査区位置図 …… 23
第16図　第１号住居跡・カマド …… 25
第17図　第１号住居跡遺物出土状況 …… 26
第18図　第１号住居跡出土遺物 …… 26
第19図　第２号住居跡 …… 27
第20図　第２号住居跡カマド …… 28
第21図　第２号住居跡遺物出土状況 …… 29
第22図　第２号住居跡出土遺物 …… 30
第23図　第３号住居跡 …… 33
第24図　第３号住居跡カマド …… 32
第25図　第３号住居跡遺物出土状況 …… 33
第26図　第３号住居跡出土遺物 …… 34
第27図　第２・３号住居跡掘り方 …… 35
第28図　土坑（１） …… 37
第29図　土坑（２） …… 39
第30図　土坑（３） …… 41
第31図　土坑（４） …… 43
第32図　土坑（５） …… 45
第33図　土坑出土遺物（１） …… 47
第34図　土坑出土遺物（２） …… 48
第35図　土坑出土遺物（３） …… 48
第36図　土坑出土遺物（４） …… 49
第37図　土坑出土遺物（５） …… 50
第38図　第1号井戸跡 …… 50
第39図　第３号溝出土遺物 …… 51
第40図　第１～６号溝 …… 52
第41図　ピット（１） …… 54
第42図　ピット（２） …… 55
第43図　ピット出土遺物 …… 56
第44図　グリッド出土遺物（１） …… 58
第45図　グリッド出土遺物（２） …… 59
第46図　グリッド出土遺物（３） …… 60

〈北久米遺跡〉

第47図　北久米遺跡調査区位置図 …… 61
第48図　北久米遺跡全測図 …… 62
第49図　第１号住居跡 …… 63
第50図　第１号住居跡出土遺物 …… 64
第51図　土坑（１） …… 66
第52図　土坑（２） …… 67
第53図　土坑（３） …… 69
第54図　土坑（４） …… 70
第55図　土坑出土遺物（１） …… 72
第56図　土坑出土遺物（２） …… 73
第57図　井戸跡 …… 74
第58図　第１・２号溝 …… 75
第59図　第３～５号溝 …… 76
第60図　第６・11号溝 …… 77
第61図　第７～10号溝 …… 79
第62図　第12～14号溝 …… 80
第63図　第15号溝 …… 81
第64図　第16・17号溝 …… 82
第65図　第18・19号溝 …… 83
第66図　ピット（１） …… 85
第67図　ピット（２） …… 87

第68図　ピット出土遺物 …… 88
第69図　第１号性格不明遺構 …… 89
第70図　グリッド出土遺物 …… 91

〈付編〉
図－１　出土遺物の重量別ヒストグラム …… 93
図－２　蛍光Ｘ線分析法の結果チャート …… 94
図－３　Ｘ線回折試験法の結果チャート …… 94

表　目　次

〈膳棚東遺跡〉
第１表　第１号墳出土遺物観察表 …… 12
第２表　第２号墳ガラス小玉計測表 …… 14
〈東内手遺跡〉
第３表　東内手遺跡の既往調査一覧 …… 24
第４表　第１号住居跡出土遺物観察表 …… 26
第５表　第２号住居跡出土遺物観察表 …… 30
第６表　第３号住居跡出土遺物観察表 …… 33
第７表　土坑一覧表 …… 46
第８表　第３号土坑出土遺物観察表 …… 49
第９表　第22号土坑出土遺物観察表 …… 49
第10表　第28号土坑出土遺物観察表 …… 50
第11表　第49号土坑出土遺物観察表 …… 50
第12表　第11号土坑出土遺物観察表 …… 50
第13表　第３号溝出土遺物計測表 …… 51
第14表　ピット一覧表 …… 53
〈北久米遺跡〉
第15表　第1号住居跡出土遺物観察表 …… 64
〈付編〉
表－１　蛍光Ｘ線分析法の諸元 …… 93
表－２　Ｘ線回折分析法の諸元 …… 93
表－３　元素組成の概要 …… 93

図 版 目 次

〈膳棚東遺跡〉
図版１　調査区南部全景　　調査区北部全景
図版２　第１号墳　　第１号墳主体部
図版３　第１号墳・第２号墳周溝
　　第２号墳南側周溝
図版４　第48号土坑　　第49号土坑
図版５　第51号土坑　　第54号土坑
図版６　第１号墳・第２号墳周溝出土遺物
　　第１号墳主体部出土遺物
〈東内手遺跡〉
図版７　東内手遺跡・北久米遺跡調査区全景
図版８　調査区北西部　　調査区南東部
図版９　Ａ区全景
図版10　Ｂ区北西部　　Ｂ区南東部
図版11　Ｂ区南東部
　　第１号住居跡遺物出土状況
図版12　第１号住居跡遺物出土状況
　　第１号住居跡

図版13　第２号住居跡遺物出土状況
図版14　第２号住居跡　　第２号住居跡カマド
図版15　第３号住居跡遺物出土状況
図版16　第３号住居跡カマド遺物出土状況
図版17　第３号住居跡　　第３号住居跡カマド
図版18　第１号土坑
第２号土坑遺物出土状況
第２号土坑・ピット７
第３号土坑遺物出土状況　　第３号土坑
第４号土坑
図版19　第５・６号土坑　　第７号土坑
第８号土坑　　第９・10号土坑
第11号土坑　　第12号土坑
第13号土坑・ピット17
第14・15号土坑
図版20　第16号土坑　　第17号土坑
第18～20号土坑
第21号土坑　　第22号土坑
第22号土坑遺物出土状況
第23号土坑　　第24号土坑
図版21　第26号土坑　　第29号土坑
第32～35号土坑　　第32・33号土坑
第36～38号土坑　　第39号土坑
第41号土坑　　第42号土坑
図版22　第43号土坑　　第45号土坑
第46号土坑　　第48号土坑
第49号土坑　　第51号土坑
第52号土坑　　第53号土坑
図版23　第54号土坑　　第56号土坑
第１号溝　　第３～６号溝
ピット13・14　　ピット６・25
ピット６遺物出土状況
第23号土坑・ピット34～40
図版24　第１号住居跡出土遺物
第２号住居跡出土遺物
第３号住居跡出土遺物
図版25　第３号住居跡出土遺物
第３号土坑出土遺物
第22号土坑出土遺物
図版26　土坑出土遺物（１）（２）
図版27　土坑出土遺物（３）
ピット出土遺物
図版28　グリッド出土遺物（１）
図版29　グリッド出土遺物（２）
図版30　グリッド出土遺物（３）
〈北久米遺跡〉
図版31　調査区全景
図版32　第１号住居跡遺物出土状況
第１号住居跡
図版33　第２号土坑　　第３・４号土坑
第７号土坑　　第８号土坑
第11号土坑　　第13号土坑
第14号土坑　　第15号土坑
図版34　第16号土坑　　第19号土坑
第20号土坑　　第22号土坑
第３・４・５号溝　　第６号溝
第15・19号溝・第30号土坑
第15号溝・第１号性格不明遺構
図版35　第19号溝　　第１号性格不明遺構
第１号住居跡出土遺物
図版36　土坑出土遺物（１）（２）
図版37　ピット出土遺物
第１号性格不明遺構出土遺物
図版38　グリッド出土遺物

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至るまでの経過

埼玉県では、快適な県民生活と活力ある社会経済活動を支えるための円滑な道路交通を実現するため、体系的な道路網の形成を目指している。その中で西部複合都市圏の核として位置づけられる所沢周辺の道路網整整備構想にもとづき、都市計画道路飯能所沢線改築事業が計画された。

県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）ではこうした各種開発事業に対応するため、開発部局との事前協議を行い、文化財保護と開発事業の調整を進めてきた。

当事業にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、以下のとおりである。

膳棚東遺跡（№20－071）の埋蔵文化財の取扱いについては、県住宅都市部都市整備課長（当時）より、平成７年１月20日付け都整第1354号で、埋蔵文化財の所在及び取扱いについて、文化財保護課長あてに照会があった。これに対し、文化財保護課では平成８年２月13日付け教文第1172号で、「上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の３（現第94条）の規定に基づく、文化庁長官あての発掘（工事）通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施」すること、「発掘調査の実施については、当課と別途協議」が必要な旨を回答した。なお、膳棚東遺跡は平成８年度に第１次調査が実施されている。

北久米遺跡（№20－106）・東内手遺跡（№20－107）の埋蔵文化財の取扱いについては、県土整備部道路街路課長より平成12年３月10日付け都整第120号で、文化財保護課長あて埋蔵文化財の所在及び取扱いについて照会があった。これに対し、文化財保護課では平成13年10月３日付け教文第909号で、「工事予定地内には埋蔵文化財が所在しますので、工事着手に先立ち、文化財保護法57条の３（現第94条）の規定による発掘通知」を提出すること、「埋蔵文化財の所在する範囲については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施」すること、「発掘調査の実施については、当課と別途協議」が必要なことを回答した。

膳棚東遺跡（２次）、北久米遺跡、東内手遺跡の文化財保護法57条の３第１項（現第94条）の規定による発掘の通知は平成14年３月12日付け道街第946号で出され、それに対する県教育委員会教育長からの指示通知は平成14年３月25日付け教文第３－1118号で行った。なお、各遺跡の発掘調査期間は次のとおりである。

膳棚東遺跡

平成14年４月８日～平成14年４月30日

北久米遺跡

平成14年９月１日～平成14年11月30日

東内手遺跡

平成14年12月１日～平成15年１月31日

また、文化財保護法第57条第１項（現第92条）の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

膳棚東遺跡

平成14年５月13日付け　教文第２－９号

北久米遺跡

平成14年９月３日付け　　教文第２―56号

東内手遺跡

平成14年９月３日付け　　教文第２―57号

（埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課）

2　発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

膳棚東遺跡の発掘調査は、平成14年４月８日から平成14年４月30日まで実施した。調査区は平成９年度に発掘調査が行われた北東側の拡幅で、調査面積は428㎡である。

当初から、重機による表土の掘削・現場事務所設置を並行して行い、現場事務所設置後に発掘器材の搬入を行った。表土掘削・除去は北西側から南東側へと行い、掘削終了部分から補助員による遺構確認作業を行った。表土掘削・除去終了後、基準点測量とグリッド設定を行った。

遺構確認の結果、円墳跡と埋葬施設である主体部・土坑・ピットが確認された。

遺構ごとに精査を行った。土層断面図の作成、個別の写真撮影を行い、遺構平面図の作成をした。遺構調査がすべて終了し、全景の写真撮影をし調査を終了した。その後、器材撤収と埋め戻しを行い、埋め戻し終了後に現場事務所の撤去を行った。

東内手遺跡・北久米遺跡の発掘調査は、平成14年９月１日から平成15年１月31日まで実施した。調査面積は東内手遺跡が4,125㎡、北久米遺跡が2,125㎡である。

９月　事務諸手続きと現場事務所設置を行った。また、調査区は住宅が隣接しているため、防塵ネットで調査区を囲う作業を行った。現場事務所の設置後、器材の搬入をした。

防塵ネット設置後、重機による表土掘削・除去を行った。排土置き場は両遺跡ともに確保できなかったため調査区を２分割して、半分の調査を終了後、排土を反転して残りの調査区の表土掘削除去を行う工程となった。東内手遺跡の調査区内道路を挟んだ西側を重機による表土掘削・除去終了後に補助員による遺構確認を行った。

10月　北久米遺跡は、調査区東半の重機による表土掘削・除去と遺構確認を行った。

東内手遺跡では、遺構ごとに精査を行った。土層断面図の作成、個別の写真撮影を行い、遺構平面図の作成をした。

11月　東内手遺跡西半部終了後、北久米遺跡の東半部の遺構精査を行った。土層断面図の作成、個別の写真撮影を行い、遺構平面図の作成をした。

12月　両遺跡の調査終了後、空中写真撮影を行った。両遺跡残り半分の調査のため排土を反転し、北久米遺跡の西半部及び東内手遺跡の東半部の表土掘削・除去を行った。遺構確認後、北久米遺跡の遺構精査を行った。土層断面図の作成、個別の写真撮影を行い、遺構平面図の作成をした。

１月　東内手遺跡の東半部の遺構精査を行った。土層断面図の作成、個別の写真撮影を行い、遺構平面図の作成をした。両遺跡の調査終了後、空中写真撮影を行った。

すべて終了し器材撤収と埋め戻しを行い、現場事務所の撤去を行った。

整理・報告書作成

整理・報告書作成は、平成17年11月１日から平成18年２月28日まで実施した。

11月　遺物の水洗・注記後に接合・復元を行い、実測を行った。並行して、遺構図・写真類の整理、第２原図の作成を行った。

12月　引き続き第２原図の作成をした。データ編集は遺構ごとの土層注記の入力、遺構計測データで計測表等の作成をした。遺構図は第２原図を用い仮版を作成し、スキャナーでスキャンニングしパソコン内に取り込み遺構図のトレースを行い、諸記号・数字・スケール・土層説明等の貼り込みも行い作成した。

１月　スキャンニングした遺構図のトレースを引き続き行った。遺物は実測図で図示し切れない部分等は拓影を採り、実測図を製図ペンで墨入れしたものと組み合わせて版組し、番号・スケールなどの貼

り込みをして、遺物図版を作成した。また、復元した遺物は１点ごとに写真撮影を行った。

２月　写真図版は、調査時に撮影した写真を選択し、遺物写真とともにトリミング等を行った。

原稿執筆終了後、原稿・遺構図・遺物図・遺物観察表と写真を用い報告書の割付を行った。更に、遺構図は印刷できるようにデータ処理をした。

図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。報告書印刷用原稿等の入稿後３回の校正を経て、３月下旬に報告書を刊行した。

3　発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

発掘調査（平成14年度）

理事長	桐川卓雄
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	大舘　健
管理部	
管理幹	持田紀男
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池　久
調査部	
調査部長	高橋一夫
調査部副部長	坂野和信
専門調査員	村田健二
(調査第１担当)	
統括調査員	山本　禎
統括調査員	伴瀬宗一

整理事業（平成17年度）

理事長	福田陽充
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	保永清光
管理部副部長	村田健二
主席	高橋義和
主席	宮井英一
主任	長滝美智子
	（８月まで）
主任	福田昭美
主任	菊池　久
主事	海老名　健
主事	岩上浩子
	（８月から）
調査部	
調査部長	今泉泰之
調査部副部長	坂野和信
主席調査員	磯崎　一
(資料整理第１担当)	
統括調査員	山本　禎
統括調査員	大谷　徹

II　遺跡の立地と環境

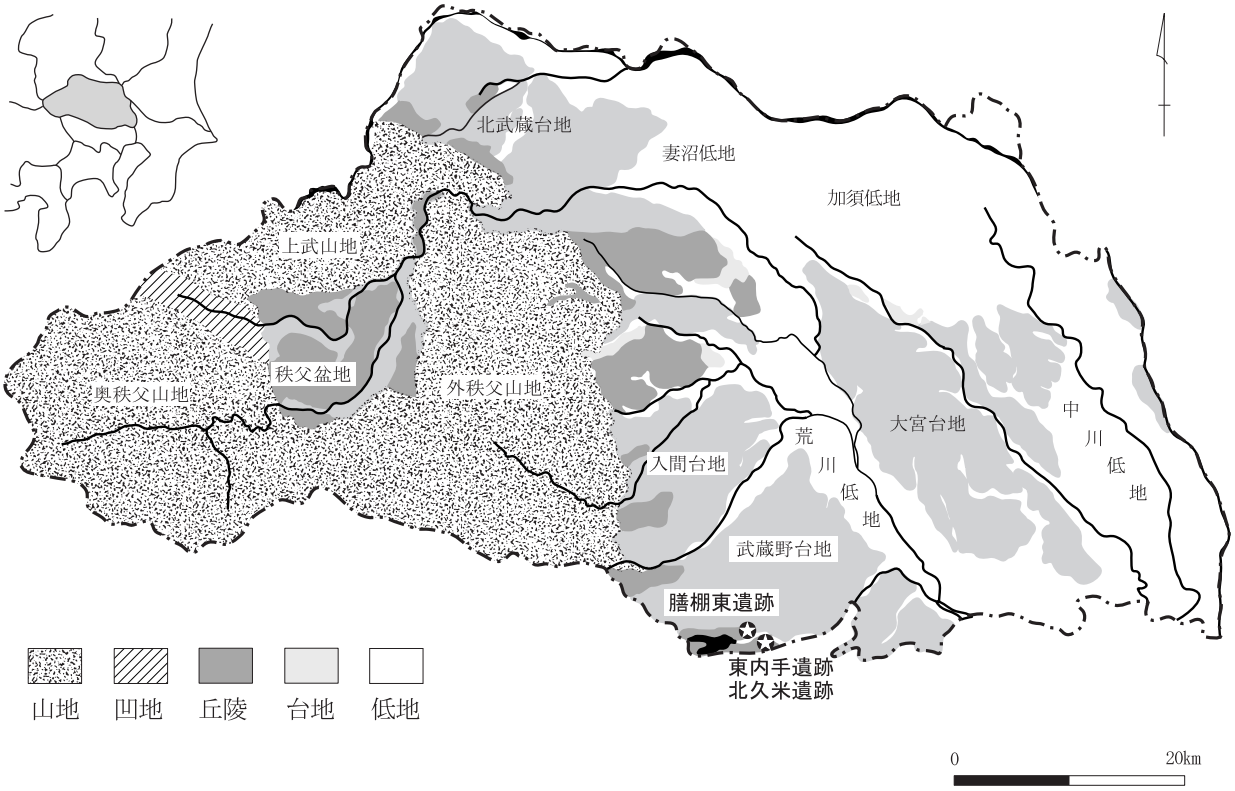
膳棚東遺跡・東内手遺跡・北久米遺跡が所在する所沢市は、埼玉県南西部に位置し、主に武蔵野台地、狭山丘陵、低地から成っている。武蔵野台地は古多摩川の解析によってできたもので、埼玉県南西部から東京都北東部にかけて広がる広大な台地である。武蔵野台地から孤立した丘陵部である狭山丘陵は、その約半分が所沢市の南側にかかる。したがって所沢市の地形は北東及び東側方向に向かって緩やかな傾斜が創り出されているが、所々に狭山丘陵を水源とする小河川によって谷地形が形成されている。膳棚東遺跡は狭山丘陵を南に臨む標高87ｍ程の所沢台地上に立地する。

狭山丘陵を水源とする数筋の小河川が流れており、膳棚東遺跡に西側を東から南に流れを変えて流れる六ツ家川もその一つである。この川は、狭山丘陵の北東外縁に沿って、丘陵と台地の境界である谷筋を流れる川幅２ｍにも満たない小川であるが、かつては台地崖下の多量の水流を集める清流であった。

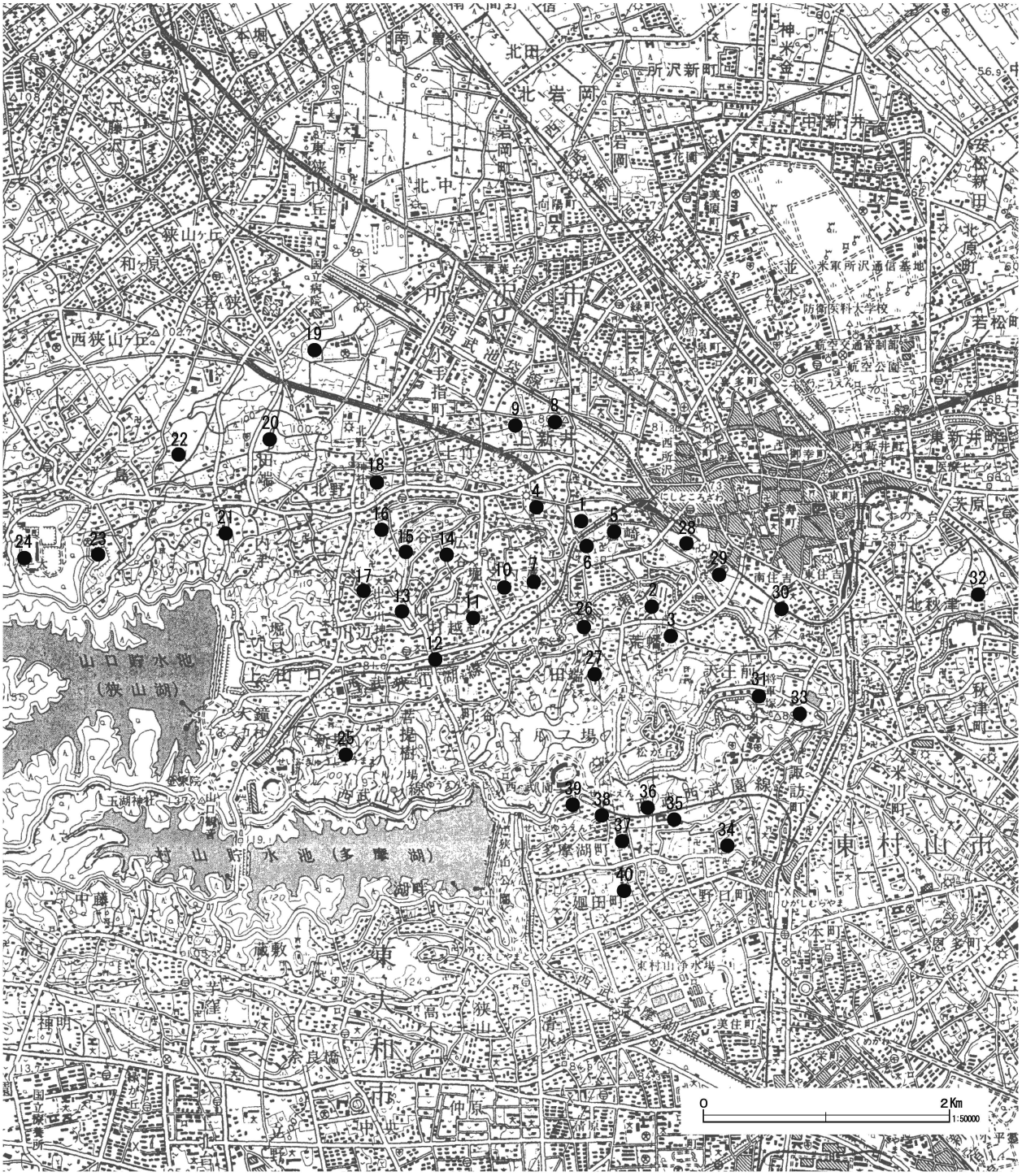
膳棚東遺跡をのせる台地は南側に傾斜し、比高差19ｍの谷が東から入る。その谷の中央には狭山湖を水源とする柳瀬川が蛇行を繰り返しながら東流している。

東内手遺跡・北久米遺跡は狭山丘陵の東端部にあたり、北側に柳瀬川が東流している。全体的に痩せ尾根の支丘と支谷が樹枝状に発達し、また、丘陵北面に三日月状の台地が付随する起伏に富んだ地形である。東内手遺跡は丘陵北側の舌状の小台地の一つにあり、北久米遺跡は柳瀬川からの小支谷を挟んで東に対峙する。

所沢市内を流れる河川は、不老川・砂川堀・東川・柳瀬川の四つの河川及びその支流からなっている。不老川は北西部の台地上を北東方向に流れ、砂川堀



第１図　埼玉県の地形図



1	膳棚東遺跡	2	東内手遺跡	3	北久米遺跡	4	膳棚遺跡	5	村中遺跡
6	荒久遺跡	7	六ッ家遺跡	8	ハケ遺跡	9	上新井台遺跡	10	西椿峰遺跡
11	美園上遺跡	12	山口城跡	13	城上第二遺跡	14	野竹遺跡	15	海谷遺跡
16	宮前遺跡	17	高峰遺跡	18	吉野・場北遺跡	19	中砂遺跡	20	白旗塚遺跡
21	後内手遺跡	22	砂川遺跡	23	日向遺跡	24	お伊勢山遺跡	25	前久保峰遺跡
26	本村遺跡	27	畦の前遺跡	28	山下後遺跡	29	境窪遺跡	30	東の上遺跡
31	竹ノ花遺跡	32	北秋津横穴墓群	33	東村山市№24遺跡	34	東村山市№33遺跡	35	鍛冶谷ツ遺跡
36	東村山市№18遺跡	37	日向北遺跡	38	下宅部遺跡	39	東村山市№２遺跡	40	中の割遺跡

第２図　周辺の遺跡

は丘陵北麓の湧水を水源とし台地上を北東方向へ流れている。東川もやはり丘陵北麓の湧水を水源とするが所沢台を東へ流れている。柳瀬川は丘陵内部より東方向に流れる河川で、いずれの河川も新河岸川に合流している。これらの河川の流域には多くの遺跡が分布している。

周辺の遺跡は先土器時代から江戸時代まで多岐にわたり、とりわけ先土器時代と縄文時代の遺跡が数多くみられる。遺跡の分布は、狭山丘陵の北側と柳瀬川流域に集まる傾向がある。以下、時代毎に周辺の遺跡を概観する。

先土器時代の遺跡は、丘陵部にお伊勢山遺跡・日向遺跡、台地部では砂川遺跡・中砂遺跡があり、砂川遺跡ではＡ地点とＦ地点が調査され、ナイフ形石器の製作過程が明らかにされた点で重要な資料で国の重要文化財に指定されている。中砂遺跡では石器集中区24箇所・礫群39箇所が検出され、尖頭器・細石器や小型の国府型ナイフ形石器が検出され、県指定重要文化財となっている。東川流域には場北遺跡・後内手遺跡・白旗塚遺跡・上新井台遺跡・ハケ遺跡、柳瀬川流域には宮前遺跡・膳棚遺跡・北久米遺跡・山下後遺跡・和田遺跡・本郷東上遺跡・甲館出遺跡などがある。北久米遺跡では石器集中区が４箇所検出された。

縄文時代の遺跡は、丘陵部にお伊勢山遺跡・日向遺跡・高峰遺跡・野竹遺跡・畦の前遺跡がある。東川流域では後内手遺跡・白旗塚遺跡・上新井台遺跡・ハケ遺跡・南山遺跡・中台遺跡・茨山遺跡・屋敷前遺跡・城西ノ上遺跡がある。柳瀬川流域では吉野遺跡・宮前遺跡・海谷遺跡・前久保峰遺跡・美園上遺跡・膳棚遺跡・膳棚東遺跡・六ッ家遺跡・本村遺跡・東内手遺跡・山下後遺跡・境窪遺跡・東の上遺跡・竹ノ花跡・山際遺跡・下安松遺跡・和田遺跡・西上遺跡・本郷東上遺跡がある。

柳瀬川流域の所沢台に立地する第二椿峰遺跡群の宮前遺跡では縄文時代の早期の住居跡３軒と炉穴38基が検出されている。海谷遺跡は縄文早期・前期・中期にわたる大集落である。六ツ家川と柳瀬川が合流する南に張り出した台地上に立地する山下後遺跡からは条痕文系土器や炉穴などが検出された。丘陵部のお伊勢山遺跡では撚糸文系、押型文、沈線文系、条痕文系の早期各段階の土器や石器が出土している。柳瀬川と東川の合流付近の舌状台地上に城遺跡で前期の住居跡が検出されている。

前述の海谷遺跡は縄文中期の大集落であるが、所沢台上の膳棚遺跡、所沢台の縁辺柳瀬川左岸に位置する西上遺跡・和田遺跡・山下後遺跡、右岸の畦の前遺跡などがある。丘陵北部に位置する高峰遺跡からは縄文中期中葉から後葉にかけての住居跡46軒が検出されている。その他に、東側流域の白旗塚遺跡などがある。膳棚東遺跡からは今回の調査を含めると中期の住居跡４軒・落とし穴状土坑12基が検出されている。後期以降は相対的に少なく、小規模化している。

弥生時代では後期にならないと遺跡は確認できない。丘陵部の日向遺跡、台地部では東川流域の後内手遺跡、柳瀬川流域に宮前遺跡、東の上遺跡があり、東の上遺跡では住居跡50軒・方形周溝墓３基が検出され、宮前遺跡でも方形周溝墓６基が検出されている。

古墳時代は、丘陵部に台遺跡・お伊勢山遺跡・日向遺跡・高峰遺跡・野竹遺跡・城上第二遺跡・畦の前遺跡がある。台地部では東川流域に後内手遺跡がある。柳瀬川流域では吉野遺跡・新山遺跡、第二椿峰遺跡群の宮前遺跡と海谷遺跡や山口城跡・美園上遺跡・膳棚東遺跡・新久遺跡・村中遺跡・六ッ家遺跡・本村遺跡・東内手遺跡・北久米遺跡・山下後遺跡がある。前期の遺跡は、第二椿峰遺跡群の宮前遺跡をはじめ吉野遺跡・泉遺跡がある。高峰遺跡は中期から後期にかけて住居跡33軒が検出された。中期になると第二椿峰遺跡群では宮前遺跡から海谷遺跡へ主体が移動している。後期には主体が宮前遺跡へ再び移動している。日向遺跡で24軒が検出されたが、畦の前遺跡・美園上遺跡・山口城跡・野竹遺

跡・城上第二遺跡・後内手遺跡・東内手遺跡はいずれも小規模のものである。古墳は海谷遺跡で２基、膳棚東遺跡で２基、村中遺跡で１基、山下後遺跡で２基の円墳跡が確認され、山下後遺跡の２基と膳棚東遺跡の１基は木棺直葬系の埋葬施設であった。また、柳瀬川の侵食により生じた左岸の崖線では、北秋津横穴墓群・滝ノ城横穴墓群が確認された。

奈良・平安時代では、丘陵部にお伊勢山遺跡・畦の前遺跡、台地部では柳瀬川流域に東の上遺跡・美園上遺跡などがある。東の上遺跡は80次を越える発掘調査が行われ、住居跡240軒以上、掘立柱建物跡40棟以上が検出されている。最近になって、両側に側溝をもつ幅12ｍの道路跡（東山道武蔵路）が長さ300ｍ余りに亘って検出されたことから入間郡衙説より駅家説が高まってきた。

中世では、丘陵部の野竹遺跡からは掘立柱建物跡19棟、火葬墓５基などが検出され、舶載陶磁器類、瀬戸美濃産陶器、常滑産炉器や約5,000枚の古銭が出土した。13世紀から16世紀の在地土豪層の居館と考えられている。台地部の柳瀬川流域の滝之城跡からは障子堀・四脚門跡などが検出された。山口城跡では堀跡・土塁が検出され、板碑・常滑産壺・擂り鉢・甕・瀬戸美濃産の擂り鉢が出土し、16世紀の廃城に近い時期の遺物と考えられている。東の上遺跡からは伝承鎌倉街道の掘割遺構が検出されている。

Ⅲ　膳棚東遺跡

1　遺跡の概要

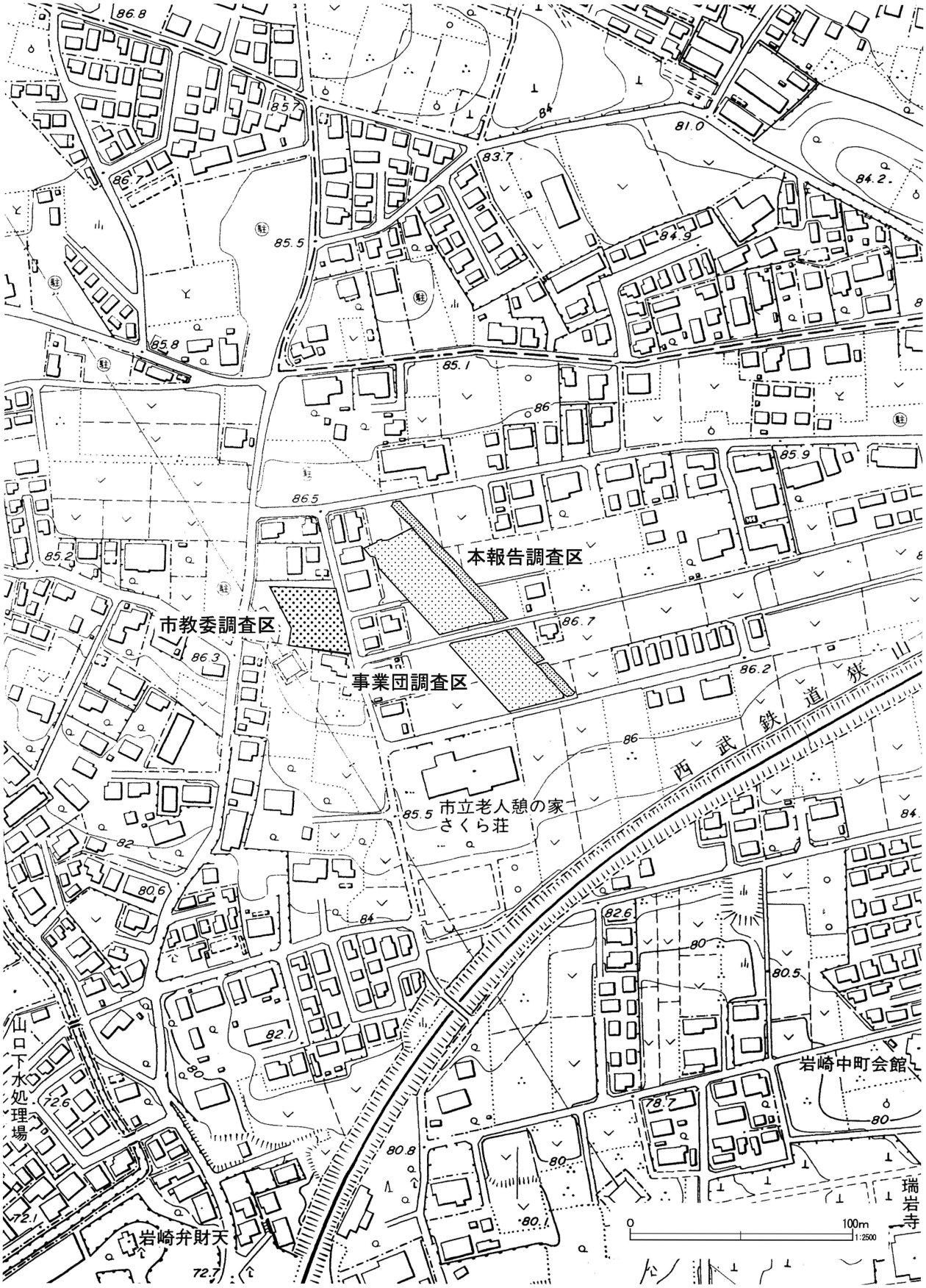
膳棚東遺跡は、所沢市大字山口字新田に所在し、東西に伸びる狭山丘陵を南に臨む標高87ｍ程の所沢台地上に立地する。周辺には狭山丘陵を水源とする数筋の小河川が流れており、膳棚東遺跡の西側を東から南に流れを変えて流れる六ツ家川もその一つである。この川は、狭山丘陵の北東外縁に沿って丘陵と台地の境界である谷筋を流れる川幅２ｍにも満たない小川であるが、かつては台地崖下の多量の水流を集める清流であった。台地は南側に傾斜し、比高差19ｍの谷が東から入る。その谷の中央には狭山湖を水源とする柳瀬川が蛇行を繰り返しながら東流している。

膳棚東遺跡は、縄文時代中期の遺跡として知られる膳棚遺跡の南東側に隣接している。膳棚遺跡は所沢市教育委員会による９回の発掘調査が行われ、縄文時代・近世の遺跡であることが確認されている。この中で特に縄文時代がその中心である。これまでの調査で縄文時代の住居跡60軒以上、土坑70基以上を検出した縄文時代中期の集落遺跡である。しかし、住居跡の主体は遺跡範囲の西側に位置し、東側は落とし穴状土坑が中心で狩猟の場といった捉え方をするようになった。

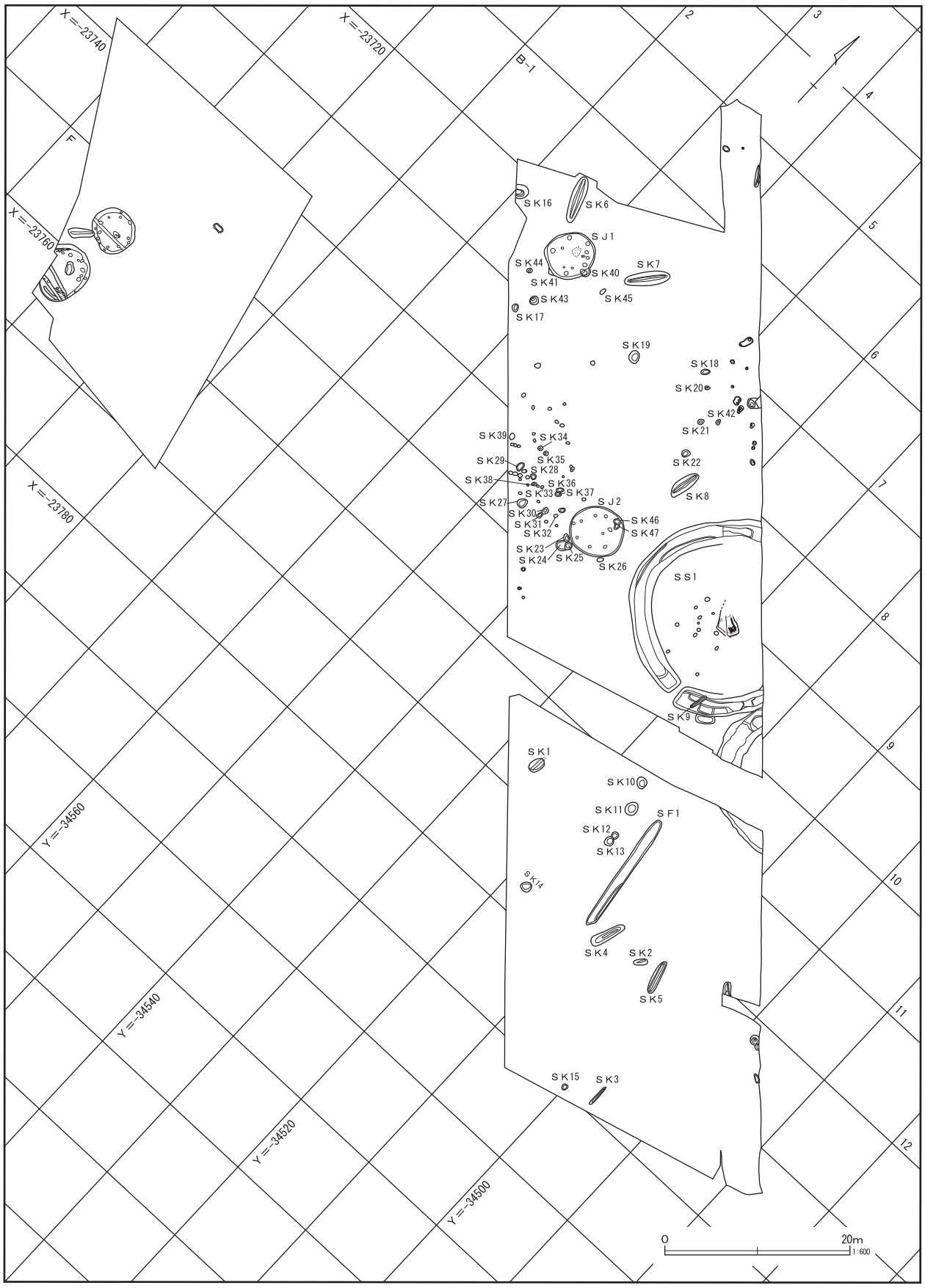
膳棚東遺跡は、所沢市教育委員会の発掘調査と今回を含め当事業団の発掘調査２回で合わせて３回の発掘調査が行われ、今調査は第３次調査にあたる。市教育委員会の発掘調査では、縄文時代中期の住居跡２軒・土坑２基が検出され、そのうち土坑１基は落とし穴状土坑であった。当事業団の発掘調査は都市計画道路飯能所沢線に関する調査で、縄文時代中期の住居跡２軒、土坑47基、古墳時代の古墳跡１基、土坑１基、炭焼き窯１基が検出され、縄文時代の土坑のうち９基は落とし穴状土坑であった。今回の発掘調査も都市計画道路飯能所沢線に関する調査で前調査区の東側隣接範囲の拡幅部分であり、古墳跡の周溝の一部と主体部とみられる粘土施設が検出されることが見込まれていた。発掘調査の結果、土坑10基、古墳跡２基、古墳主体部１基が検出され、土坑のうち２基は落とし穴状土坑であった。

出土遺物は、古墳跡周溝から出土した須恵器甕の小片と第１号墳主体部から出土したガラス小玉・鉄製品と非常に少なかった。

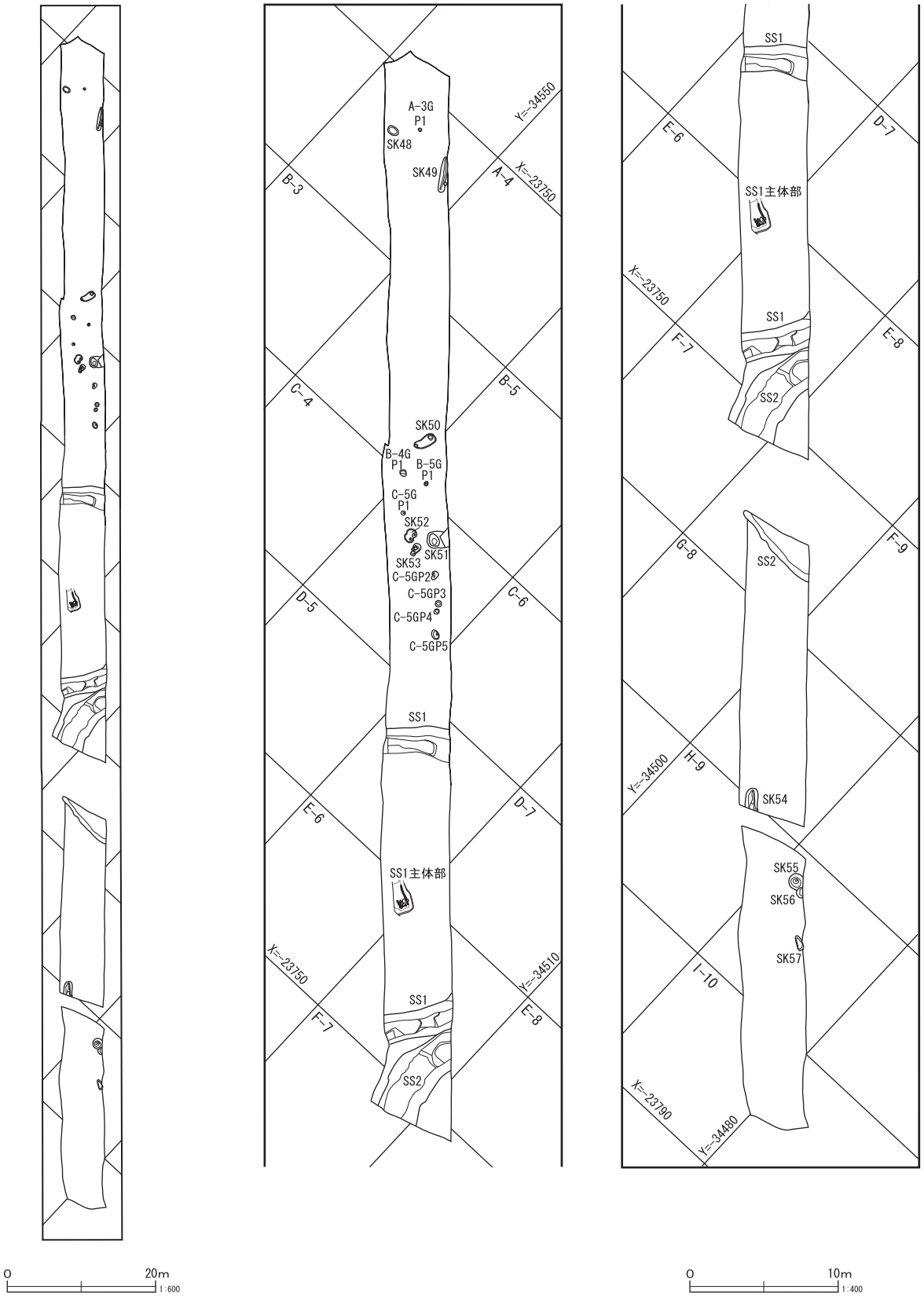
膳棚東遺跡は縄文時代の住居跡は疎らで落とし穴状土坑があることから、膳棚遺跡の東側と同じ様相を示している。古墳跡は新たに１基検出されたことから、古墳跡は更に東へ拡がるものと推定される。


本報告調査区
市教委調査区
事業団調査区
市立老人憩の家
さくら荘
西武鉄道狭山
岩崎中町会館
岩崎弁財天
山口下水処理場
瑞岩寺
0
100m
1:2500

第３図　調査区位置図



第４図　膳棚東遺跡全体図


A-3G
P1
SK48
SK49
Y=-34550
X=-23750
A-4
B-3
C-4
B-5
SK50
B-4G
P1
B-5G
P1
C-5G
P1
SK52
SK51
SK53
C-5GP2
C-5GP3
C-5GP4
C-5GP5
D-5
C-6
SS1
E-6
D-7
SS1主体部
X=-23750
Y=-34510
F-7
E-8
SS2
SS1
E-6
D-7
SS1主体部
X=-23750
SS1
F-7
E-8
SS2
G-8
F-9
SS2
Y=-34500
H-9
SK54
SK55
SK56
SK57
I-10
X=-23790
Y=-34480
0
20m
1:600
0
10m
1:400

第５図　調査区全測図

2　遺構と遺物

（1）古墳

第１号墳（第６～８図）

調査区中央部のＤ・Ｅ－６・７グリッドに位置する。南西部は以前に調査され北東側は調査区域外で、周溝の一部と主体部の検出である。第２号墳が南に接しているが、先後関係は不明である。

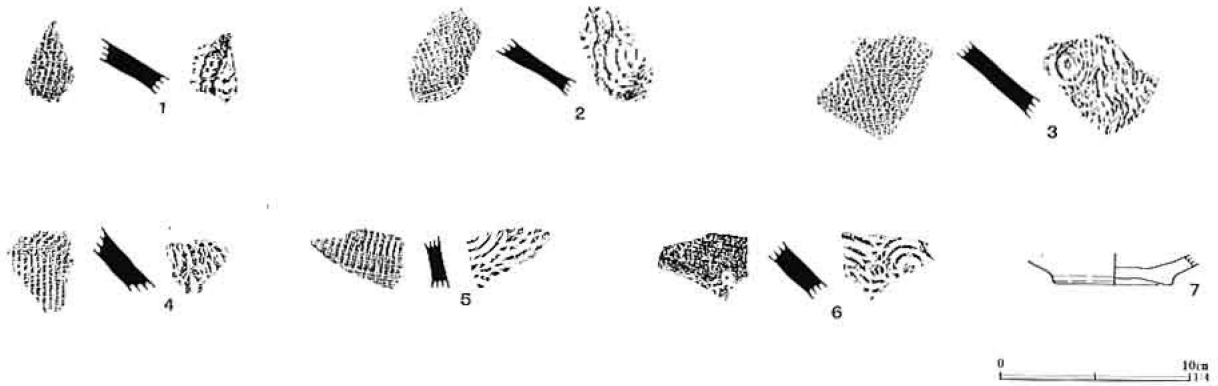
前回の調査から、規模は墳丘径16.16ｍ、周溝径20.8ｍ、周溝の幅は2.3ｍ、深さ0.6～0.9ｍの円墳である。今回の調査では主体部を中心とすると、北西から南東方向の墳丘径16.5ｍ、周溝径21.1ｍを測る。北西部周溝は幅2.7～3.55ｍ、深さ0.8ｍ、南東部周溝は幅1.8ｍ、深さ1.2ｍを測る。

墳丘部の平面形は、概ね形の整った円形を呈する。墳丘部は既に削平されていたが、主体部が確認できた。

主体部の上部はほとんどが削平され、基底部が検出されたのみであった。南から南西部が撹乱されており、遺存東西長1.95ｍ×遺存南北幅1.30ｍの浅い窪み状の土坑内に東西長1.8ｍ×南北幅0.9ｍの範囲で褐色粘土が確認でき、粘土の厚さは３～13㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－60°－Ｗを指す。

遺物は周溝から須恵器甕片、土師器甕底部が出土した。甕は平行叩き後カキメが施されており、内面は当て具痕の青海波文が残る。

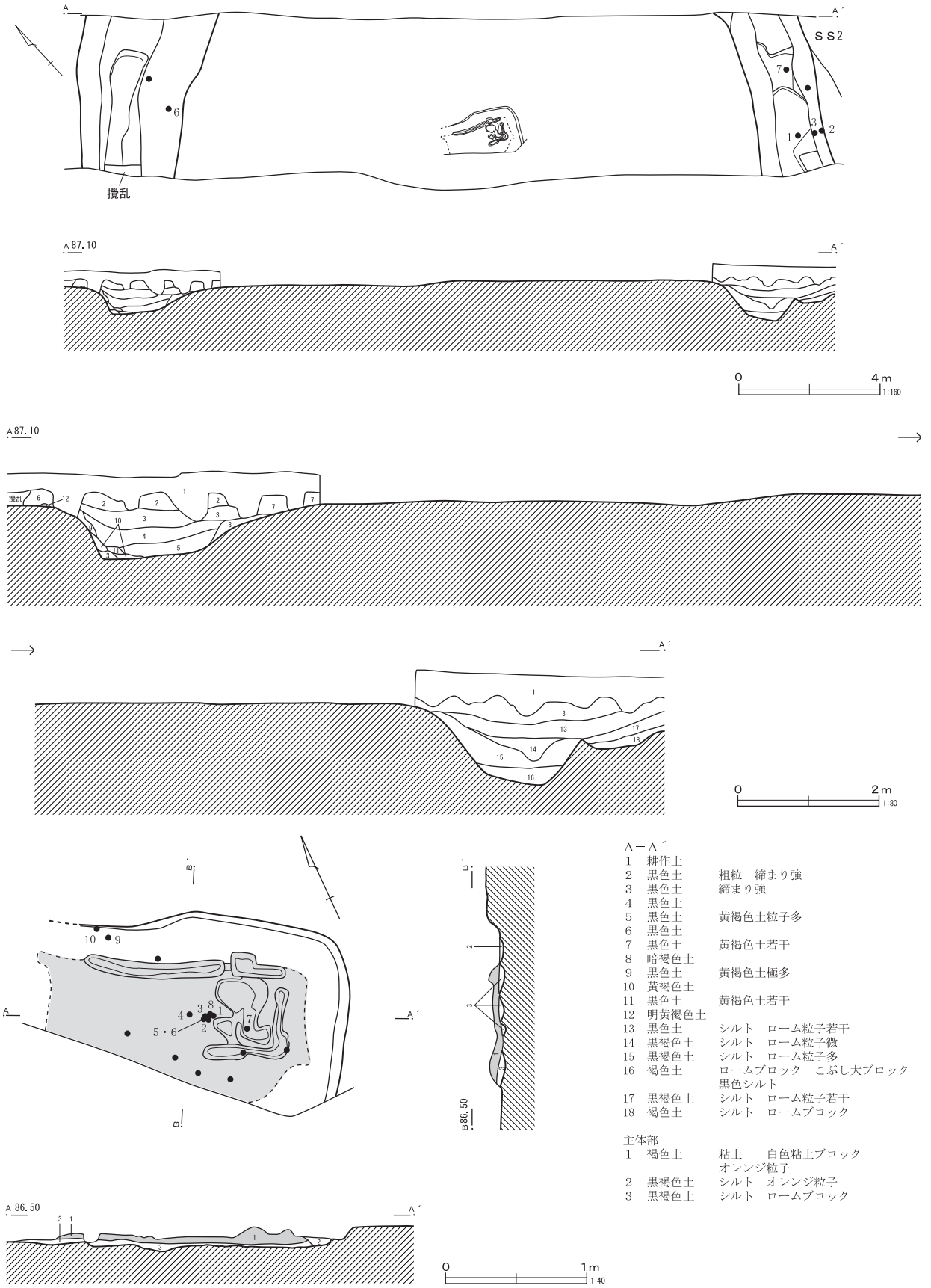
粘土施設の主体部の副葬品は、ガラス小玉40点、鉄板品・棒状品である。41の鉄板品は残存長2.5㎝、残存幅0.95㎝、厚さ0.1～0.15㎝。42の鉄製棒状品は残存長1.05㎝、幅0.15×0.2㎝。



第６図　第１号墳周溝出土遺物

第１表　第１号墳出土遺物観察表（第７図）

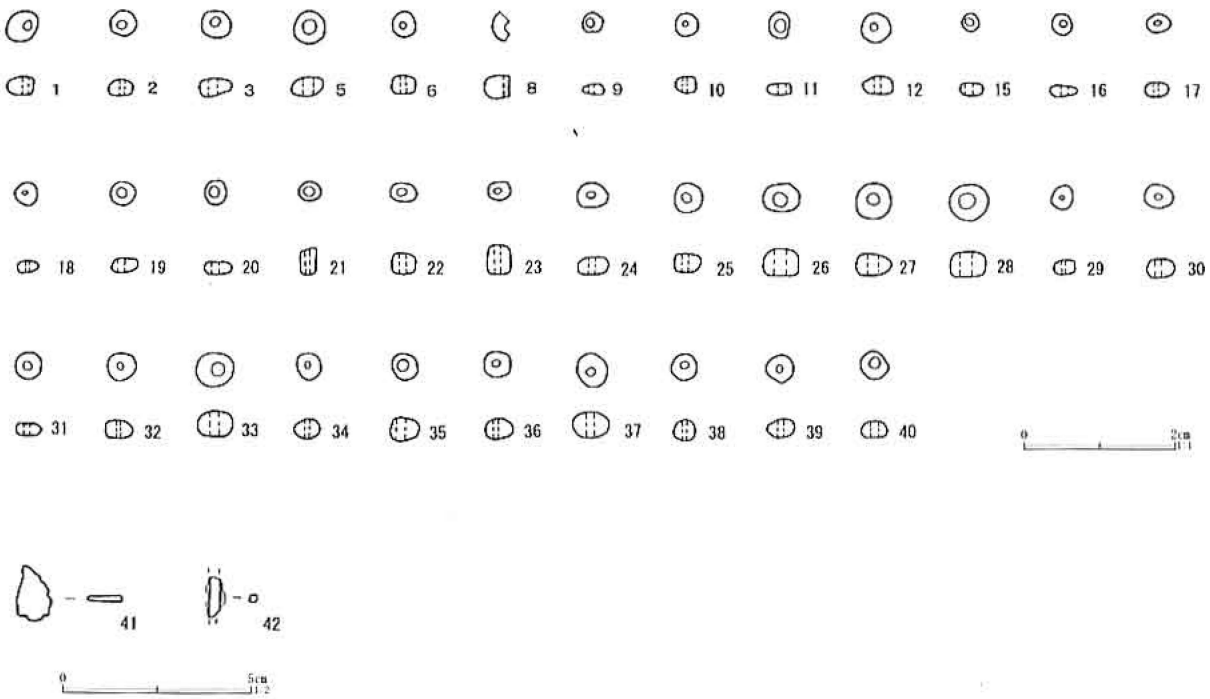
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
7	土師甕			6.3	ＦＪＫ	良好	明赤褐	底部	周溝	底部ヘラナデ整形



A－A´
1　耕作土
2　黒色土　　粗粒　締まり強
3　黒色土　　締まり強
4　黒色土
5　黒色土　　黄褐色土粒子多
6　黒色土
7　黒色土　　黄褐色土若干
8　暗褐色土
9　黒色土　　黄褐色土極多
10　黄褐色土
11　黒色土　　黄褐色土若干
12　明黄褐色土
13　黒色土　　シルト　ローム粒子若干
14　黒褐色土　　シルト　ローム粒子微
15　黒褐色土　　シルト　ローム粒子多
16　褐色土　　ロームブロック　こぶし大ブロック
　　黒色シルト
17　黒褐色土　　シルト　ローム粒子若干
18　褐色土　　シルト　ロームブロック

主体部
1　褐色土　　粘土　　白色粘土ブロック
　　オレンジ粒子
2　黒褐色土　　シルト　オレンジ粒子
3　黒褐色土　　シルト　ロームブロック

第７図　第１号墳・主体部



第８図　第１号墳主体部出土遺物

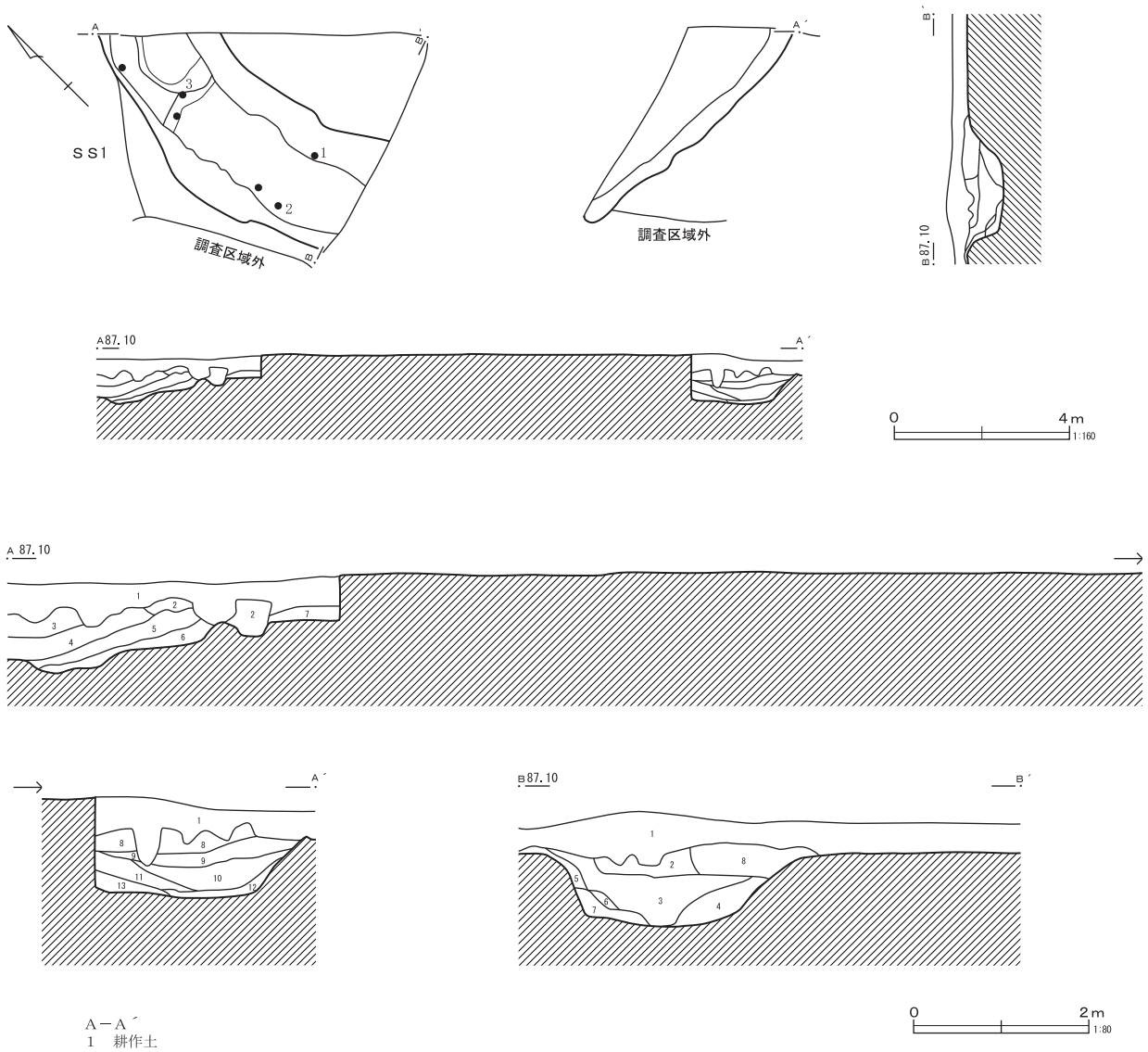
第２表　第１号墳出土ガラス小玉計測表（第８図）

番号	径(cm)	高さ(cm)	色調	備　考
1	0.36～0.40	0.22	水	
2	0.33	0.22	水	
3	0.38～0.39	0.22	紺	
4	破砕		水	
5	0.38～0.39	0.22	水	
6	0.35	0.21	水	
7	破砕		暗緑色	
8	(0.40)	0.24	水	破砕
9	0.31	0.15	水	
10	0.33～0.34	0.25	水	
11	0.32～0.35	1.56	水	一部欠
12	0.40	0.27	水	
13	(0.40)	(0.25)	青緑	粘土層 破砕
14	破砕	(0.23)	水	粘土層内
15	0.32～0.33	0.20	水	粘土層内
16	0.29～0.31	0.18	水	粘土層内
17	0.27～0.32	0.22	水	粘土層内
18	0.35～0.36	0.19	水	粘土層内
19	0.37～0.38	0.18	水	粘土層内
20	0.38	0.21	水	粘土層内
21	0.27～0.30	0.30	水	粘土層内
22	0.36～0.38	0.30	水	粘土層内
23	0.37～0.38	0.32	水	粘土層内
24	0.39～0.42	0.23	水	粘土層内
25	0.39	0.28	水	粘土層内
26	0.39～0.44	0.37	水	粘土層内
27	0.47	0.30	水	粘土層内
28	0.49～0.52	0.30	水	粘土層内
29	0.33	0.22	紺	粘土層内
30	0.36～0.38	0.22	紺	粘土層内
31	0.37～0.38	0.22	紺	粘土層内
32	0.41～0.42	0.26	紺	粘土層内
33	0.45～0.49	0.25	紺	粘土層内
34	0.38～0.40	0.27	浅黄	粘土層内
35	0.35	0.30	水	粘土層内
36	0.35～0.36	0.27	水	覆土
37	0.45～0.50	0.29	水	覆土
38	0.35	0.27	紺	覆土
39	0.35～0.37	0.24	紺	覆土
40	0.36～0.37	0.21	紺	覆土

第２号墳（第９・10図）

調査区中央部やや南西のＥ・Ｆ－７グリッドに位置する。西側中央は調査不可能であったため詳細は不明であるが、復元墳丘径12.８ｍ、復元周溝径16.０ｍ～18.２ｍと小型である。周溝幅は2.３～3.０ｍ、深さ0.６～0.８ｍを測る。

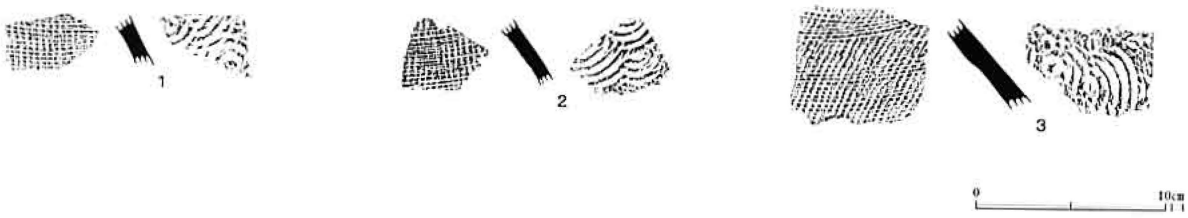
遺物は、周溝から須恵器甕片が出土した。平行叩き後カキメが施され、内面は当て具痕の青海波文が残る。



Ａ－Ａ´
1　耕作土
2　撹乱
3　黒色土　シルト　ローム粒子
4　黒色土　ローム粒子若干
5　黒褐色土　ローム粒子若干
6　褐色土　ロームブロック
7　黒褐色土　シルト
8　黒色土　やや粗粒
9　黒色土　黄褐色土粒子若干
10　黒褐色土　黄褐色土粒子微量
11　黒褐色土　黄褐色土粒子極多
12　褐色土
13　黒褐色土　粗粒

Ｂ－Ｂ´
1　耕作土
2　黒色土　やや粗粒
3　黒色土　黄褐色土粒若干
4　黒褐色土　黄褐色土粒子極多
5　黒色土　黄褐色土含
6　黒色土　黄褐色土混合土
7　褐色土
8　撹乱

第９図　第２号墳



第10図　第２号墳周溝出土遺物

（2）土坑

土坑は10基検出された。前調査区と接し同一遺跡であるため、土坑番号は前調査の続き番号とした。

第48号土坑（第11図）

Ａ－３グリッドに位置する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、80㎝×53㎝、深さ18㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－78°－Ｅを指す。

第49号土坑（第11図）

Ａ－３グリッドに位置し、北側が調査区域外となっている。平面形は、長楕円形を呈する。規模は、238㎝×43㎝、深さ77㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－32°－Ｗを指す。落とし穴状土坑である。

第50号土坑（第11図）

Ｂ－４グリッドに位置する。平面形は、不整楕円形を呈する。規模は、155㎝×71㎝、深さ８～30㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－16°－Ｅを指す。

第51号土坑（第11図）

Ｃ－５グリッドに位置し、北東側は撹乱及び調査区域外となっている。平面形は、楕円形を呈すると推定される。規模は、120㎝以上×110㎝、深さ40㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－44°－Ｅを指す。

第52号土坑（第11図）

Ｃ－５グリッドに位置する。平面形は、瓢形を呈する。規模は93㎝×53～70㎝、深さ７㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－９°－Ｗを指す。

第53号土坑（第11図）

Ｃ－５グリッドに位置する。平面形は、不整形を呈する。規模は、89㎝×30～55㎝、深さ18㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－９°－Ｗを指す。

第54号土坑（第11図）

Ｇ・Ｈ－９グリッドに位置し、南側は調査区域外となっている。平面形は、長楕円形を呈すると推定される。規模は、142㎝以上×83㎝、深さ110～148㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－33°－Ｗを指す。落とし穴状土坑である。

第55号土坑（第11図）

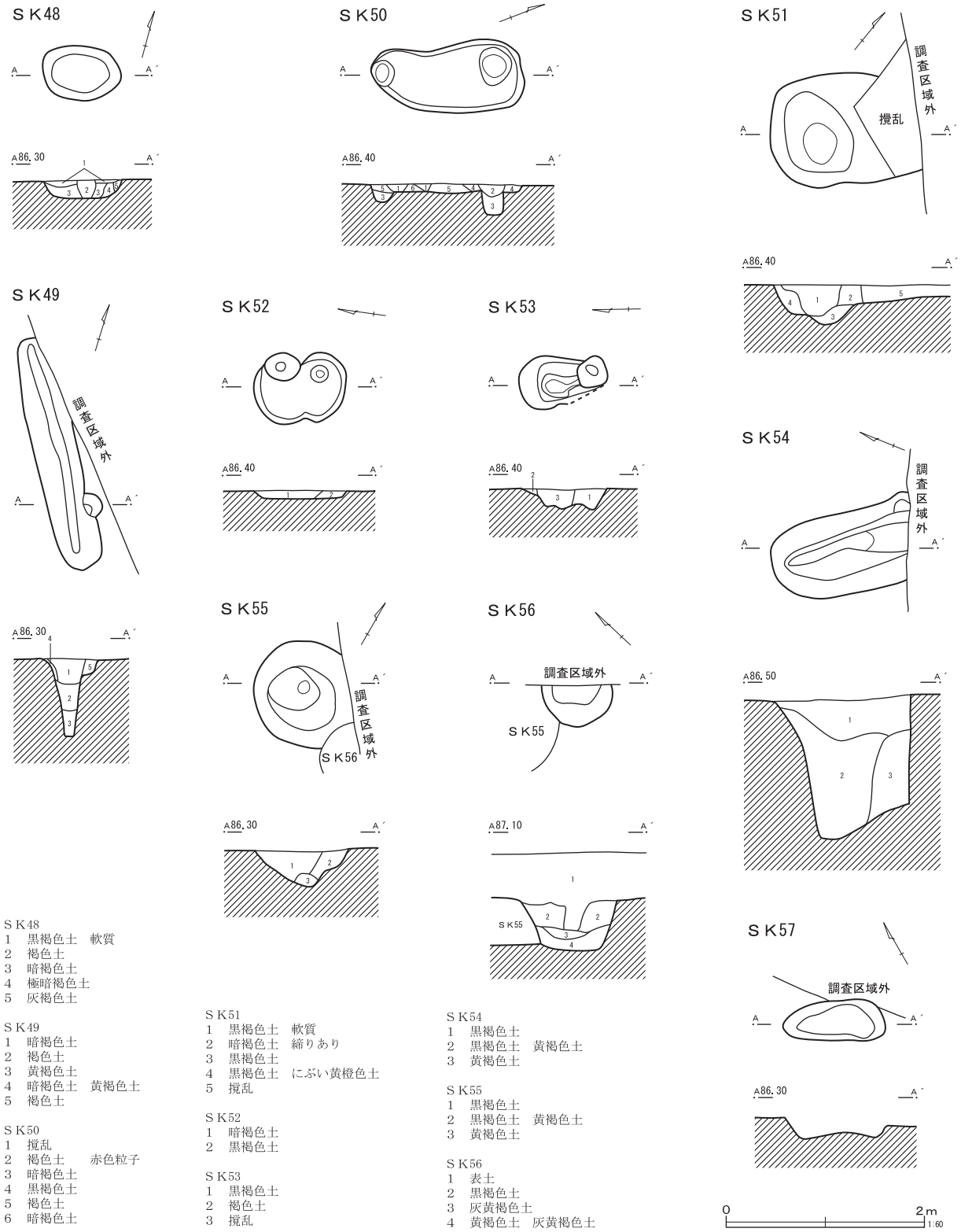
Ｈ－10グリッドに位置し、南東側は調査区域外となっている。第56号土坑と重複し、第56号土坑が新しい。平面形は、楕円形を呈すると推定される。規模は、径108㎝、深さ35㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－68°－Ｗを指す。

第56号土坑（第11図）

Ｈ－10グリッドに位置し、北東側は調査区域外となっている。第55号土坑と重複し、第55号土坑が古い。平面形は、円形を呈すると推定される。規模は、70㎝×40㎝以上、深さ50㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－45°－Ｗを指す。

第57号土坑（第11図）

Ｈ－10グリッドに位置する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、径103㎝、深さ48㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－59°－Ｗを指す。



ＳＫ48
1　黒褐色土　軟質
2　褐色土
3　暗褐色土
4　極暗褐色土
5　灰褐色土

ＳＫ49
1　暗褐色土
2　褐色土
3　黄褐色土
4　暗褐色土　黄褐色土
5　褐色土

ＳＫ50
1　撹乱
2　褐色土　　赤色粒子
3　暗褐色土
4　黒褐色土
5　褐色土
6　暗褐色土

ＳＫ51
1　黒褐色土　軟質
2　暗褐色土　締りあり
3　黒褐色土
4　黒褐色土　にぶい黄橙色土
5　撹乱

ＳＫ52
1　暗褐色土
2　黒褐色土

ＳＫ53
1　黒褐色土
2　褐色土
3　撹乱

ＳＫ54
1　黒褐色土
2　黒褐色土　黄褐色土
3　黄褐色土

ＳＫ55
1　黒褐色土
2　黒褐色土　黄褐色土
3　黄褐色土

ＳＫ56
1　表土
2　黒褐色土
3　灰黄褐色土
4　黄褐色土　灰黄褐色土

第11図　土坑

（3）ピット

ピットは、８基確認されたが並ぶようなものはなく、単独のものである。

Ａ－３グリッドピット１（第12図）

Ａ－３グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径20～23㎝、深さ15㎝を測る。

Ｂ－４グリッドピット１（第12図）

Ｂ－４グリッドに位置する。平面形は、不整楕円形を呈する。規模は、50㎝×42㎝、深さ29㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－０°を指す。

Ｂ－５グリッドピット１（第12図）

Ｂ－５グリッドに位置する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、30㎝×27㎝、深さ30㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－51°－Ｗを指す。

Ｃ－５グリッドピット１（第12図）

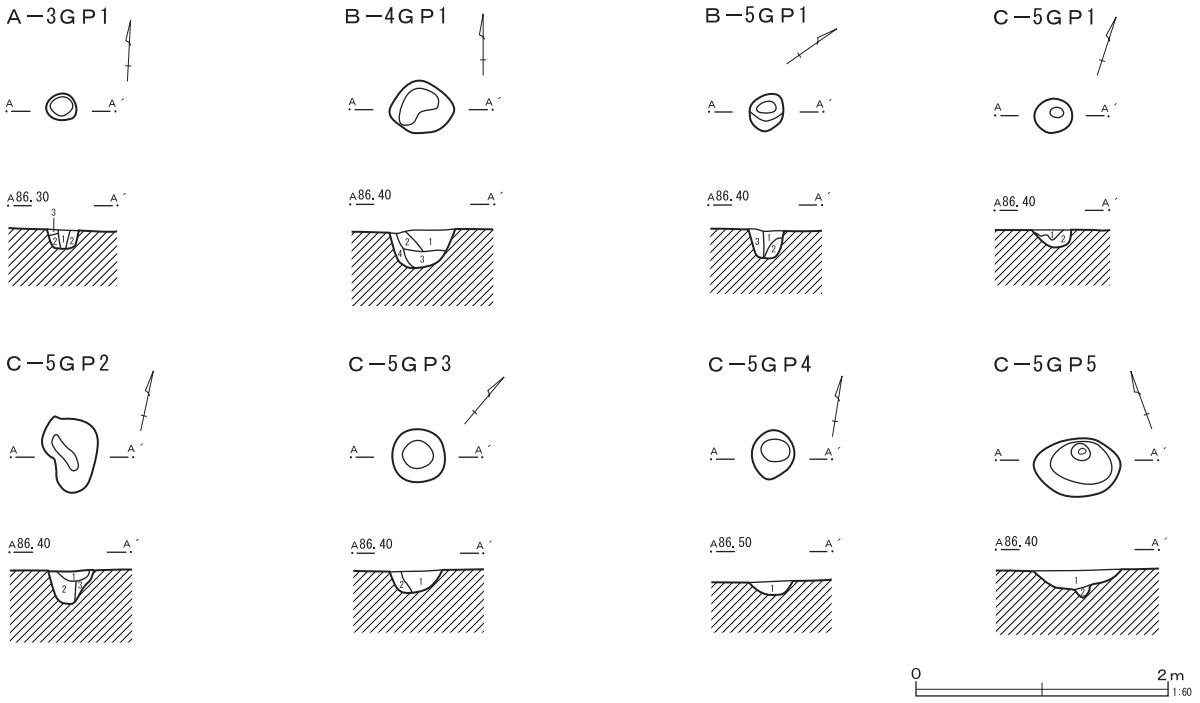
Ｃ－５グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径27～30㎝、深さ13㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－47°－Ｗを指す。

Ｃ－５グリッドピット２（第12図）

Ｃ－５グリッドに位置する。平面形は、不整形を呈する。規模は、57㎝×30～42㎝、深さ25㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－14°－Ｗを指す。

Ｃ－５グリッドピット３（第12図）

Ｃ－５グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径42㎝、深さ17㎝を測る。



Ａ－３Ｇ　Ｐ１
1　にぶい褐色土
2　黒褐色土
3　暗褐色土

Ｂ－４Ｇ　Ｐ１
1　黒褐色土　にぶい橙色土
2　にぶい黄褐色土　黒褐色土
3　黄褐色土　軟質
4　にぶい黄褐色土

Ｂ－５Ｇ　Ｐ１
1　灰黄褐色土
2　にぶい黄褐色土
3　撹乱

Ｃ－５Ｇ　Ｐ１
1　暗褐色土
2　黄褐色土

Ｃ－５Ｇ　Ｐ２
1　黒褐色土
2　にぶい黄褐色土
3　黄褐色土

Ｃ－５Ｇ　Ｐ３
1　黒褐色土　赤色・黒色粒子
2　褐色土

Ｃ－５Ｇ　Ｐ４
1　黒褐色土　にぶい黄褐色土

Ｃ－５Ｇ　Ｐ５
1　黒褐色土　黒色粒子
2　褐色土

第12図　ピット

Ｃ－５グリッドピット４（第12図）

Ｃ－５グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径33～38㎝、深さ11㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－６°－Ｗを指す。

Ｃ－５グリッドピット（第12図）

Ｃ－５グリッドに位置する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、68㎝×47㎝、深さ15～21㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－70°－Ｗを指す。

Ⅳ 東内手遺跡

1　遺跡の概要

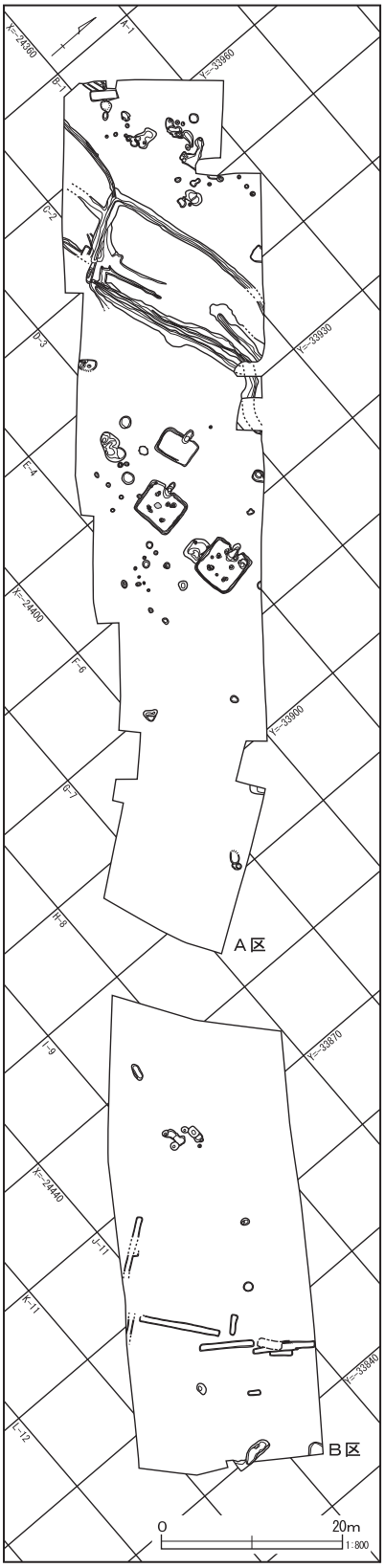
東内手遺跡は、西武池袋線西所沢駅の南方約0.8㎞、所沢市大字荒幡に所在する。東西200ｍ、南北100ｍほどの範囲に広がる旧石器・縄文・古墳・奈良・平安時代にわたる遺跡である。昭和63年の第１次調査以降、所沢市教育委員会を中心に現在までに計７回の発掘調査（第15図）が実施され、古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡15軒が調査されている。なお、今次調査は第７次調査にあたる。

本遺跡は、狭山丘陵を水源とする柳瀬川右岸に位置し、いわゆる三本指の中指に対比される狭山丘陵中央支丘の東端にあたり、丘陵鞍部から柳瀬川に向かう舌状台地に立地している。周囲は柳瀬川から入り込み、複雑に入り組んだ支谷が随所に見られる。標高は約69ｍで、遺物の散布は全体に稀薄であり、小規模な集落地・散布地と考えられる。

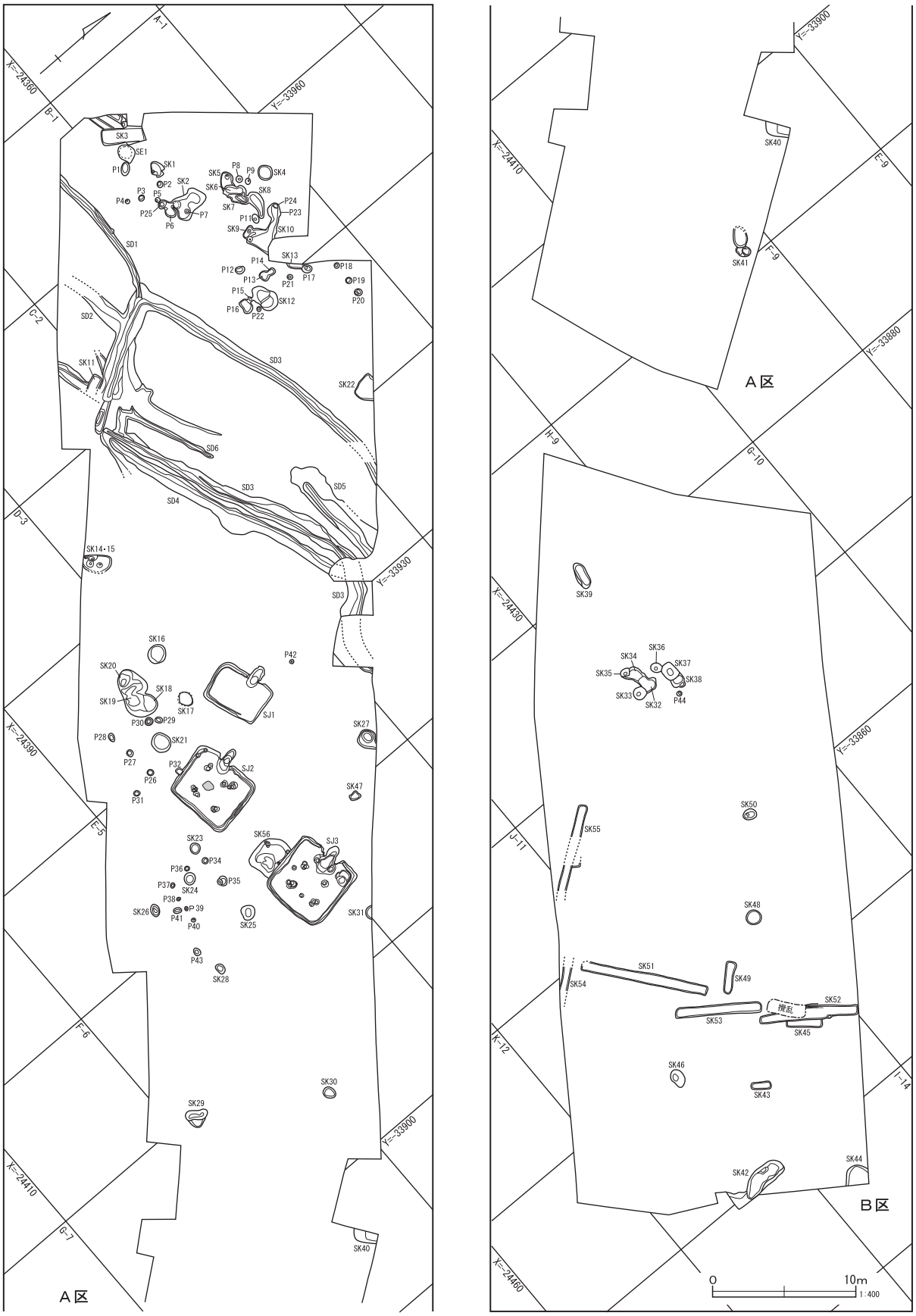
周辺の遺跡には、小支谷を挟んで南東には旧石器・弥生・古墳時代の北久米遺跡が所在しているほか、柳瀬川を挟んだ台地上には山下後遺跡、境窪遺跡、東の上遺跡などが分布している。

今回計画された道路建設予定地は、遺跡をのせる台地を北西から南東に横断するように延びており、東に延びる舌状台地の平坦部から南斜面地を横切る形で調査区が設定されている。便宜的にＡ区と呼称した北側調査区の北端で標高約70ｍ、Ｂ区と呼称した南側調査区の南端で標高約68ｍを測り、調査区内で約２ｍの比高差がある。遺構の分布は台地平坦部のＡ区北側に集中しており、南斜面地のＢ区ではやや希となる。検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡３軒、土坑56基、井戸跡１基、溝６条、ピット44基である（第13・14図）。

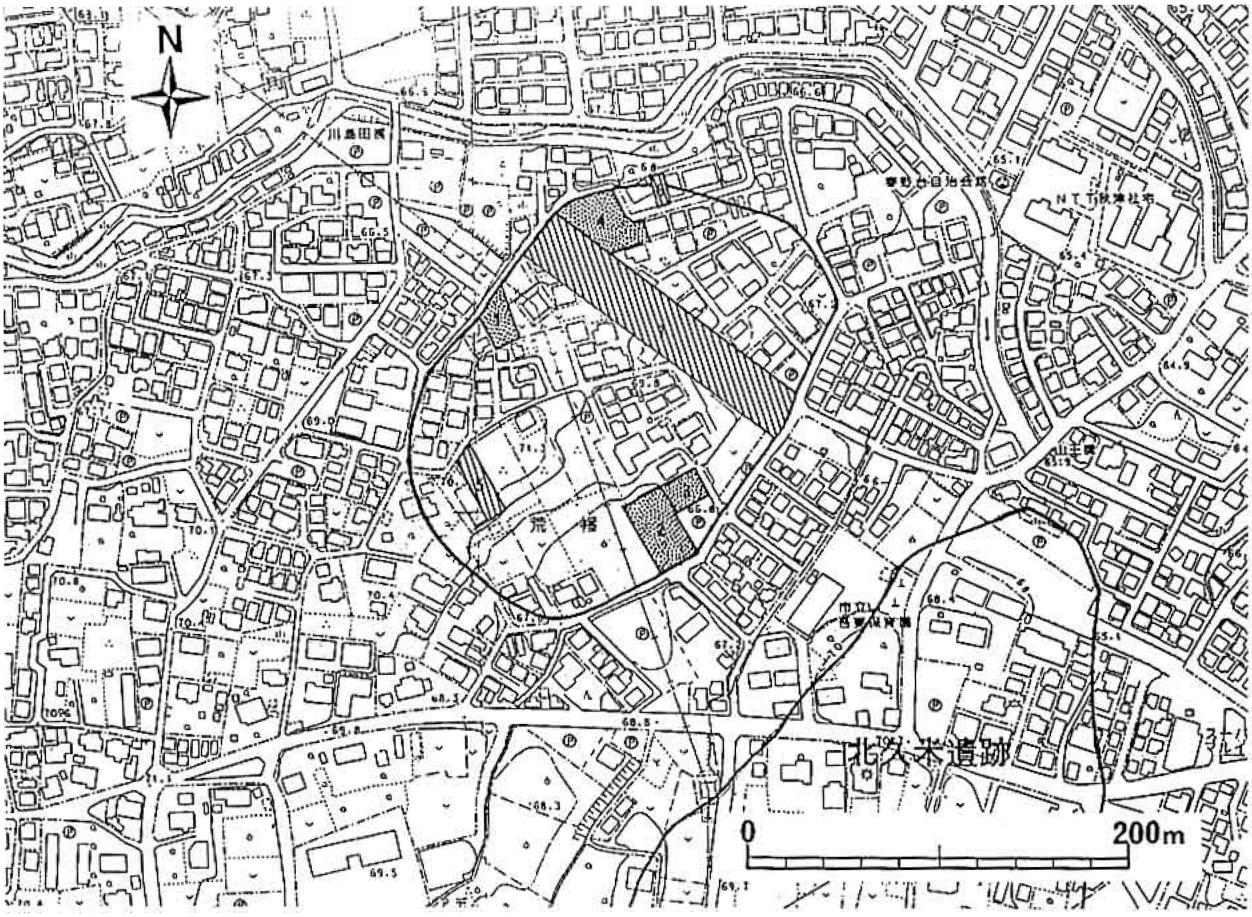
住居跡は、Ａ区中央部の標高約69.5ｍ付近に３軒が主軸を北に揃え、近接している。出土した須恵器の特徴から、８世紀中葉に位置づけられる第２号



第13図　東内手遺跡調査区全測図（１）



第14図　東内手遺跡調査区全測図（2）



第15図　東内手遺跡調査区位置図

住居跡が最も古く、次いで８世紀後葉の第３号住居跡、８世紀末葉から９世紀初頭の第１号住居跡の順で構築されたようである。主軸方向を北に揃え、規則的に配置された状況から推して、屋敷地などの空間規制が存在していた可能性を強く示している。

住居跡の平面形態は、第２・３号住居跡が４本柱穴の明確な正方形プランであるのに対し、第３号住居跡は柱穴の不明瞭な長方形プランである。カマドは３軒とも北壁に構築されているが、第３号住居跡は壁の中央に、第１・２号住居跡は中央よりもやや隅によった位置にある。また、第２号住居跡には床面中央に明瞭な火床面をもつ炉跡が確認された。

土坑は遺物を伴うものが少なく、その大半が時期不詳である。帰属時期の判明したものとして、縄文時代後期の土器がまとまって出土した第２号土坑、落とし穴の可能性のある第39号土坑がある。このほか古墳時代中期に位置づけられる第３号土坑からは土師器坩と鉄製刀子が、第22号土坑からは土師器坩、高坏がそれぞれ出土している。

井戸跡はＡ区北端で１基のみ検出された。円形で、筒状に掘り込まれた素掘りの井戸である。出土遺物がなく時期は不明である。溝跡はＡ区北端部に集中して６条が検出された。時期を明示するような遺物は少ないが、18世紀後半の陶磁器片などが出土しており、近世以降の開削と考えられる。このうち第３号溝はコの字状に巡る断面Ｖ字形の区画溝で、鉄銭、環状鉄製品、鉄滓などが出土した。

ピットは合計44基が検出された。住居跡の周囲に一列に並ぶものもあるが、明確に建物跡や柵列を構成するものはなかった。ただし、縄文土器や石器を出土したものが認められることから、縄文時代の住居跡の柱穴が含まれている可能性は残る。

第３表　東内出遺跡の既往調査一覧

調査地点	所在地	発掘面積	調査の原因	調査期間	文化庁通知	発掘主体者	備　　考
第１次調査	荒幡 24-1	115.95 ㎡	鉄塔建替工事	昭和63年10月13日～ 昭和63年10月31日	63 委保記第 2-6692 号	所沢市教育委員会	文献１
調査概要	旧石器遺物は関東ローム層第Ⅲ層下部から縦長剥片出土。縄文時代の土坑２基及び土坑状落ち込み（風倒木痕跡か）を検出。早期撚糸文系・条痕文系、前期黒浜式期、後期堀之内Ⅰ式期等の縄文土器。奈良時代の須恵器坏・甕等が出土。						
調査地点	所在地	発掘面積	調査の原因	調査期間	文化庁通知	発掘主体者	備　　考
第２次調査	荒幡 50, 51	898 ㎡	宅地造成 (共同住宅)	平成３年６月３日～ 平成３年８月19日	３委保記第 5-3120 号 平成３年 10 月 11 日	所沢市教育委員会	文献２
調査概要	古墳時代住居跡２軒、中世以降の井戸跡１基、溝跡２条。遺物は縄文土器、古墳時代後期土師器、中世以降の木器椀等が出土。						
調査地点	所在地	発掘面積	調査の原因	調査期間	文化庁通知	発掘主体者	備　　考
第３次調査	荒幡 56-3, 5, 6	777 ㎡	住宅建設	平成３年８月１日～ 平成３年10月31日	３委保記第 5-4471 号 平成３年 10 月 11 日	所沢市教育委員会	文献３
調査概要	古墳後期から奈良時代にかけての竪穴住居７軒、井戸跡２基を検出した。比企型坏を主体とした土師器。第４号住居跡からは砥石４点、第３号住居跡から耳環が出土。第２次調査地点の東側に隣接する。						
調査地点	所在地	発掘面積	調査の原因	調査期間	文化庁通知	発掘主体者	備　　考
第４次調査	荒幡 20	419 ㎡	住宅建設	平成３年９月２日～ 平成３年10月31日	3 委保記第 5-4620 号 平成３年 10 月 11 日	所沢市教育委員会	文献２
調査概要	奈良時代の住居跡１軒を検出した。縄文時代早・前・中・後期（土器・石器）、弥生時代（土器片）、古墳時代（土師器・須恵器）、奈良時代（土師器）が出土。						
調査地点	所在地	発掘面積	調査の原因	調査期間	文化庁通知	発掘主体者	備　　考
第５次調査	荒幡 45-2	363.4 ㎡	個人住宅建設	平成３年10月１日～ 平成３年11月１日	3 委保記第 5-4620 号 平成３年 10 月 11 日	所沢市教育委員会	文献４
調査概要	縄文時代早期の炉穴 14 基、奈良時代の住居跡１軒を検出した。縄文時代の遺物は、早期茅山式、前期黒浜式、花積式、諸磯ａ式・ｃ式、中期加曽利Ｅ式期の土器片が出土。住居跡は８世紀後半に比定されている。						
調査地点	所在地	発掘面積	調査の原因	調査期間	文化庁通知	発掘主体者	備　　考
第６次調査	荒幡 12-4	120 ㎡	個人住宅建設	平成４年11月24日～ 平成４年12月４日	4 委保記第 5-7469 号 平成５年４月 16 日	所沢市教育委員会	文献４
調査概要	平安時代の住居跡１軒を検出した。住居の時期は周辺ヘラ削り再調整をもつ須恵器坏の特徴から８世紀第４四半期から９世紀初頭に比定されている。縄文土器が少量出土しており、前期初頭の花積下層式土器が主体を占める。						
調査地点	所在地	発掘面積	調査の原因	調査期間	文化庁通知	発掘主体者	備　　考
第７次調査	荒幡 80 ほか	4, 125 ㎡	道路建設	平成14年12月１日～ 平成15年１月31日	教文第 2-57 号 平成 14 年９月３日	(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	本報告書
調査概要	奈良・平安時代の住居跡３軒、土坑 56 基、井戸跡１基、溝跡６条、ピット 44 基を検出した。土坑は縄文時代と古墳時代中期のものが含まれるが、大半は時期不詳である。縄文時代の遺物は早・前・中・後期の土器・石器が出土。						

【文献】

１．飯田充晴ほか 1991『和田遺跡（第６次）　東内手遺跡　場北遺跡（第２次）　前久保峰遺跡　膳棚遺跡（確認調査）』所沢市文化財調査報告書第 28 集　所沢市教育委員会

２．埼玉県教育委員会 1993『埼玉県埋蔵文化財年報　平成３年度』

３．小暮広史 1992『柳瀬川流域遺跡群（Ｘ）』所沢市文化財調査報告書第 30 集　所沢市教育委員会

４．粕谷吉一・並木　隆ほか 2004『東内手遺跡（第５・６次調査）　境窪遺跡（第５・６・７次調査）　東の上遺跡（第 72 次調査）　山下後遺跡（第７次調査）』所沢市文化財調査報告書第 33 集　所沢市教育委員会

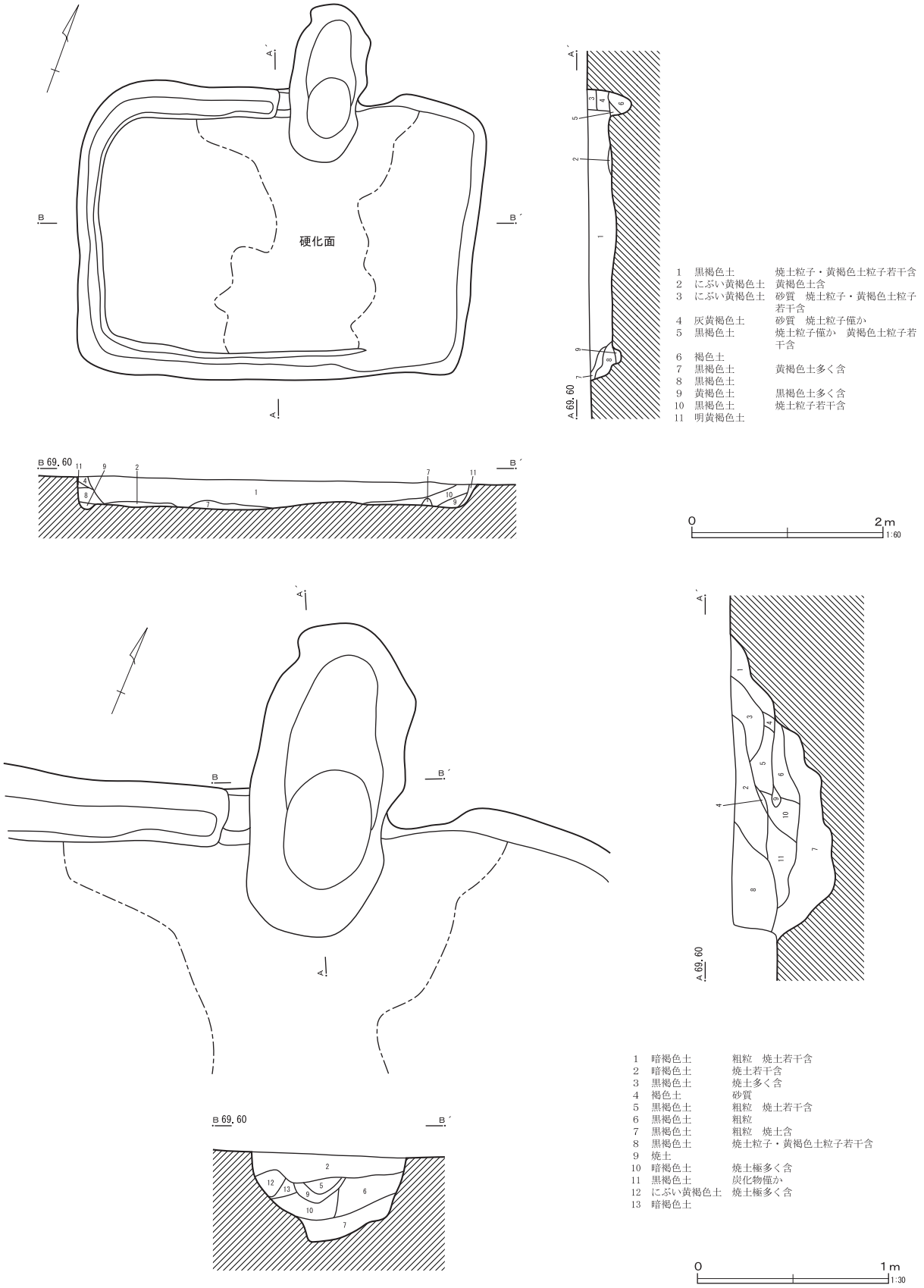
２　遺構と遺物

（１）住居跡

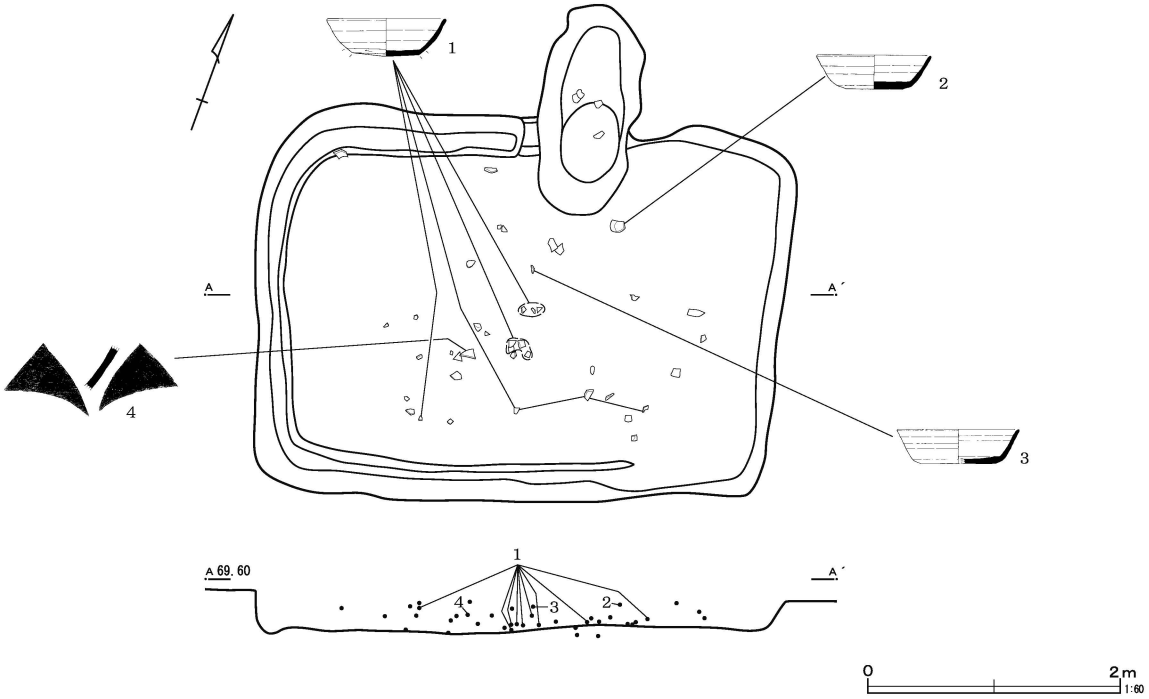
第１号住居跡（第 16・17・18 図）

Ｃ－４・５グリッドに位置する。南に約 2.8 m離れて第２号住居跡がある。平面形態は長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺 4.2 m、短辺 3.1 m、深さ 0.28 mを測る。主軸方向は、カマドを基準にすればＮ－21°－Ｗを指す。

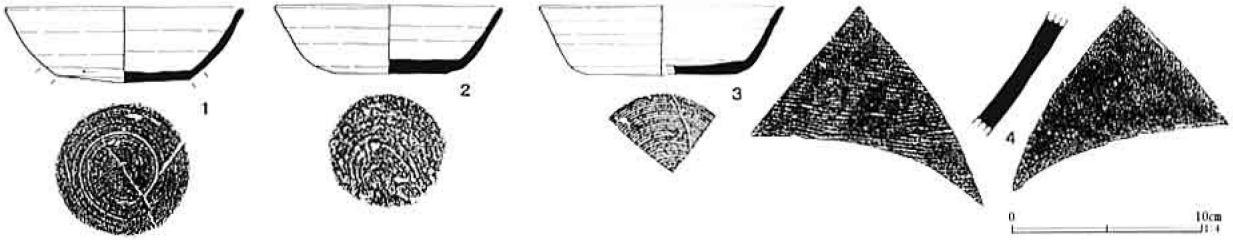
床面は概ね平坦であるが、周壁際に僅かな高まりがみられる。また、カマド手前から南壁にかけて、堅く踏み固められた硬化面があることから、南壁に入口部を想定することができよう。柱穴などのピットはなく、周溝がカマド右脇から南東隅を除いて全周していた。幅 25 ～ 40 ㎝、深さ９㎝である。埋没土は基本的に自然堆積の状況を示しているが、焼土



第16図 第1号住居跡・カマド



第17図　第１号住居跡遺物出土状況



第18図　第１号住居跡出土遺物

第４表　第１号住居跡出土遺物観察表（第18図）

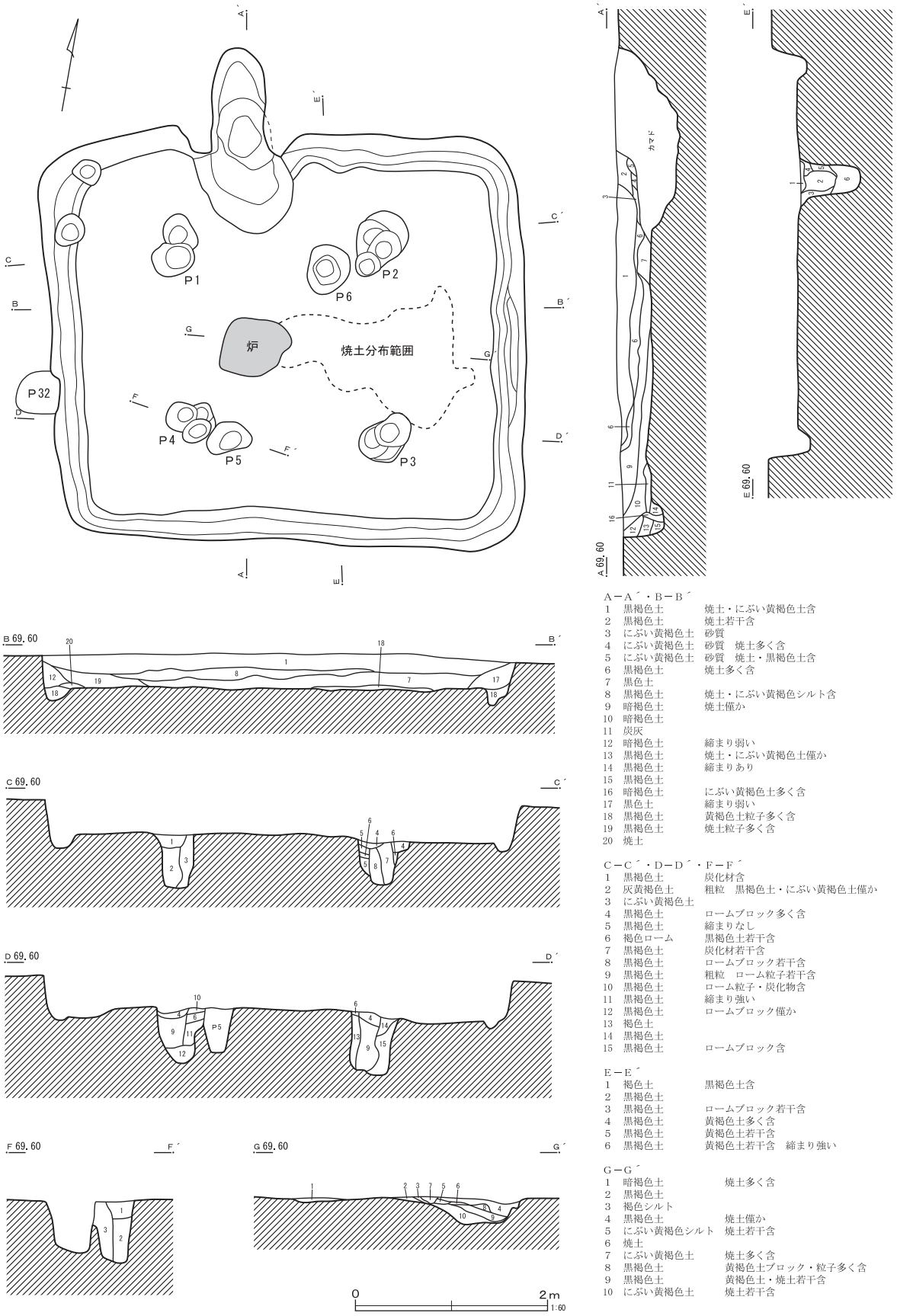
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
1	須恵坏	12.4	4.0	6.9	ＡＨＪ	良好	灰	100	覆土	底部全面及び体部下端右回転ヘラ削り
2	須恵坏	(12.0)	4.1	6.0	ＡＦＧＨ	不良	灰白	45	カマド前	底部右回転糸切り
3	須恵坏	(12.8)	3.6	(8.0)	ＡＨＪ	良好	青灰	20	覆土	底部右回転糸切り
4	須恵甕				ＡＨＪ	良好	灰	破片	覆土	外面平行叩き目　内面無文当て具痕

粒子や黄褐色土粒子を混入する土砂の堆積がみられた。

カマドは、北壁の中央やや東寄りに位置する。燃焼部は周壁よりも外側に造り付けられ、その規模は長さ1.65ｍ、幅0.8ｍである。舟底状に大きく掘り込まれ、壁外へ0.9ｍほど張り出す。地山ロームを掘り残した両袖部が遺存していたが、全体に残りはあまり良くない。埋没土中には天井部や壁面の崩落に伴う焼土粒子を多量に含む層がみられた。

遺物は、中央部から１・３の須恵器坏と４の須恵器甕体部片が床面から浮いた状態で出土したほか、２の須恵器坏がカマド手前から出土している。須恵器はいずれも南比企窯の製品である。このほかに図示しなかったが土師器台付甕の台部片、須恵器蓋、壺・甕類の頸部片などがある。

住居の年代は、出土した須恵器坏の特徴から８世紀末葉から９世紀初頭に位置づけられる。



A－A´・B－B´

1	黒褐色土	焼土・にぶい黄褐色土含
2	黒褐色土	焼土若干含
3	にぶい黄褐色土	砂質
4	にぶい黄褐色土	砂質　焼土多く含
5	にぶい黄褐色土	砂質　焼土・黒褐色土含
6	黒褐色土	焼土多く含
7	黒色土	
8	黒褐色土	焼土・にぶい黄褐色シルト含
9	暗褐色土	焼土僅か
10	暗褐色土	
11	炭灰	
12	暗褐色土	締まり弱い
13	黒褐色土	焼土・にぶい黄褐色土僅か
14	黒褐色土	締まりあり
15	黒褐色土	
16	暗褐色土	にぶい黄褐色土多く含
17	黒色土	締まり弱い
18	黒褐色土	黄褐色土粒子多く含
19	黒褐色土	焼土粒子多く含
20	焼土	

C－C´・D－D´・F－F´

1	黒褐色土	炭化材含
2	灰黄褐色土	粗粒　黒褐色土・にぶい黄褐色土僅か
3	にぶい黄褐色土	
4	黒褐色土	ロームブロック多く含
5	黒褐色土	締まりなし
6	褐色ローム	黒褐色土若干含
7	黒褐色土	炭化材若干含
8	黒褐色土	ロームブロック若干含
9	黒褐色土	粗粒　ローム粒子若干含
10	黒褐色土	ローム粒子・炭化物含
11	黒褐色土	締まり強い
12	黒褐色土	ロームブロック僅か
13	褐色土	
14	黒褐色土	
15	黒褐色土	ロームブロック含

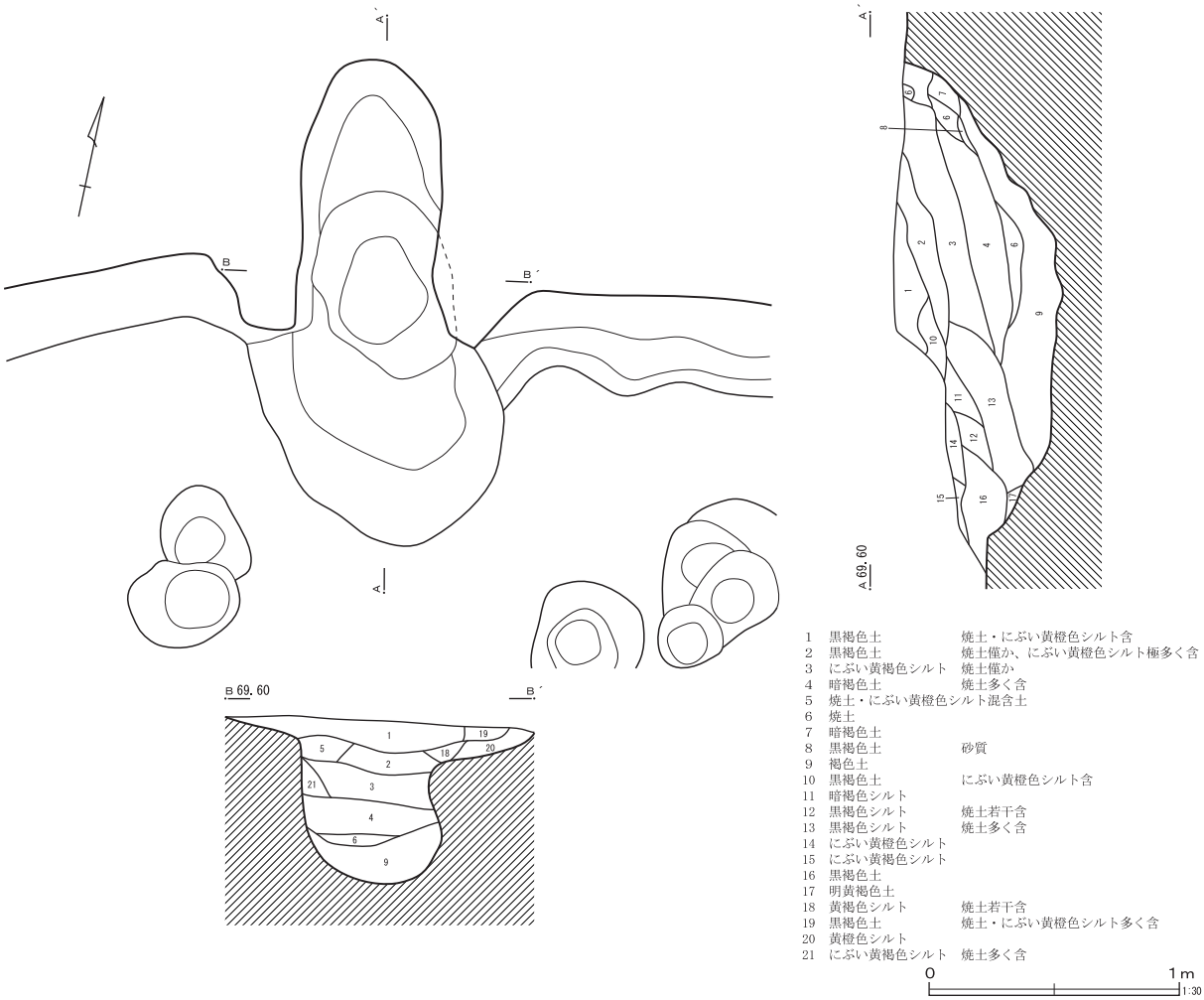
E－E´

1	褐色土	黒褐色土含
2	黒褐色土	
3	黒褐色土	ロームブロック若干含
4	黒褐色土	黄褐色土多く含
5	黒褐色土	黄褐色土若干含
6	黒褐色土	黄褐色土若干含　締まり強い

G－G´

1	暗褐色土	焼土多く含
2	黒褐色土	
3	褐色シルト	
4	黒褐色土	焼土僅か
5	にぶい黄褐色シルト	焼土若干含
6	焼土	
7	にぶい黄褐色土	焼土多く含
8	黒褐色土	黄褐色土ブロック・粒子多く含
9	黒褐色土	黄褐色土・焼土若干含
10	にぶい黄褐色土	焼土若干含

第19図　第２号住居跡



第20図　第２号住居跡カマド

第２号住居跡（第19・20・21・22・27図）

Ｃ・Ｄ－５グリッドに位置し、西壁にピット32が重複する。東には4.5ｍの間隔をおいて第３号住居跡が主軸と北壁を揃えて並列しており、計画的な配置状況が窺われる。平面形態は東西が僅かに長い正方形を呈する。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.9ｍ、短辺4.3ｍ、深さ0.35ｍを測る。主軸方位は、カマドを基準にすればＮ－12°－Ｗを指す。

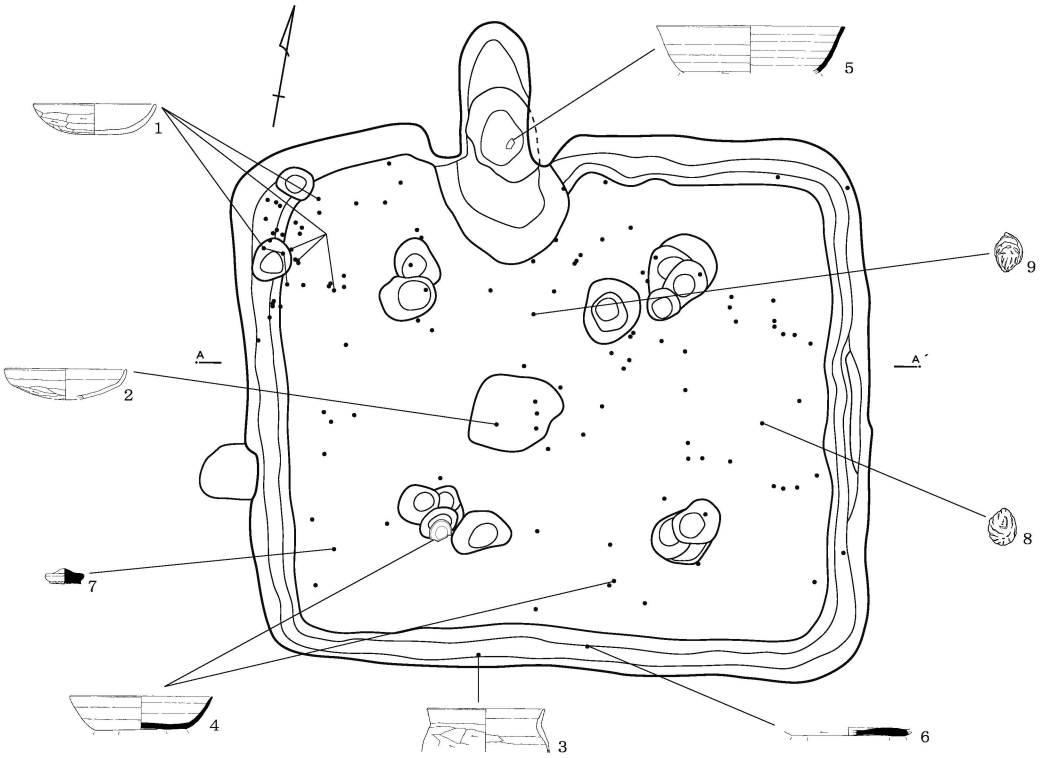
床面は概ね平坦であるが、主柱穴に囲まれた中央部の床面が僅かに高まりをもつ。壁際に溝状の掘り方が認められ、貼床が施されていた。

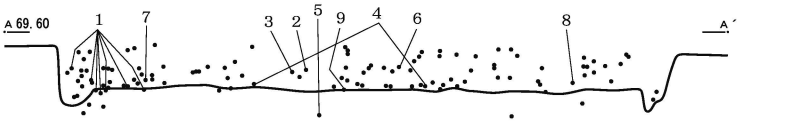
ピットは６本検出された。いずれも柱痕もしくは抜取り痕が確認されていることから、主柱穴や補助柱穴と考えられる。切り合い関係は明確でないが住居の立替に伴って、新たに柱も付け替えられたのであろう。

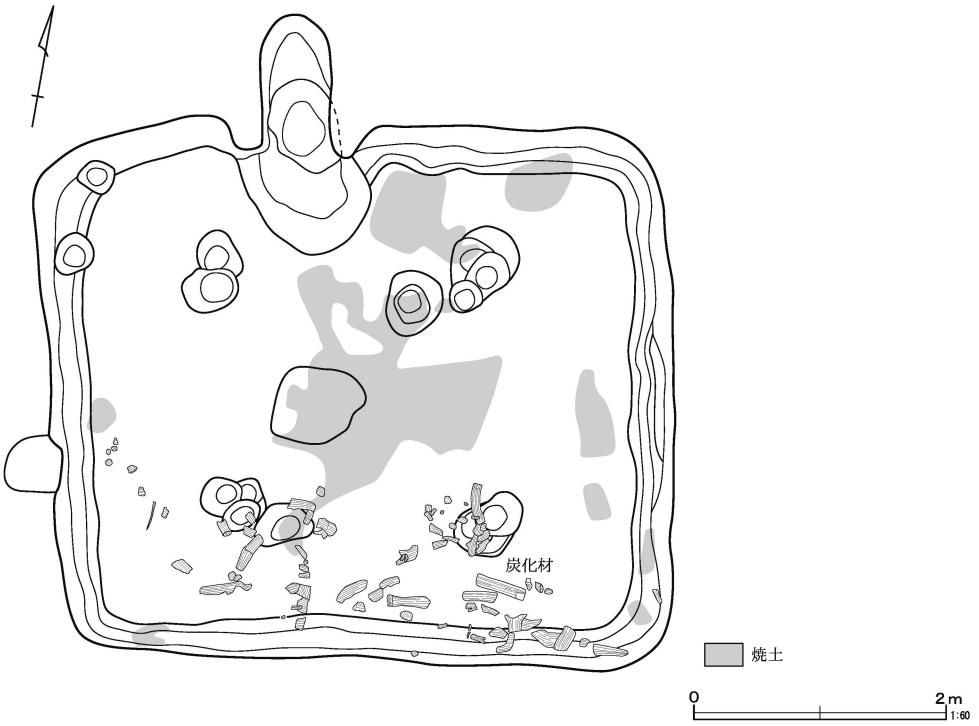
周溝は、カマド左脇から北西隅を除いてほぼ全周する。幅30㎝、深さ15㎝である。埋没土は基本的に自然堆積の状況を示しているが、焼土粒子や黄褐色土粒子を多量に混入する土砂の堆積がみられた。

床面直上に焼土が広がり、南壁際を中心に大型の炭化材がまとまって検出されたことから焼失住居の可能性が高い。また、焼土に混じって炭化した桃の種子が２点検出されている。

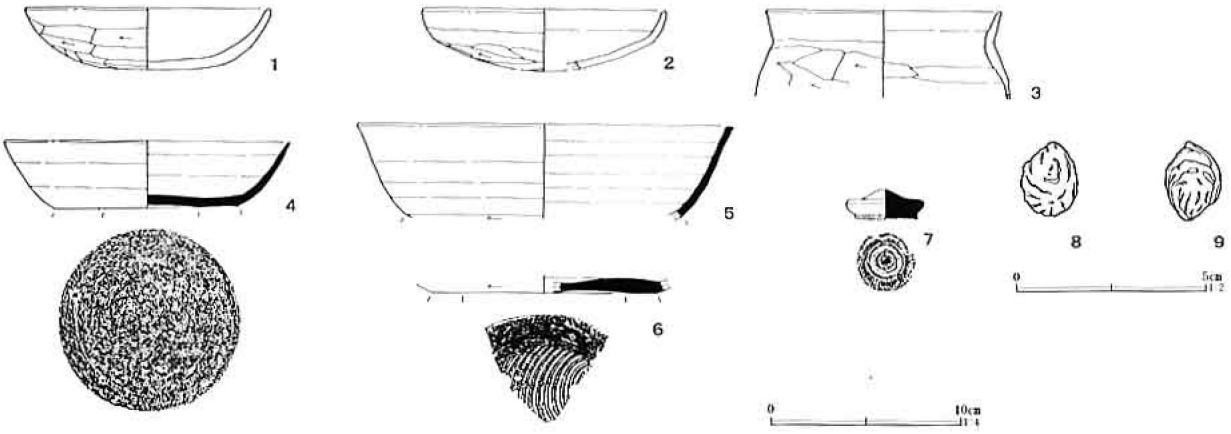
カマドは、北壁の中央やや西寄りに位置する。燃焼部は周壁よりも外側に造り付けられ、その規模は長さ1.92ｍ、幅0.95ｍである。舟底状に大きく掘り込まれ、壁外へ0.83ｍほど張り出す。両袖部は白色粘土を積み上げて構築されていたようであるが、







第21図　第２号住居跡遺物出土状況



第22図　第２号住居跡出土遺物

第５表　第２号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
1	土師坏	12.8	3.3		ＡＢＦＪ	普通	橙	80	覆土	内面の一部に油煙付着
2	土師坏	(12.8)	3.3		ＢＧＪ	普通	にぶい褐	35	覆土	
3	土師甕	(12.2)			ＡＢＦＫ	普通	赤褐	25	覆土	体部内面工具による粗いヘラナデ
4	須恵坏	15.0	3.6	9.6	ＡＣＦＨ	不良	にぶい橙	90	床直	底部糸切り後左回転ヘラ削り
5	須恵埦	(20.0)			ＡＣＧＨ	良好	灰	25	カマド	体部下端右回転ヘラ削り
6	須恵埦			(12.0)	ＡＣＧＨ	良好	灰	25	覆土	底部糸切り後周辺及び下端右回転ヘラ削り
7	須恵蓋				ＡＣＨＪ	良好	灰	10	覆土	擬宝珠摘み　直径4.2cm×高さ1.7cm
8	桃種子	長さ2.0cm　幅1.5cm　厚さ1.3cm							覆土	炭化　一部欠損
9	桃種子	長さ2.1cm　幅1.5cm　厚さ1.2cm							覆土	炭化

全体に残りは良くない。第６層上面が火床面、第４・13層が天井崩落土であろう。

床面中央に炉跡が検出され、78×63㎝の範囲に被熱痕がみられた。さらに、炉跡の東側にも焼土の分布範囲が広がっており、小鍛冶などが行われていたものと推定される。

遺物は、１・２の土師器坏は「北武蔵型坏」を在地で模倣したもので、１が北西隅部、２が中央部の炉跡から出土した。３の台付甕と考えられる小型甕は南壁際周溝から出土。須恵器は、４の坏がピット４に接した床面直上、５の埦がカマド燃焼部、６の坏底部が南壁際周溝、７の蓋摘みが南西隅部付近からそれぞれ出土した。須恵器の産地はいずれも南比企窯産であるが、甕などの貯蔵具の破片はまったく出土しなかった。

住居の年代は、出土した土師器坏や須恵器坏の特徴から８世紀第２四半期に位置づけられる。

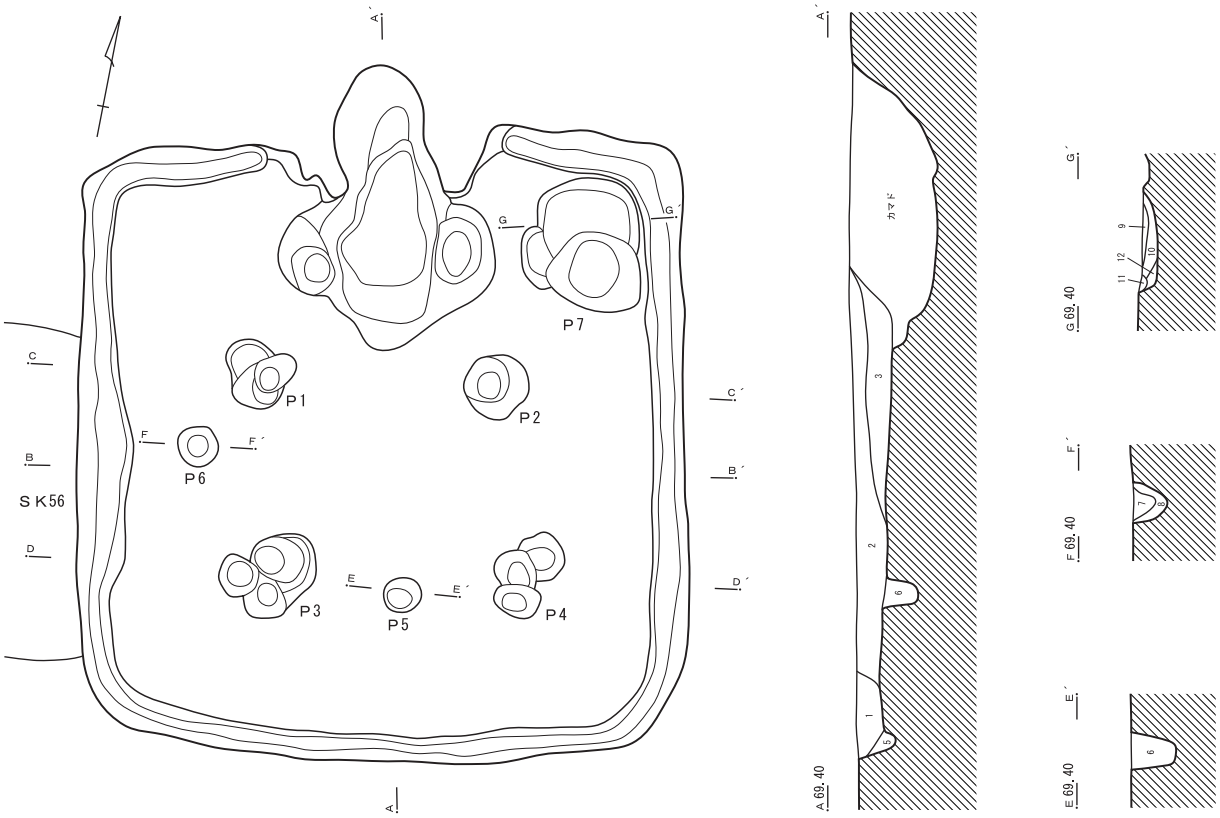
第３号住居跡（第23・24・25・26・27図）

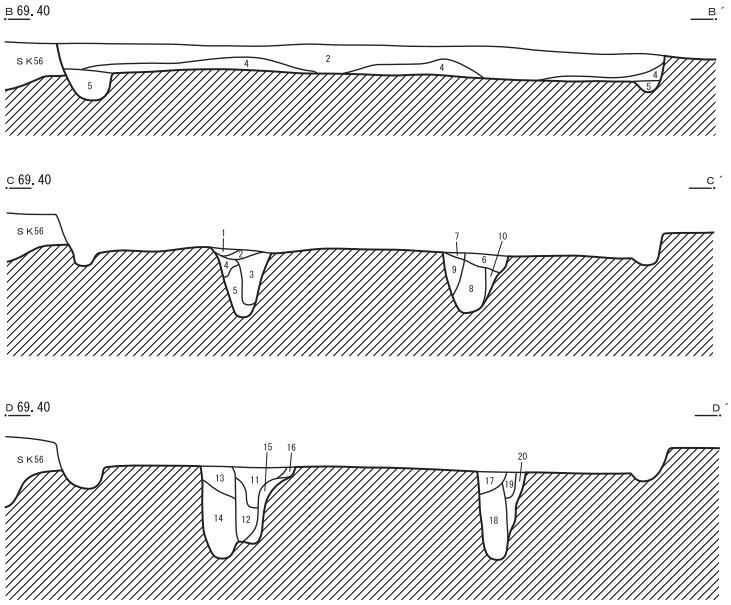
Ｄ－５・６グリッドに位置し、西壁部分に第56号土坑が重複する。平面形態はほぼ正方形を呈する。規模は南北長5.0ｍ、東西長4.8ｍ、深さ0.25ｍを測る。主軸方位は、カマドを基準にすればＮ－12°－Ｗを指す。

床面は概ね平坦であるが、主柱穴に囲まれた中央部の床面が僅かに高まりをもつ。壁際に溝状の掘り方が認められ、貼床が施されていた。

ピットは７本検出された。このうちピット７はカマド右脇隅部にあることから貯蔵穴と考えられる。このほかのピットも柱痕もしくは抜取り痕が確認されることから、主柱穴や補助柱穴と考えられる。切り合い関係は明確でないが住居の立替に伴って、柱も新しく付け替えられたのであろう。

周溝はほぼ全周する。幅25～45㎝、深さ10～18㎝である。埋没土は基本的に自然堆積の状況を示している。ただし、南壁際を中心とした床面直上か





A－A´・B－B´・E－E´・F－F´・G－G´

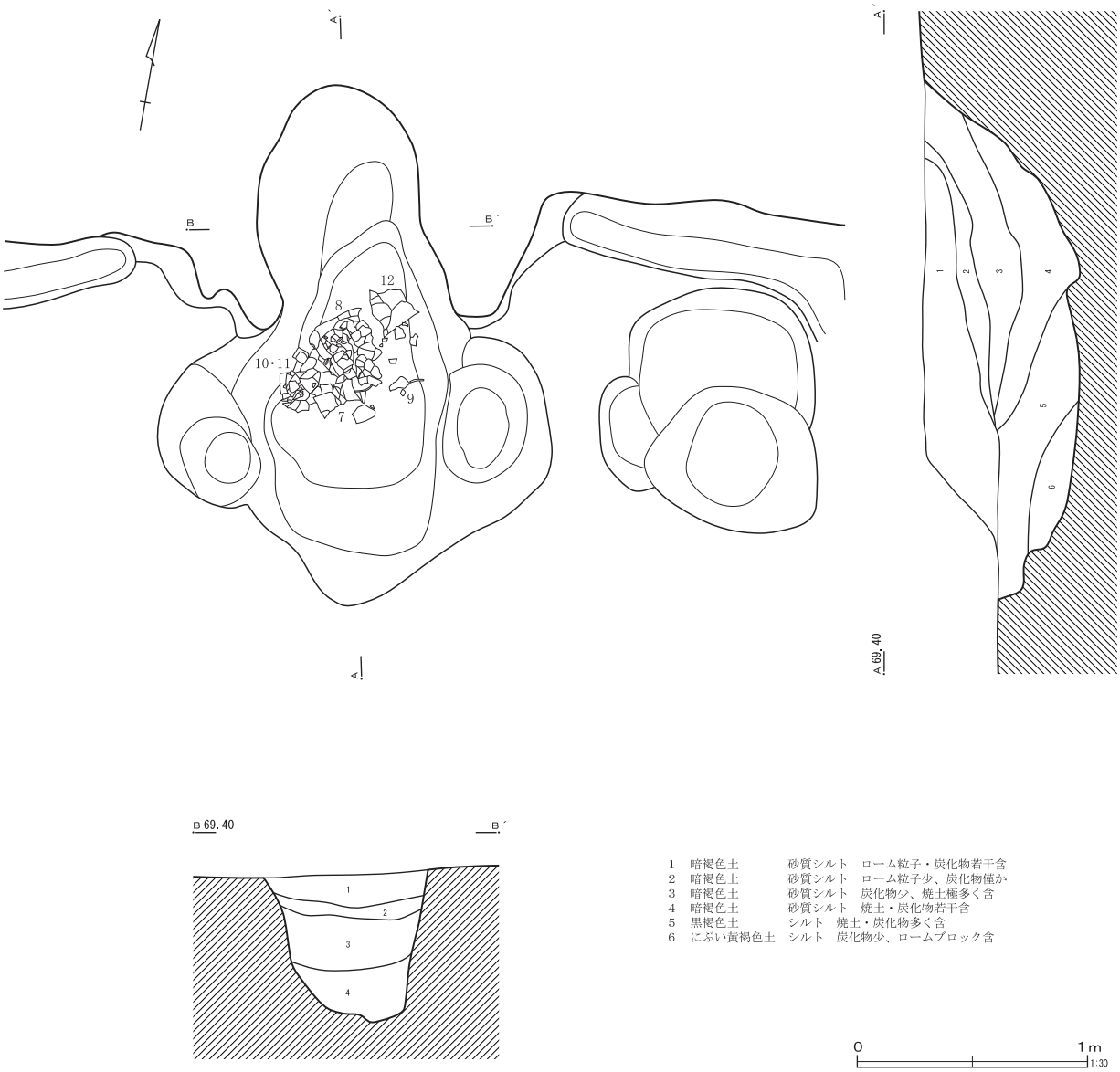
1	黒褐色土	シルト	ロームブロック・焼土多、炭化物少量含
2	黒褐色土	シルト	炭化物少量含
3	にぶい黄褐色土	シルト	ローム粒子・ロームブロック多、炭化物少量含　ねばりあり
4	暗褐色土	シルト	ローム粒子・ロームブロック多、炭化物少量含
5	黒褐色土		ローム粒子多、炭化物少量含
6	黒色土		
7	黒褐色土		ローム粒子含
8	褐色土		
9	黒褐色土		
10	黒褐色土		ロームブロック含
11	黒褐色土		黄褐色土含
12	黒褐色土		ローム粒子若干含

C－C´・D－D´

1	黒褐色土	
2	黒褐色土	ロームブロック極多く含
3	暗褐色土	
4	黒褐色土	ローム粒子若干含
5	暗褐色土	ロームブロック若干含
6	黒褐色土	褐色シルト含
7	黒褐色土	赤色粒子含
8	黒色土	ローム粒子含
9	黒褐色土	ローム粒子僅か
10	褐色土	
11	黒褐色土	黄褐色土粒子若干含
12	黒色土	
13	明黄褐色土	
14	黒褐色土	ロームブロック若干含　締まりなし
15	灰黄褐色土	ローム粒子含
16	褐色土	黒褐色土含
17	黒褐色土	ローム粒子含
18	暗褐色土	ローム粒子含
19	灰黄褐色土	
20	黒褐色土	黄褐色土含

0　2m　1:60

第23図　第３号住居跡



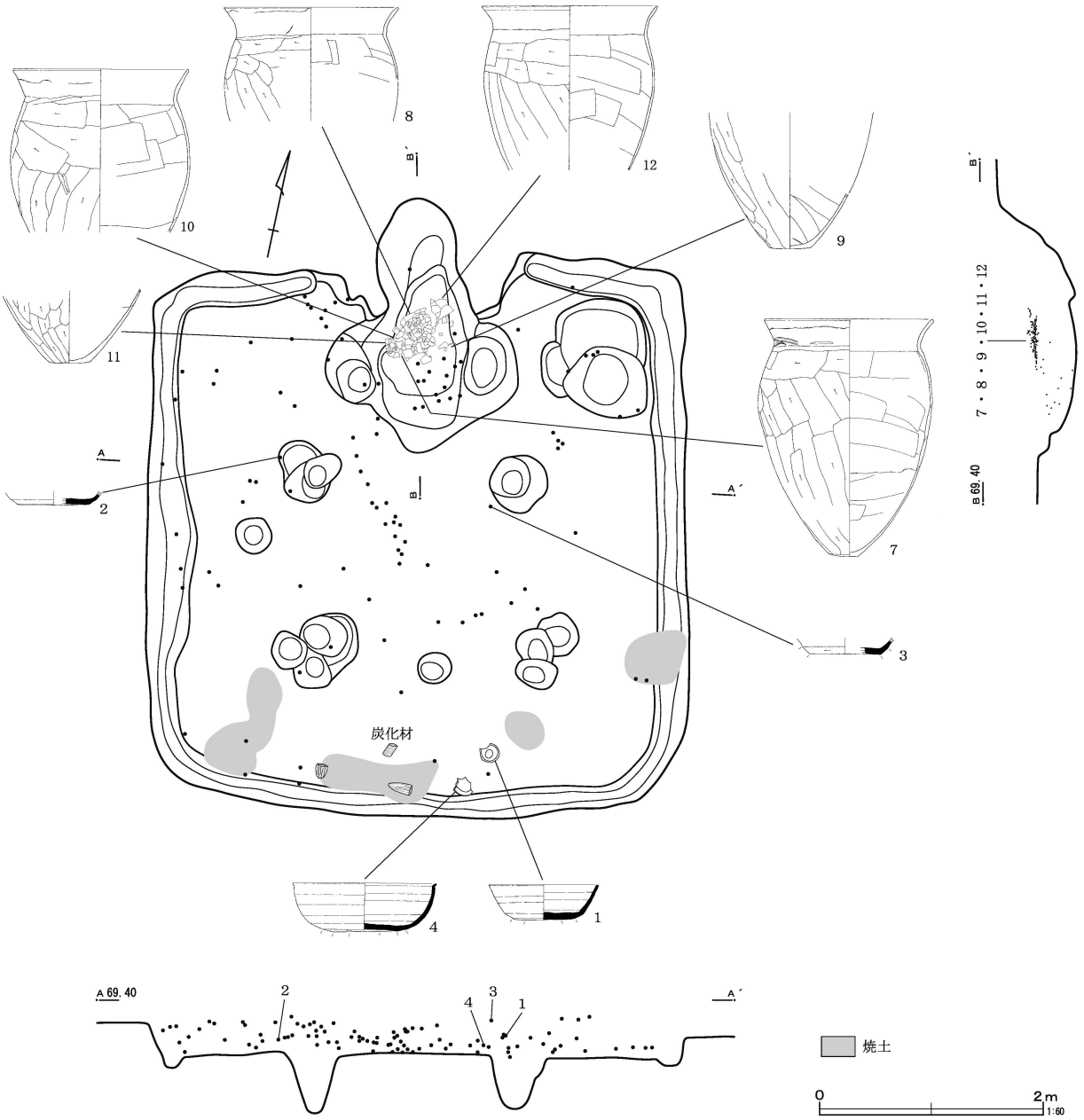
第24図　第３号住居跡カマド

ら焼土や炭化材のブロックが検出された。第２号住居跡に比べると焼土や炭化物の量が少ないことから、焼失住居の可能性は低く、覆土中に廃棄されたものと考えられる。

カマドは北壁のほぼ中央に位置し、その規模は長さ2.25ｍ、燃焼部幅0.8ｍを測る。舟底状に大きく掘り込まれ、壁外へ0.55ｍほど延びる。両袖部は白色粘土を積み上げて構築され、焚口部両脇に深さ20㎝ほどのピットを掘り込む。カマド焚口部の補強材を埋め込んだ痕跡であろうか。

遺物は、検出された住居跡のうちでは最も多い。須恵器は１の坏と４の埦が南壁際、２の坏がピット１、３の坏がピット２の周囲からそれぞれ出土した。土師器の甕はくの字口縁の武蔵型甕で、カマドからまとまって出土した。須恵器の産地は南比企窯産が大半を占めているが、１・２は胎土に白色針状物質を含まないことから東金子窯産であろう。

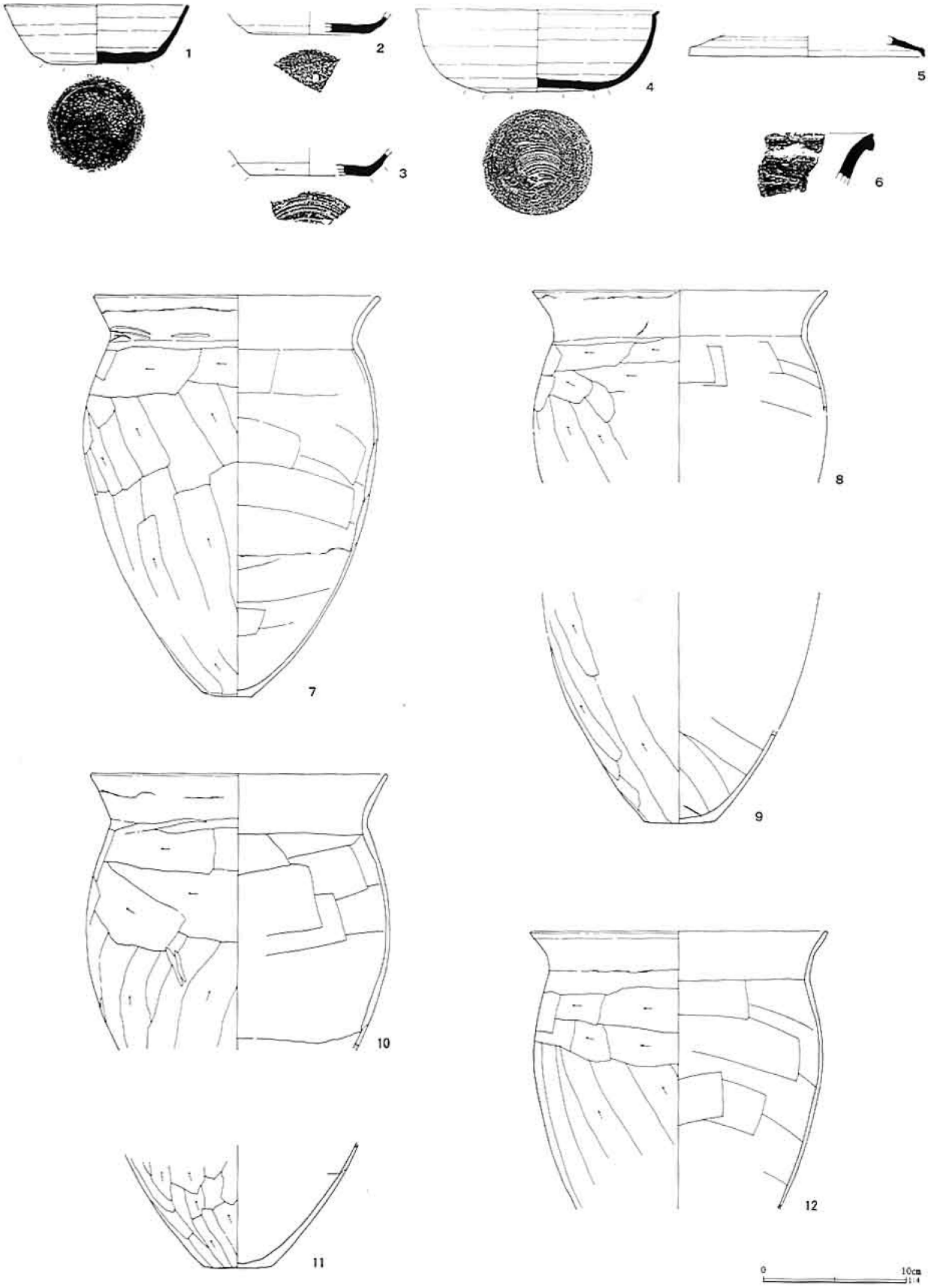
住居の年代は、出土した須恵器坏の特徴から８世紀第３四半期後半から８世紀第４四半期前半に位置づけられる。



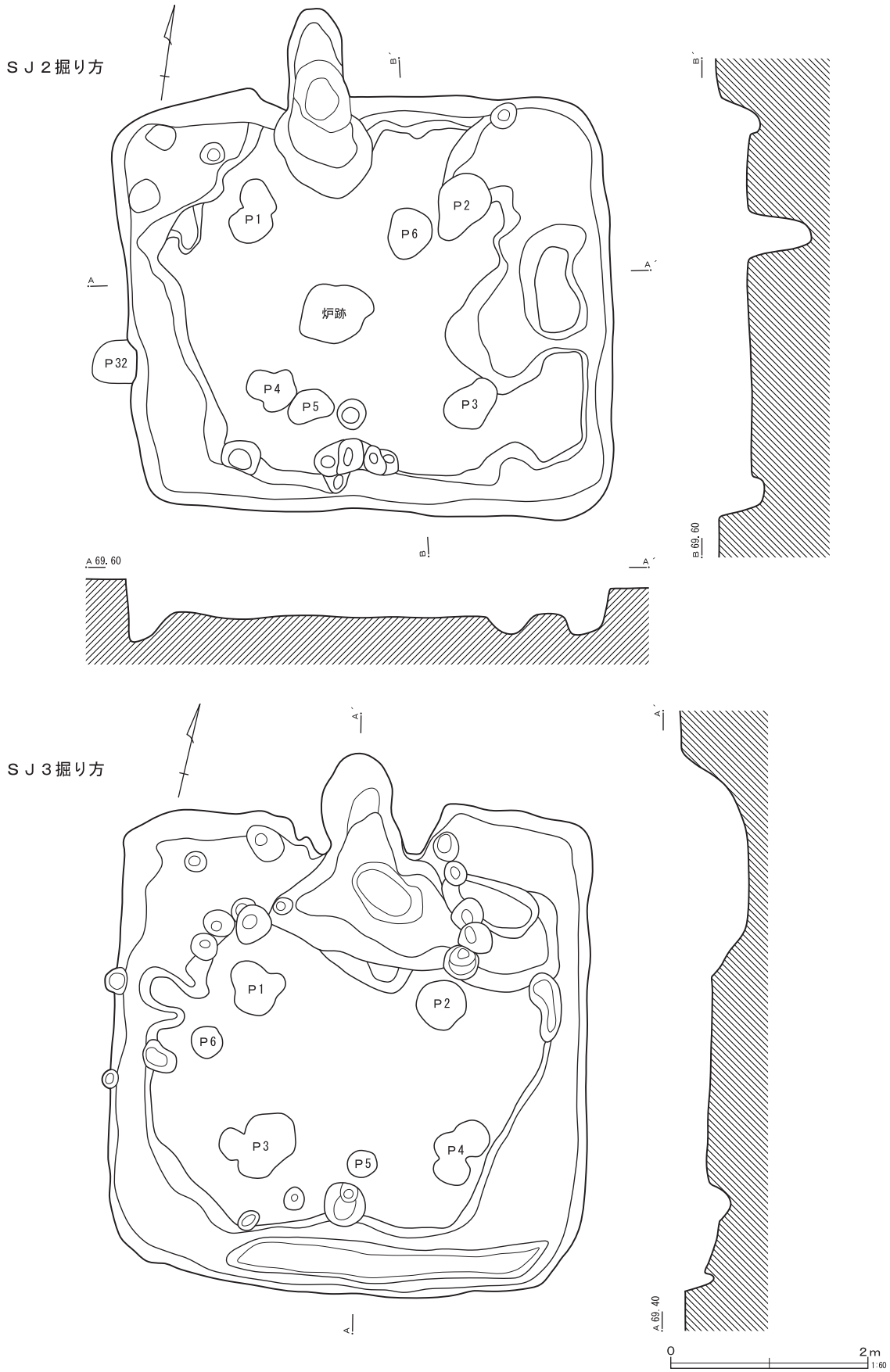
第25図　第３号住居跡遺物出土状況

第６表　第３号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
1	須恵坏	12.8	4.2	7.4	ＡＧＪ	不良	灰白	90	南壁際	底部糸切り後右回転ヘラ削り
2	須恵坏			(8.4)	ＡＦＧ	不良	にぶい橙	25	覆土	磨耗のため底部調整不明
3	須恵坏			(8.4)	ＡＧＨＪ	普通	暗灰黄	20	覆土	底部外周及び下端右回転ヘラ削り
4	須恵埦	(17.0)	5.8	7.5	ＡＧＨＪ	良好	オリーブ灰	50	南壁際	底部糸切り後周辺及び下端右回転ヘラ削り
5	須恵蓋	(16.4)			ＡＨＪ	良好	灰	10	覆土	
6	須恵甕				ＡＨＪ	良好	青灰	破片	覆土	
7	土師甕	20.0	28.3	3.5	ＢＦＧＪ	普通	明赤褐	85	カマド	
8	土師甕	20.5			ＡＢＦＧ	普通	赤褐	70	カマド	
9	土師甕			5.0	ＡＦＧＪ	不良	明赤褐	80	カマド	内面磨耗のため調整不明
10	土師甕	(20.8)			ＡＢＦＧ	普通	橙	40	カマド	
11	土師甕			4.8	ＦＧＪ	不良	橙	75	カマド	内面磨耗のため調整不明
12	土師甕	(20.8)			ＡＢＦＧ	普通	橙	45	カマド	



第26図　第３号住居跡出土遺物



第27図　第２・３号住居跡掘り方

（2）土坑

土坑は合計56基検出された。このうち縄文時代に属すると考えられる土坑は、縄文土器が比較的纏まって出土した第２・４・16・34・42・50号土坑の６基と落とし穴と考えられる第39号土坑が挙げられる。また、古墳時代中期の土坑としては第３・22号土坑の２基がある。第３号土坑からは土器のほかに鉄製刀子が出土しており、墓坑の可能性が高い。

そのほかは遺構に伴う遺物がほとんどなく、時期不詳である。おそらく、大半が近世以降の所産と考えられる。

第１号土坑（第28図）

Ａ－１グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸112㎝、短軸92㎝、主軸方向はＮ－90°－Ｗ、深さ14㎝である。底面は概ね平坦で、浅いピットがある。

遺物は縄文土器、石器が数点出土した。破片のため図示できる遺物はない。

第２号土坑（第28図）

Ａ－２グリッドに位置し、ピット６・７・25・33に切られている。平面形は不整形で、規模は長軸228㎝、短軸156㎝、主軸方向はＮ－８°－Ｗ、深さ37㎝である。底面は凹凸が認められる。

遺物は縄文後期の土器片がまとまって出土していることから、縄文時代の土坑と考えられる。

第３号土坑（第28図）

Ａ－１グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸304㎝、短軸100㎝、主軸方向はＮ－35°－Ｅ、深さ54㎝である。底面は平坦で、断面箱形を呈する。

遺物は中央部付近から完形の土師器の坩形土器と鉄製刀子が底面から僅かに浮いた状態で出土した。刀子は二つに折れた状態で出土した。遺物の出土状況から墓坑の可能性が考えられる。

第４号土坑（第28図）

Ａ－２グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸108㎝、短軸106㎝、主軸方向はＮ－５°－Ｗ、深さ19㎝である。底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い。

遺物は縄文後期の土器片や石器が出土していることから、縄文時代の土坑と考えられる。

第５号土坑（第28図）

Ａ－２グリッドに位置し、第６・７号土坑に切られる。平面形は不整形で、遺存した部分の規模は長軸90㎝以上、短軸90㎝、主軸方向はＮ－51°－Ｗ、深さ９㎝である。底面は平坦で、掘り込みは皿状を呈する。

遺物はまったく出土しなかった。

第６号土坑（第28図）

Ａ－２グリッドに位置し、第５・７号土坑、ピット10と重複する。平面形は不整形で、規模は長軸150㎝、短軸64㎝、主軸方向はＮ－44°－Ｅ、深さ26㎝である。底面はやや凹凸がある。

遺物はまったく出土しなかった。

第７号土坑（第28図）

Ａ－２グリッドに位置し、第６・８号土坑と重複する。平面形は不整形で、遺存していた部分の規模は長軸122㎝以上、短軸64㎝、主軸方向はＮ－43°－Ｅ、深さ21㎝である。底面は概ね平坦で、掘り込みは浅い。

遺物はまったく出土しなかった。

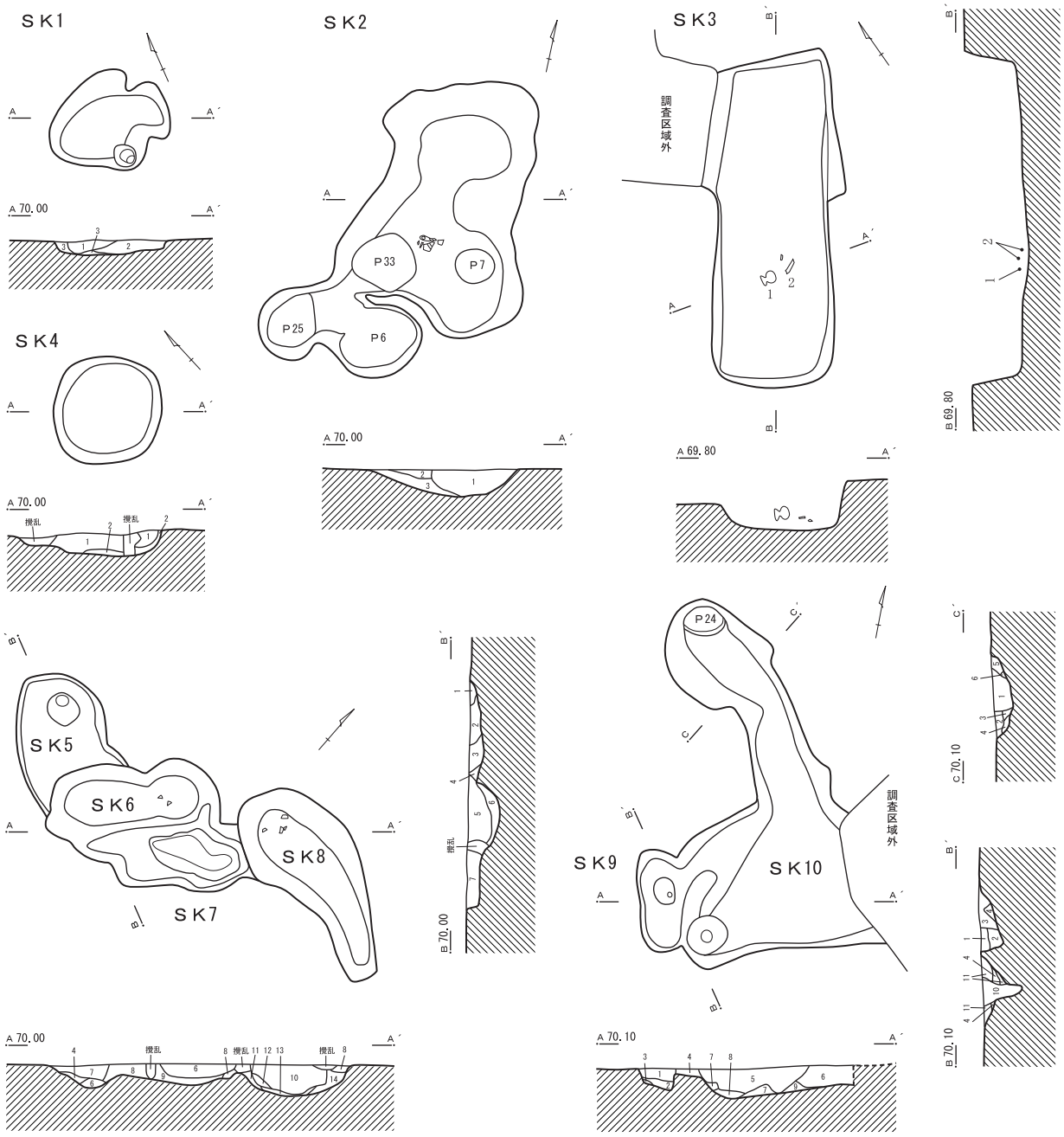
第８号土坑（第28図）

Ａ－２グリッドに位置し、第７号土坑と重複する。平面形は不整形で、規模は長軸194㎝、短軸90㎝、主軸方向はＮ－73°－Ｗ、深さ31㎝である。底面は概ね平坦である。

遺物は縄文時代早期末葉の土器、石器が数点出土したにすぎない。

第９号土坑（第28図）

Ａ－２グリッドに位置し、第10号土坑と重複する。平面形は不整形で、長軸94㎝、短軸約43㎝、主軸方向はＮ－16°－Ｗ、深さ20㎝である。底面は皿状に浅く掘り込まれ、中央部に後世のピットが重複し



ＳＫ１
1　暗褐色土
2　褐色土　　黒褐色土多含
3　褐色土

ＳＫ２
1　黒色土　　締まりなし
2　黒色土　　締まり強い
3　黒褐色土　締まり強い

ＳＫ４
1　暗褐色土
2　黄褐色土
3　にぶい黄褐色土

ＳＫ５～８
1　褐色土　　締まりなし
2　暗褐色土　　焼土多く含
3　にぶい黄褐色土　焼土僅か
4　褐色土
5　黒褐色土
6　黒褐色土　　焼土多く含
7　黒褐色土　　焼土僅か
8　暗褐色土　　ローム粒子含
9　褐色土　　焼土若干含
10　黒褐色土　　焼土若干含
11　暗褐色土
12　暗褐色土　　褐色土含
13　焼土
14　暗褐色土　　締まり強い

ＳＫ９・10
1　暗褐色土　　焼土粒子僅か
2　黒褐色土
3　暗褐色土　　焼土粒若干含
4　褐色土
5　黒褐色土　　焼土粒多く含
6　黒褐色土　　黄褐色土含
7　焼土
8　にぶい黄褐色土
9　にぶい黄褐色土　ロームブロック含
10　暗褐色土　　ロームブロック含
11　褐色土　　ロームブロック僅か

0　2m
1:60

第28図　土坑（1）

ている。

遺物はまったく出土しなかった。

第10号土坑（第28図）

Ａ－２グリッドに位置し、第９号土坑と重複する。東側は調査区域外に延びているが、平面形は不整形を呈すると考えられる。確認された範囲の規模は長軸164㎝、短軸132㎝、主軸方向はＮ－61°－Ｅ、深さ21㎝である。底面は概ね平坦であるが、南西隅に後世のピットが重複している。

遺物は縄文土器の破片が数点出土しただけで、時期は不明である。

第11号土坑（第29図）

Ｂ・Ｃ－２グリッドに位置し、第３・６号溝跡と重複する。平面形は長方形で、確認できた長軸104㎝、短軸72㎝、主軸方向はＮ－17°－Ｗ、深さ44㎝である。底面は概ね平坦で、断面箱形を呈する。

遺物は縄文土器、須恵器の破片とともに近世の陶磁器片が出土した。

第12号土坑（第29図）

Ａ－２・３グリッドに位置し、ピット15と重複する。平面形は不整形で、長軸204㎝、短軸122㎝、主軸方向はＮ－76°－Ｅ、深さ37㎝である。底面は凹凸が認められる。

遺物はまったく出土しなかった。

第13号土坑（第29図）

Ａ－２・３グリッドに位置し、ピット17と重複する。平面形は不整形で、長軸144㎝、短軸32㎝以上、主軸方向はＮ－42°－Ｅ、深さ10㎝である。掘り込みが浅く、底面は平坦である。

遺物は縄文土器、石器の破片が出土しただけで、時期は不明である。

第14・15号土坑（第29図）

Ｃ－３グリッドに位置する。平面形は楕円形で、確認できた長軸193㎝、短軸108㎝、主軸方向はＮ－47°－Ｅ、深さ35㎝である。土層断面の観察によると、第14号土坑を切って、第15号土坑が掘り込まれている。

遺物はまったく出土しなかった。

第16号土坑（第29図）

Ｃ－４グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸134㎝、短軸120㎝、主軸方向はＮ－47°－Ｗ、深さ34㎝である。底面は平坦で、断面箱形に掘り込まれている。

遺物は縄文後期の土器、石器の破片がまとまって出土したことから、縄文時代の土坑と考えられる。

第17号土坑（第29図）

Ｃ・Ｄ－４グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸116㎝、短軸97㎝、主軸方向はＮ－82°－Ｗ、深さ74㎝である。掘り込みの深い断面箱形を呈し、底面は平坦である。

遺物はまったく出土しなかった。

第18号土坑（第29図）

Ｄ－４グリッドに位置し、第19・20号土坑と重複する。平面形は楕円形で、長軸138㎝、短軸約88㎝、主軸方向はＮ－58°－Ｗ、深さ29㎝である。底面は第19号土坑に向かって傾斜している。

遺物は縄文後期の土器片が少量出土した。

第19号土坑（第29図）

Ｄ－４グリッドに位置し、第18・20号土坑と重複する。平面形は不整形で、長軸約220㎝、短軸約138㎝、主軸方向はＮ－65°－Ｗ、深さ75㎝である。底面は凹凸が著しい。

遺物はまったく出土しなかった。

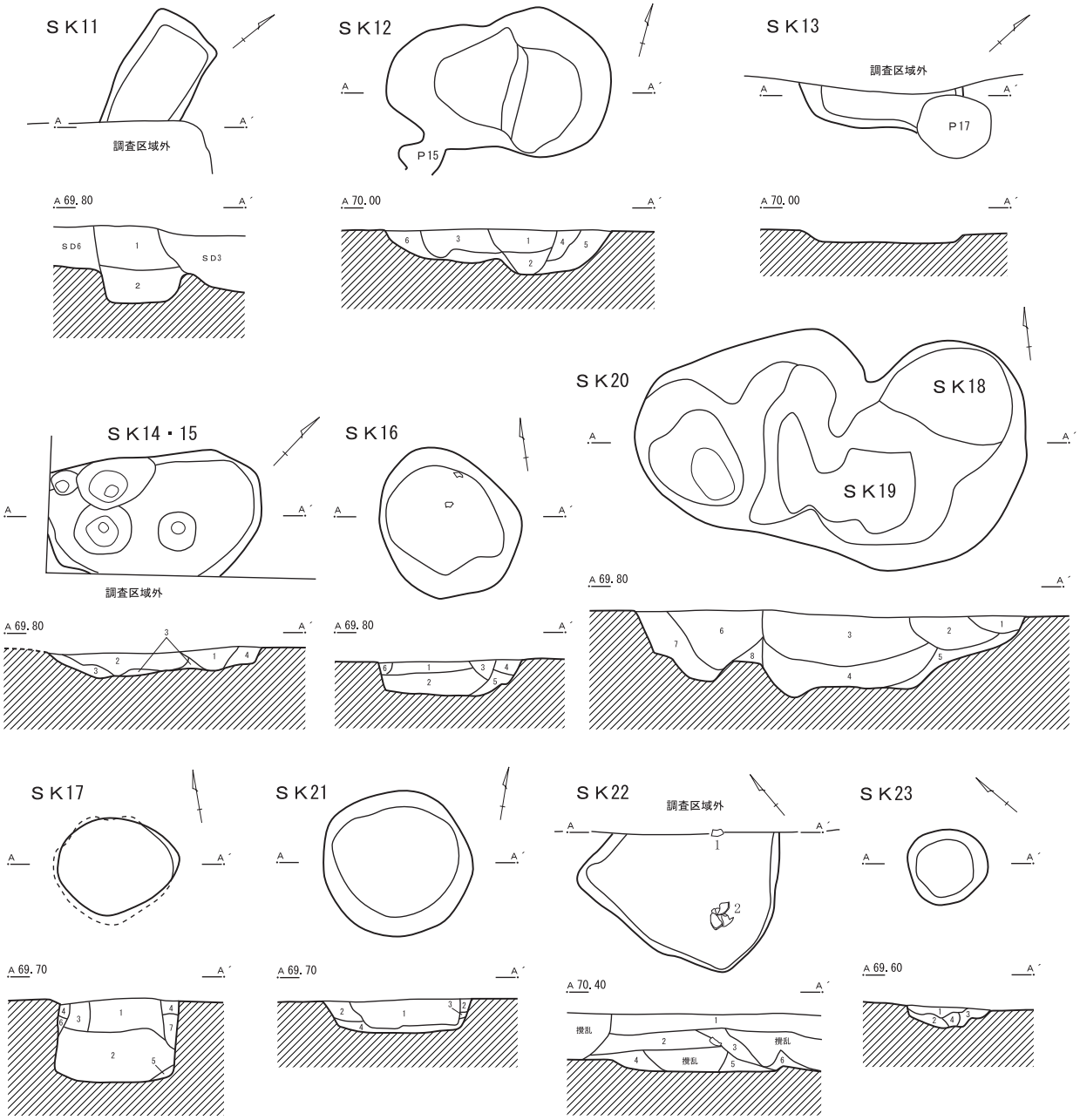
第20号土坑（第29図）

Ｄ－４グリッドに位置し、第18・19号土坑と重複する。平面形は楕円形で、長軸154㎝、短軸約80㎝、主軸方向はＮ－20°－Ｗ、深さ71㎝である。断面形は二段に掘り込まれている。

遺物はまったく出土しなかった。

第21号土坑（第29図）

Ｄ－４グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸138㎝、短軸約130㎝、主軸方向はＮ－81°－Ｅ、深さ29㎝である。底面は概ね平坦で、掘り込みは箱形を呈する。



ＳＫ11
1　黒褐色土
2　黒褐色土　　黄褐色土多く含

ＳＫ12
1　黒褐色土
2　黒褐色土　　黄褐色土若干含
3　黒褐色土　　焼土粒子若干含
4　黒褐色土　　黄褐色土多く含
5　黒褐色土　　黄褐色土極多く含
6　黄褐色土

ＳＫ14・15
1　黒褐色土　　締まり強い
2　黒褐色土
3　暗褐色土
4　暗黄褐色土

ＳＫ16
1　黒褐色土　　焼土粒子若干含
2　黒褐色土　　黄褐色土粒子多、炭化物粒子若干含
3　暗褐色土　　黄褐色土粒子若干含
4　褐色土　　黒褐色土若干含
5　黒褐色土　　黄褐色土含
6　にぶい黄褐色土

ＳＫ17
1　黒褐色土
2　黒褐色土　　黄褐色土僅か　締まりなし
3　暗褐色土
4　暗褐色土　　締まり強い
5　にぶい黄褐色土
6　暗褐色土　　ロームブロック多く含
7　ロームブロック

ＳＫ18～20
1　暗褐色土　シルト
2　黒褐色土　シルト　ローム粒子・焼土若干含
3　黒褐色土　シルト　ローム粒子極少量、焼土若干含
4　黒褐色土　シルト　ローム粒子・焼土若干含
5　暗褐色土　シルト　ロームブロック多、焼土若干含
6　黒褐色土　シルト　ローム粒子極少量、焼土若干含
7　褐色土　　シルト　ロームブロック多、焼土若干含
8　褐色土　　シルト

ＳＫ21
1　黒褐色土　　シルト　ローム粒子・焼土若干含
2　暗褐色土　　シルト　ローム粒子若干、焼土極少量
3　褐色土　　シルト　ロームブロック多く含
4　にぶい黄褐色土　シルト　ロームブロック含

ＳＫ22
1　暗褐色土
2　黒褐色土　　黄褐色土含
3　黒褐色土　　ローム粒子含
4　暗褐色土　　ローム粒子含
5　黒褐色土
6　褐色土　　黄褐色土含

ＳＫ23
1　暗褐色土
2　褐色土　　暗褐色土若干含
3　暗褐色土　　ロームブロック含
4　褐色土

0　2m
1:60

第29図　土坑（2）

遺物は縄文後期の土器、石器の破片が出土した。

第22号土坑（第29図）

Ａ－３グリッドに位置し、北東側は調査区域外にかかる。平面形は不整形で、長軸164㎝、短軸約120㎝、主軸方向はＮ－21°－Ｗ、深さ10㎝である。底面は平坦である。

遺物は土師器坩形土器、高坏が底面から浮いた状態で出土した。古墳時代中期に位置づけられるが、遺構の性格については明確にし得ない。

なお、墓坑の可能性が高いとした第３号土坑の東へ約23ｍに位置している。

第23号土坑（第29図）

Ｄ－５グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸74㎝、短軸67㎝、主軸方向はＮ－40°－Ｗ、深さ18㎝である。皿状に浅く掘り込まれている。

遺物はまったく出土しなかった。

第24号土坑（第30図）

Ｄ－５グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸84㎝、短軸80㎝、主軸方向はＮ－39°－Ｗ、深さ30㎝である。断面逆台形に掘り込まれ、底面は概ね平坦である。

遺物は縄文土器、石器の破片が少量出土した。

第25号土坑（第30図）

Ｄ－６グリッドに位置する。平面形は不整形で、長軸100㎝、短軸92㎝、主軸方向はＮ－60°－Ｗ、深さ46㎝である。断面逆台形を呈し、底面は概ね平坦である。

遺物は縄文前期の土器片が少量出土した。

第26号土坑（第30図）

Ｅ－５グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸88㎝、短軸58㎝、主軸方向はＮ－60°－Ｗ、深さ31㎝である。底面は凹凸が認められる。

遺物はまったく出土しなかった。

第27号土坑（第30図）

Ｃ－５グリッドに位置し、東端部は調査区域外に延びる。平面形は不整形で、長軸127㎝、短軸126㎝、主軸方向はＮ－30°－Ｗ、深さ24㎝である。断面形は二段に掘り込まれている。

遺物は縄文後期の土器片が少量出土した。

第28号土坑（第30図）

Ｅ－６グリッドに位置する。平面形は不整形で、長軸72㎝、短軸51㎝、主軸方向はＮ－90°－Ｅを示す。遺構確認面に焼土が分布していた。掘り込みは10㎝と浅く、皿状を呈する。

遺物は土師器甕、須恵器坏が出土した。８世紀後半のものである。

第29号土坑（第30図）

Ｅ－６・７グリッドに位置する。平面形は不整形で、長軸152㎝、短軸62㎝、主軸方向はＮ－30°－Ｅ、深さ10㎝である。底面はやや凹凸が認められ、南東側はテラス状浅くなる。

遺物はまったく出土しなかった。

第30号土坑（第30図）

Ｄ・Ｅ－７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸86㎝、短軸72㎝、主軸方向はＮ－76°－Ｅ、深さ10㎝である。底面は概ね平坦で、断面箱形を呈する。

遺物はまったく出土しなかった。

第31号土坑（第30図）

Ｃ・Ｄ－６グリッドに位置し、北東側は調査区域外に延びる。平面形は円形と推定され、長軸102㎝、短軸約100㎝、主軸方向はＮ－53°－Ｗ、深さ15㎝である。

遺物は縄文土器の破片が少量出土した。

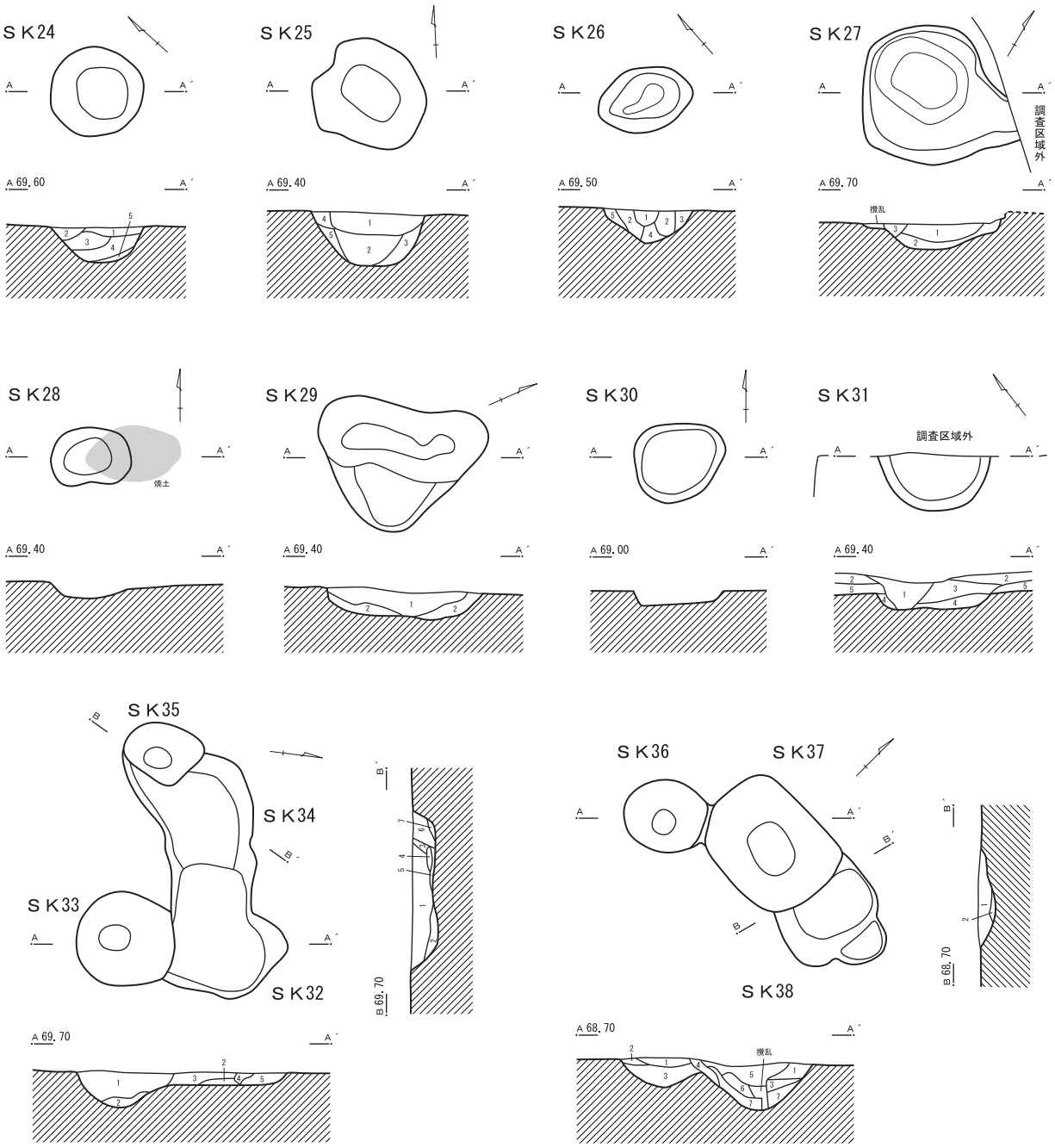
第32号土坑（第30図）

Ｈ－10グリッドに位置し、第33・34号土坑と重複し、第33号土坑に切られる。平面形は不整形で、長軸約119㎝、短軸約103㎝、主軸方向はＮ－80°－Ｅ、深さ10㎝である。底面は概ね平坦で、掘り込みは浅い。

遺物はまったく出土しなかった。

第33号土坑（第30図）

Ｈ－10グリッドに位置し、第32号土坑を切る。平面形は楕円形で、長軸約90㎝、短軸84㎝、主軸



ＳＫ24
1　黒褐色土
2　黒褐色土　焼土粒・黄褐色土含
3　灰黄褐色土　焼土粒僅か
4　黒褐色土　焼土粒僅か、褐色土含
5　焼土

ＳＫ25
1　黒褐色土
2　黒褐色土　黄褐色土含
3　灰黄褐色土
4　灰黄褐色土　黄褐色土含
5　にぶい黄褐色土

ＳＫ26
1　黒褐色土
2　黒褐色土　黄褐色土含
3　暗褐色土
4　褐色土
5　灰黄褐色土

ＳＫ27
1　黒褐色土
2　暗褐色土
3　黒褐色土　黄褐色土含

ＳＫ29
1　黒褐色土　シルト　焼土少量含
2　暗褐色土　シルト　ロームブロック含

ＳＫ31
1　黒色土　赤色粒子含　締まり強い
2　暗褐色土　赤色粒子含
3　黒褐色土
4　にぶい黄褐色土　黒褐色土若干含
5　黒褐色土　黄褐色土若干含

ＳＫ32・33
1　黒褐色土
2　焼土
3　灰黄褐色土
4　暗褐色土
5　にぶい黄褐色土

ＳＫ34・35
1　黒褐色土
2　焼土
3　暗褐色土　黄褐色土含
4　黒褐色土　焼土多く含
5　にぶい黄褐色土
6　黒褐色土
7　にぶい黄褐色土

ＳＫ36・37
1　黒褐色土
2　黒褐色土　焼土多く含
3　焼土
4　黒褐色土　焼土若干含
5　暗褐色土
6　暗褐色土　焼土・ロームブロック含
7　焼土・黒褐色土混合土

ＳＫ38
1　黒褐色土
2　黒褐色土　焼土多く含

0　2m
1:60

第30図　土坑（3）

方向はN－0°－S、深さ33㎝である。皿状に掘り込まれている。

遺物はまったく出土しなかった。

第34号土坑（第30図）

H－10グリッドに位置し、第32・35号土坑と重複する。平面形は不整形で、長軸約90㎝、短軸88㎝、主軸方向はN－73°－E、深さ18㎝である。底面は概ね平坦である。

遺物は縄文土器、石器の破片がややまとまって出土した。

第35号土坑（第30図）

H－10グリッドに位置し、第34号土坑を切る。平面形は不整形で、長軸約61㎝、短軸55㎝、主軸方向はN－32°－E、深さ18㎝である。断面半円状に掘り込まれている。

遺物はまったく出土しなかった。

第36号土坑（第30図）

H－10グリッドに位置し、第37号土坑に接する。平面形は楕円形で、長軸72㎝、短軸66㎝、主軸方向はN－61°－E、深さ24㎝である。断面半円状に掘り込まれている。

遺物はまったく出土しなかった。

第37号土坑（第30図）

H－10グリッドに位置する。第36・38号土坑と重複し、第36号土坑を切る。平面形は楕円形で、長軸122㎝、短軸96㎝、主軸方向はN－1°－W、深さ43㎝である。断面半円状に深く掘り込まれる。

遺物はまったく出土しなかった。

第38号土坑（第30図）

H－10グリッドに位置する。第37号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長軸94㎝、短軸約56㎝、主軸方向はN－5°－E、深さ9㎝である。皿状に掘り込まれ、底面は概ね平坦である。

遺物はまったく出土しなかった。

第39号土坑（第31図）

H－9グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸192㎝、短軸82㎝、主軸方向はN－77°－W、深さ91㎝である。断面箱形を呈し、底面は概ね平坦である。形態・規模などの特徴から縄文時代の落とし穴と想定される。

遺物は縄文土器の破片が少量出土した。

第40号土坑（第31図）

E－8グリッドに位置する。大半が調査区域外へ延びるため平面形は明確でない。検出部分における規模は、長軸約172㎝、短軸約80㎝、主軸方向はN－55°－E、深さ39㎝である。底面は調査区外に向かって緩やかに傾斜している。

遺物はまったく出土しなかった。

第41号土坑（第31図）

F－8グリッドに位置する。北西側が調査区域外に延びるため平面形・規模等の詳細は不明である。検出した範囲では楕円形の平面形を呈すると推定される。長軸約110㎝、短軸94㎝、主軸方向はN－58°－W、深さ134㎝である。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。近世の墓坑の可能性が考えられる。

遺物はまったく出土しなかった。

第42号土坑（第31図）

J－13グリッドに位置する。南側が調査区域外に延びるため平面形・規模等の詳細は不明である。検出した範囲における規模は、長軸326㎝、短軸110㎝、主軸方向はN－9°－W、深さ55㎝である。底面は凹凸が顕著である。

遺物は縄文中・後期の土器、石器の破片が少量出土したにすぎない。

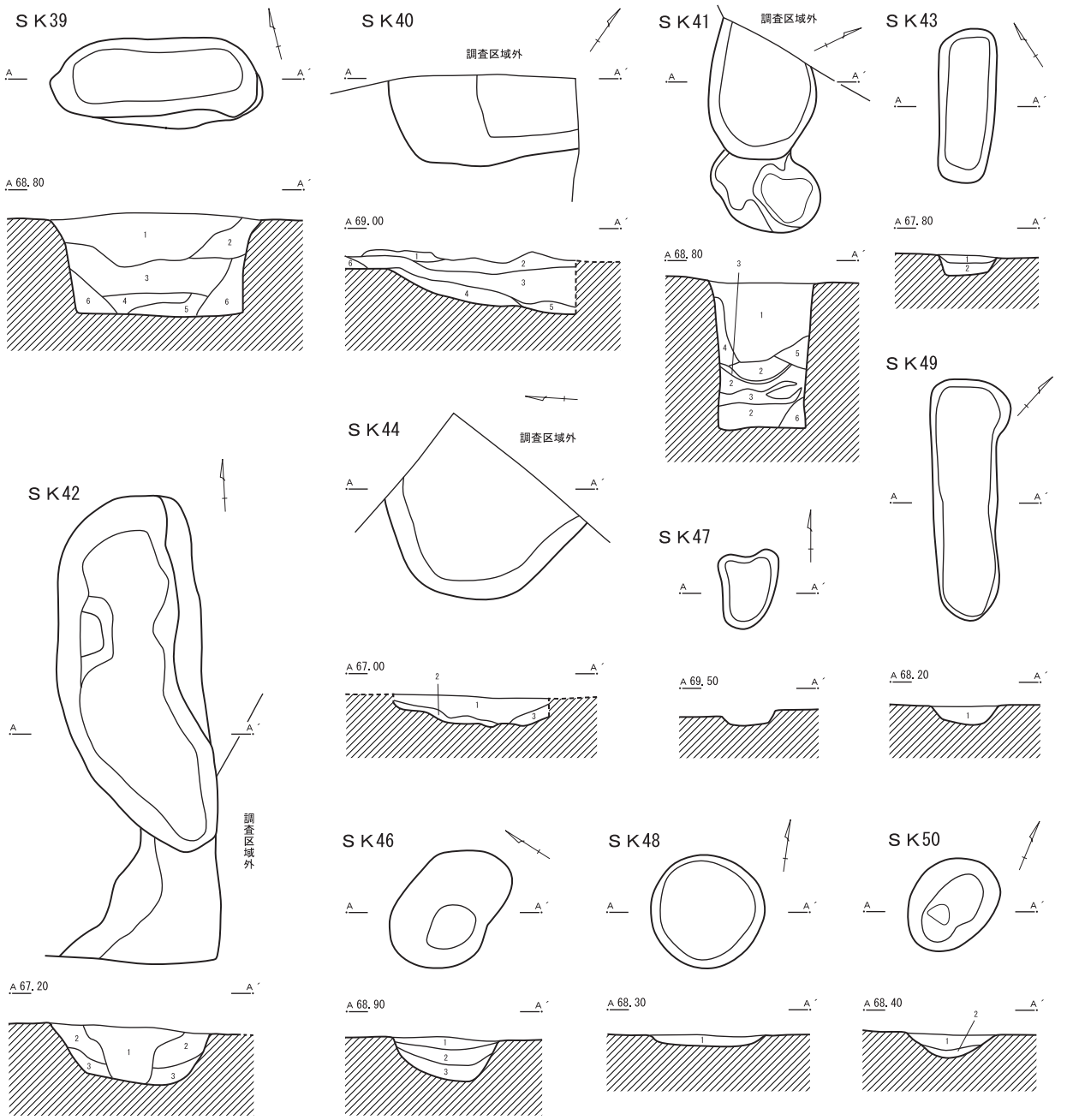
第43号土坑（第31図）

I－13グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸144㎝、短軸52㎝、主軸方向はN－37°－E、深さ18㎝である。底面は概ね平坦である。

遺物は縄文土器の破片が少量出土しただけで、時期は不明である。

第44号土坑（第31図）

I－14グリッドに位置する。大半が調査区域外



ＳＫ39
1　黒褐色土　　締まり強い
2　黒褐色土　　締まり弱い
3　黒褐色土　　黄褐色土若干含
4　にぶい黄褐色土
5　黒褐色土
6　黒褐色土　　黄褐色土ブロック含

ＳＫ40
1　黒褐色土　　橙色土粒子多く含
2　黒褐色土
3　にぶい黄褐色土　橙色土粒子含
4　にぶい黄褐色土
5　灰黄褐色土
6　暗褐色土

ＳＫ41
1　黒色土
2　黒褐色土
3　黒褐色土　赤色粒子含　締まり強い
4　褐色土
5　黒褐色土　ロームブロック含
6　褐色土　　ロームブロック含

ＳＫ42
1　黒褐色土　シルト　ローム粒子若干含
2　暗褐色土　シルト　ローム小ブロック含
3　褐色土　　シルト　ローム粒子多、ロームブロック含

ＳＫ43
1　黒褐色土　シルト　ローム粒子若干含
2　黒褐色土　シルト　ローム粒子多く含

ＳＫ44
1　暗褐色土　シルト　ローム粒子若干含
2　褐色土　　シルト　ロームブロック含　締まりあり
3　暗褐色土　シルト　ロームブロック含

ＳＫ46
1　暗褐色土　シルト　焼土若干含　締まりあり
2　暗褐色土　シルト　ロームブロック・焼土若干含
　　締まりあり
3　褐色土　　ローム　締まりあり

ＳＫ48・49
1　暗褐色土　シルト　ローム粒子多、ロームブロック含
　　締まりあり

ＳＫ50
1　黒褐色土　シルト　ローム粒子・焼土若干含
2　褐色土　　シルト　ロームブロック多く含

0　2m
1:60

第31図　土坑（4）

へ延びる。平面形は不整形と想定され、長軸約158㎝、短軸約142㎝、主軸方向はN－50°－W、深さ30㎝である。底面は凹凸が著しい。

遺物はまったく出土しなかった。

第45号土坑（第32図）

Ｉ－13グリッドに位置し、第52号土坑を切る。平面形は長方形で、長軸252㎝、短軸約55㎝、主軸方向はN－40°－E、深さ14㎝である。底面は概ね平坦で、断面箱形を呈する。

遺物はまったく出土しなかった。

第46号土坑（第31図）

Ｊ－13グリッドに位置する。平面形は不整形で、長軸128㎝、短軸89㎝、主軸方向はN－74°－W、深さ42㎝である。断面半円形を呈する。

遺物はまったく出土しなかった。

第47号土坑（第31図）

Ｃ－６グリッドに位置する。平面形は不整形で、長軸66㎝、短軸47㎝、主軸方向はN－０°－S、深さ８㎝である。底面は平坦で、掘り込みが浅い。

遺物はまったく出土しなかった。

第48号土坑（第31図）

Ｉ－12グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸105㎝、短軸103㎝、主軸方向はN－83°－E、深さ７㎝である。底面は概ね平坦である。

遺物はまったく出土しなかった。

第49号土坑（第31図）

Ｉ－２グリッドに位置する。平面形は不整形で、長軸223㎝、短軸60㎝、主軸方向はN－42°－W、深さ14㎝である。底面は概ね平坦である。

遺物は縄文土器、須恵器の破片が少量出土した。

第50号土坑（第31図）

Ｈ－11グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸96㎝、短軸73㎝、主軸方向はN－19°－E、深さ23㎝である。断面皿状に掘り込まれ、底面はやや凹凸がある。

遺物は縄文後期の土器片が少量出土した。

第51号土坑（第32図）

Ｉ・Ｊ－12グリッドに位置する。調査時の遺構番号はＳＤ７。平面形は長方形で、長軸888㎝、短軸78㎝、主軸方向はN－53°－E、深さ19㎝である。底面は平坦である。

遺物はまったく出土しなかった。

第52号土坑（第32図）

Ｈ・Ｉ－13グリッドに位置し、第45号土坑に切られる。調査時の遺構番号はＳＤ８。平面形は不整形で、長軸686㎝、短軸106㎝、主軸方向はN－33°－E、深さ37㎝である。底面は概ね平坦である。

遺物はまったく出土しなかった。

第53号土坑（第32図）

Ｉ－12Ｇグリッドに位置する。調査時の遺構番号はＳＤ９。平面形は長方形で、長軸596㎝、短軸62㎝、主軸方向はN－36°－E、深さ20㎝である。底面は概ね平坦である。

遺物はまったく出土しなかった。

第54号土坑（第32図）

Ｊ－12グリッドに位置する。両端が調査区域外に延びるため平面形・規模については不明である。調査時の遺構番号はＳＤ10。検出した部分の規模は長軸約190㎝、短軸52㎝、主軸方向はN－41°－E、深さ10㎝である。底面は概ね平坦である。

遺物はまったく出土しなかった。

第55土坑（第32図）

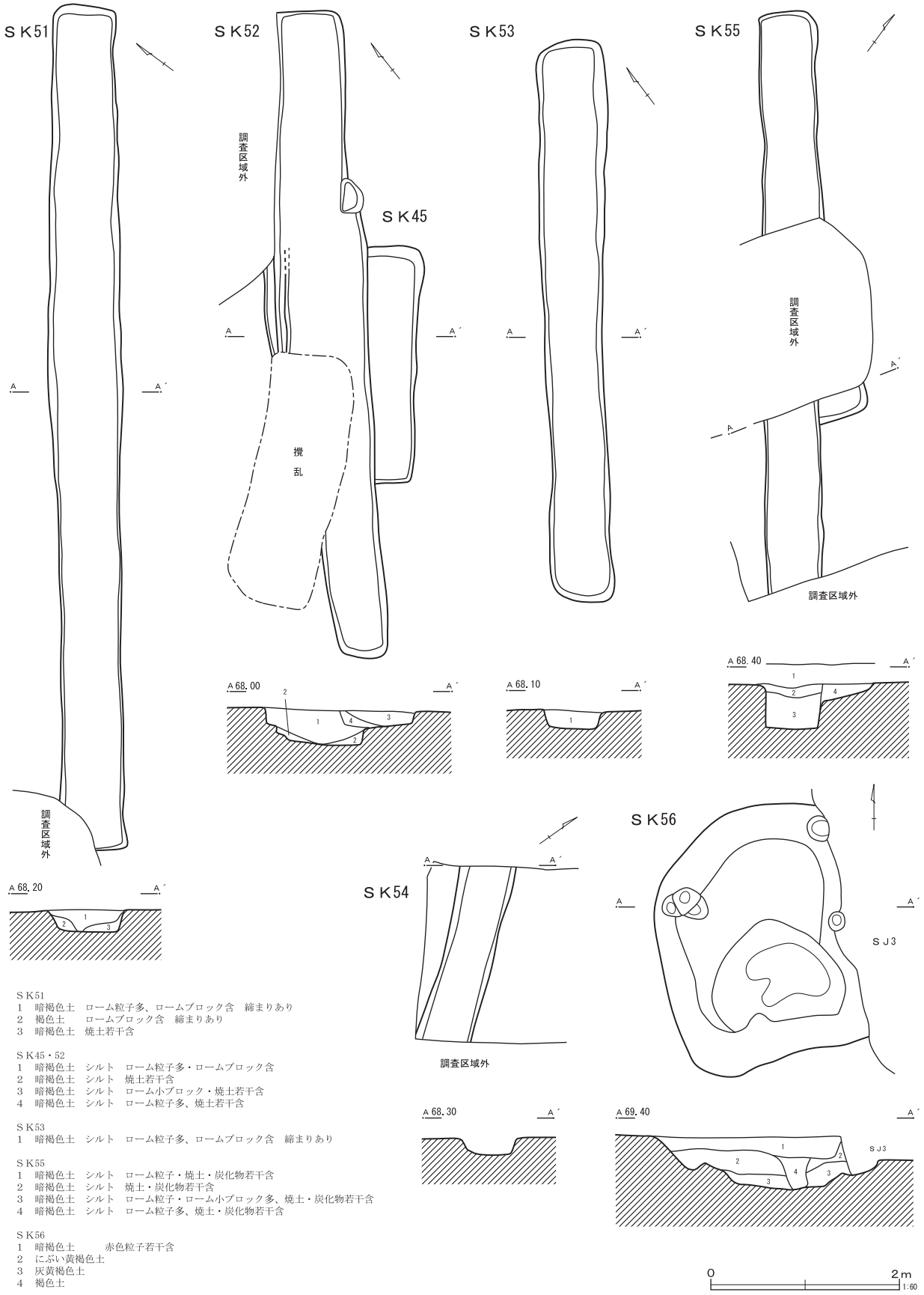
Ｉ－11グリッドに位置する。南東端が調査区域外に延びる。調査時の遺構番号はＳＤ11。平面形・規模は不明であるが、検出した範囲では長軸約606㎝、短軸58㎝、主軸方向はN－36°－W、深さ48㎝である。底面は概ね平坦である。

遺物はまったく出土しなかった。

第56土坑（第32図）

Ｄ－６グリッドに位置する。第３号住居跡の西壁によって切られる。調査時の遺構番号はＳＸ２。平面形は不整形で、長軸264㎝、短軸約200㎝、主軸方向はN－10°－W、深さ62㎝である。

遺物はまったく出土しなかった。



ＳＫ51
1　暗褐色土　ローム粒子多、ロームブロック含　締まりあり
2　褐色土　ロームブロック含　締まりあり
3　暗褐色土　焼土若干含

ＳＫ45・52
1　暗褐色土　シルト　ローム粒子多・ロームブロック含
2　暗褐色土　シルト　焼土若干含
3　暗褐色土　シルト　ローム小ブロック・焼土若干含
4　暗褐色土　シルト　ローム粒子多、焼土若干含

ＳＫ53
1　暗褐色土　シルト　ローム粒子多、ロームブロック含　締まりあり

ＳＫ55
1　暗褐色土　シルト　ローム粒子・焼土・炭化物若干含
2　暗褐色土　シルト　焼土・炭化物若干含
3　暗褐色土　シルト　ローム粒子・ローム小ブロック多、焼土・炭化物若干含
4　暗褐色土　シルト　ローム粒子多、焼土・炭化物若干含

ＳＫ56
1　暗褐色土　　赤色粒子若干含
2　にぶい黄褐色土
3　灰黄褐色土
4　褐色土

第32図　土坑（5）

第７表　土坑一覧表

番号	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主軸方位	平面形態	重複遺構	遺　　物	時　期	旧遺構名
1	A-1	112	92	14	N-90°-W	不整形		縄文土器、石器		
2	A-2	228	156	37	N-８°-W	不整形	P6・7・25	縄文土器、石器	縄文後期	
3	A-1	304	100	54	N-35°-E	長方形		縄文土器、石器、鉄製品	古墳中期	
4	A-2	108	106	19	N-５°-W	円形		縄文土器、石器	縄文後期	
5	A-2	(90)	90	9	N-51°-W	不整形	SK6・7			
6	A-2	150	64	26	N-44°-E	不整形	SK5・7、P10			
7	A-2	(122)	(64)	21	N-43°-E	不整形	SK6・8、P10			
8	A-2	194	90	31	N-73°-W	不整形	SK7	縄文土器、石器	縄文早期	
9	A-2	94	(43)	20	N-16°-W	不整形	SK10			
10	A-2	(164)	132	21	N-61°-E	不整形	SK9	縄文土器	縄文前・後期	
11	B・C-2	(104)	72	44	N-17°-W	長方形	SX1	縄文土器、須恵器、陶磁器	江戸	
12	A-2・3	204	122	37	N-76°-E	不整形	P15			
13	A-2・3	144	(32)	10	N-42°-E	不整形	P17	縄文土器、石器		
14	C-3	(193)	(108)	35	N-47°-E	楕円形	SK15			
15	C-3	(193)	(108)	35	N-47°-E	楕円形	SK14			
16	C-4	134	120	34	N-47°-W	円形		縄文土器、石器	縄文後期	
17	C・D-4	116	97	74	N-82°-W	楕円形				
18	D-4	138	(88)	29	N-58°-W	楕円形	SK19	縄文土器	縄文後期	
19	D-4	(220)	(138)	75	N-65°-W	不整形	SK18・20			
20	D-4	154	(80)	71	N-20°-W	楕円形	SK19			
21	D-4	138	130	29	N-81°-E	円形		縄文土器、石器	縄文後期	
22	A-3	164	(120)	10	N-21°-W	不整形		縄文土器、土師器、須恵器	古墳中期	
23	D-5	74	67	18	N-40°-W	円形				
24	D-5	84	80	30	N-39°-W	円形		縄文土器、石器		
25	D-6	100	92	46	N-60°-W	不整形		縄文土器	縄文前期	
26	E-5	88	58	31	N-60°-W	楕円形				
27	C-5	127	126	24	N-30°-W	不整形		縄文土器	縄文後期	
28	E-6	72	51	10	N-90°-E	不整形		土師器	平安	
29	E-6・7	152	62	28	N-30°-E	不整形				
30	D・E-7	86	72	10	N-76°-E	楕円形				
31	C・D-6	102	(100)	15	N-53°-W	円形		縄文土器	縄文	
32	H-10	(119)	(103)	10	N-80°-E	不整形	SK33・34			
33	H-10	(90)	84	33	N-０°-S	楕円形	SK32			
34	H-10	(90)	88	18	N-73°-E	不整形	SK32・35	縄文土器、石器	縄文中期	
35	H-10	61	55	18	N-32°-E	不整形	SK34			
36	H-10	72	66	24	N-61°-E	楕円形				
37	H-10	122	96	43	N-１°-W	楕円形	Sk38			
38	H-10	94	(56)	9	N-５°-E	楕円形	SK37			
39	H-9	192	82	91	N-77°-W	楕円形		縄文土器		
40	E-8	(172)	(80)	39	N-55°-E	不整形				
41	F-8	(110)	94	134	N-58°-W	楕円形				
42	J-13	326	110	55	N-９°-W	不整形		縄文土器、石器	縄文中・後期	
43	I-13	144	52	18	N-37°-E	長方形		縄文土器		
44	I-14	(158)	(142)	30	N-50°-W	不整形				
45	I-13	252	(55)	14	N-40°-E	長方形				
46	J-13	128	89	42	N-74°-W	不整形				
47	C-6	66	47	8	N-０°-S	不整形				
48	I-12	105	103	7	N-83°-E	円形				
49	I-12	223	60	14	N-42°-W	不整形		縄文土器、須恵器	平安	
50	H-11	96	73	23	N-19°-E	楕円形		縄文土器	縄文後期	
51	I・J-12	888	78	19	N-53°-E	長方形		瀬戸産陶器、肥前産染付け碗	江戸	SD7
52	H・I-13	686	106	37	N-33°-E	不整形		瀬戸産陶器碗	江戸	SD8
53	I-12	596	62	20	N-36°-E	長方形				SD9
54	J-12	(190)	52	10	N-41°-W	長方形				SD10
55	I-11	(606)	58	48	N-36°-W	長方形				SD11
56	D-6	264	(200)	62	N-10°-W	不整形	SJ3			SX2

縄文時代の遺物

第２号土坑出土遺物（第33図１～12）

１は堀之内式期の注口土器の注口部である。３は堀之内１式期の口縁部で、口端直下に段を持ち、１条の沈線が巡る。４も同時期の口縁部で小型壺ないし注口土器に伴うものとみられ、頸部に刻みを伴う断面三角形の隆帯が巡る。２・５・６は堀之内２式の胴部破片と考えられる。７・８は平行沈線文がみられる深鉢胴部で、やはり堀之内式期のものとみられる。９～11は無文、12は縄文のみ施文される破片で、後期前葉のものと考えられる。

第４号土坑出土遺物（第33図13～16）

13は称名寺式の口縁部である。口縁直下に帯縄文が巡り、胴上半部にＪ字文が描かれるものであろう。14は称名寺式終末期の深鉢口縁部で、大波状口縁をなすものと考えられる。15は縄文のみ、16は無文の破片で、後期初頭～前葉のものと考えられる。

第８号土坑出土遺物（第33図17～19）

いずれも早期末葉の繊維土器である。17は無文の口縁部、18・19は条痕文のみられる胴部破片である。

第10号土坑出土遺物（第33図20・21）

20は諸磯式の胴部であろう。半截竹管による縦位の列点文がみられる。21は縄文のみ施文される破片で、後期の深鉢と考えられる。

第13号土坑出土遺物（第34図１）

１は加曾利ＥⅢ式である。

第16号土坑出土遺物（第34図２～６）

いずれも称名寺式終末期と考えられる。６は深鉢胴下半部の大破片で、地文を持たず吊鉤状のモチーフが描かれる。２～４は沈線文のみの破片である。５は縦位の条線が施文される胴下半部である。

第18号土坑出土遺物（第34図７・８）

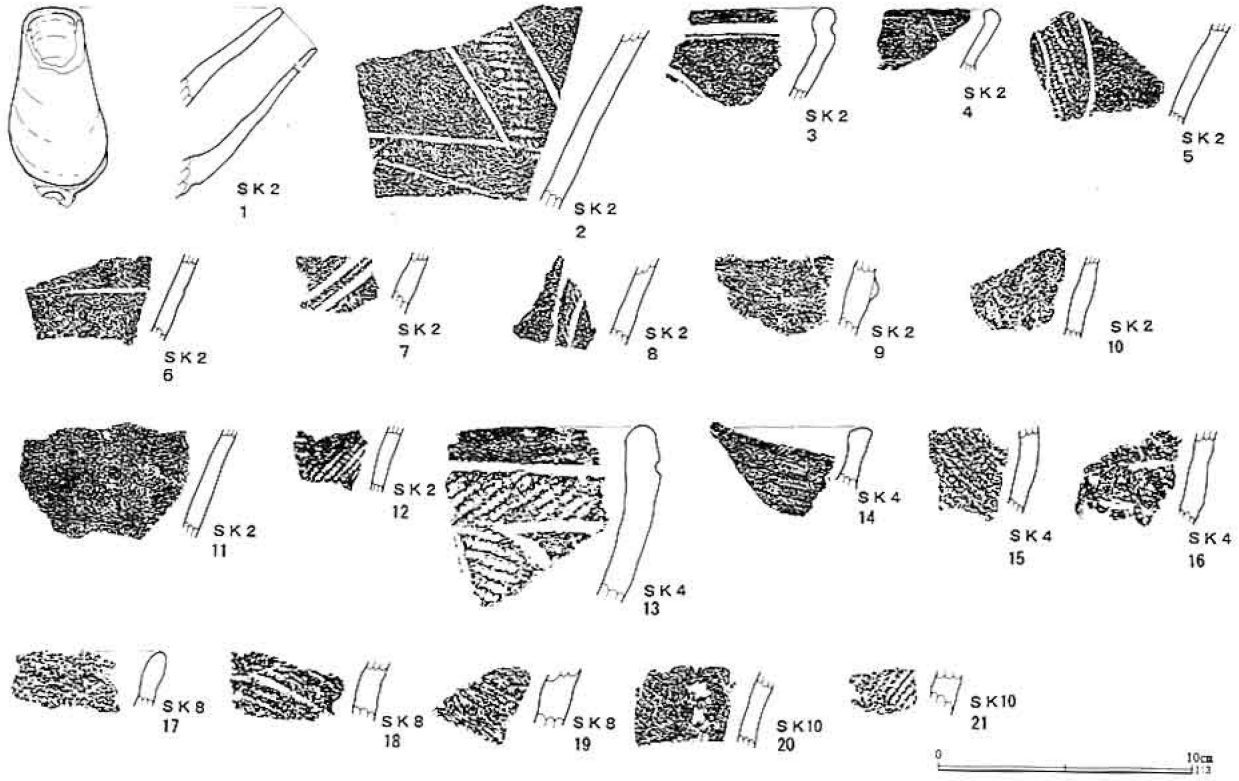
７は縄文のみ施文される胴部、８は無文の底部である。いずれも後期初頭～前葉と考えられる。

第21号土坑出土遺物（第34図９）

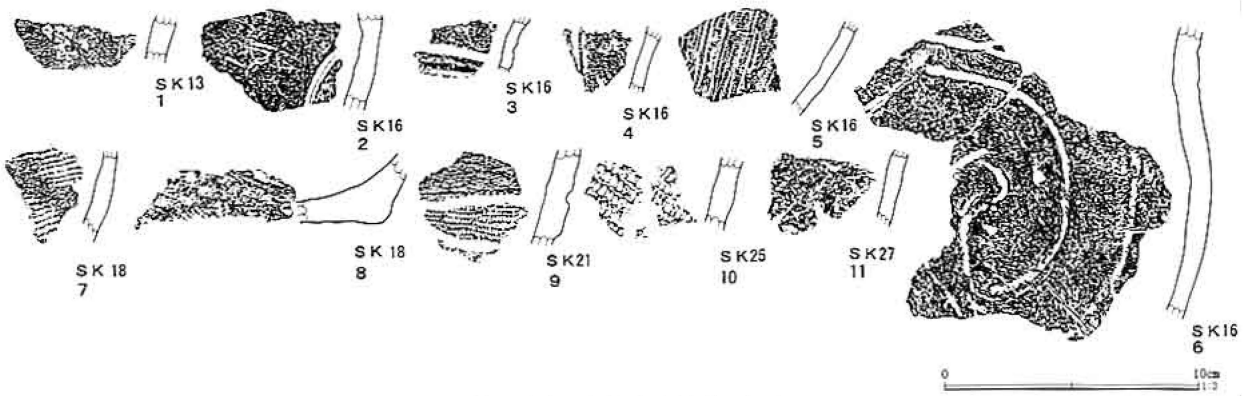
帯縄文のみられる厚手の胴部で、称名寺式前半期のものである。

第25号土坑出土遺物（第34図10）

前期前葉の繊維土器である。ＲＬ単節の縄文が横位回転で施文される。



第33図　土坑出土遺物（１）



第34図　土坑出土遺物（2）

第27号土坑出土遺物（第34図11）

無文の胴部で、後期初頭～前葉と考えられる。

第31号土坑出土遺物（第35図1）

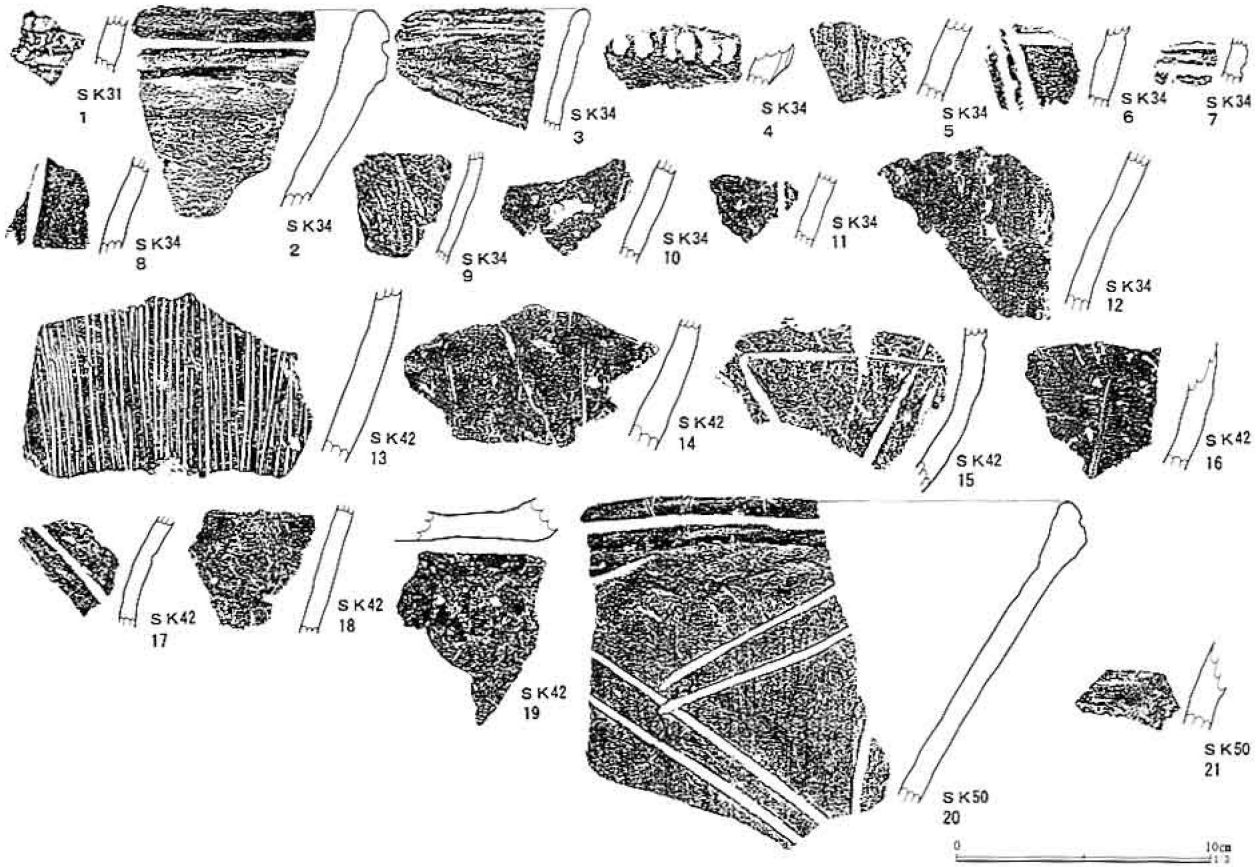
無節の縄文が施文される胴部である。

第34号土坑出土遺物（第35図2～12）

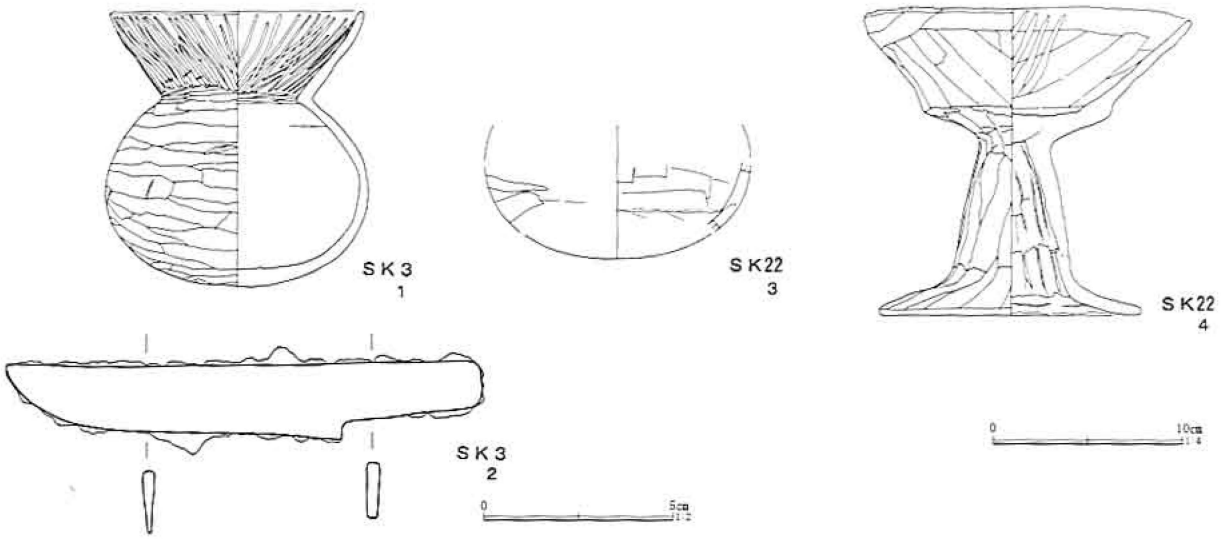
5は加曾利EⅢ式、それ以外は堀之内1式であろう。2・3は口縁部で、2は口唇直下に1条の沈線が巡る。4は口縁直下の段の部分で棒状工具の刻みがみられる。6～8は平行沈線文がみられる胴部である。9～12は無文の胴部である。

第42号土坑出土遺物（第35図13～19）

13は加曾利EⅢ式の浅鉢胴下半部と考えられる。櫛歯状工具による集合沈線文がみられ、内面研磨が徹底される。15・17は平行沈線により三角形の区画が描かれる。14・16・18は無文の胴部、19は底部である。後期初頭～前葉と考えられる。



第35図　土坑出土遺物（3）



第36図　土坑出土遺物（4）

第8表　第3号土坑出土遺物観察表（第36図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
1	土師坩	13.2	14.5		ＡＦＪＫ	良好	明赤褐	100	覆土	
2	鉄製刀子	長さ12.7cm　刃長8.9cm　刃幅2.0cm　背幅0.3cm							覆土	完存

第9表　第22号土坑出土遺物観察表（第36図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
3	土師坩				ＡＣＪＫ	良好	赤褐	20	覆土	
4	土師高坏	17.2	16.2		ＡＢＦＫ	良好	明赤褐	95	覆土	裾部径13.9cm

第50号土坑出土遺物（第35図20・21）

20は堀之内式の深鉢口縁部で、口唇直下に1条の沈線が巡り、胴部に平行沈線による三角形区画文が描かれる。21は無文の胴部である。

古墳時代の遺物

第3号土坑出土遺物（第36図1・2）

1は土師器の坩形土器である。口径13.2㎝、体部径13.9㎝、器高14.5㎝を測る。やや下膨れ気味の体部から大きく開く口縁部に至り、口縁部中位以上でやや内湾気味となる。体部外面はヘラ削り後ミガキに近いナデを施し、口縁部内外面にヘラミガキを入念に施す。外面に比べ内面のヘラミガキはやや粗い。体部内面は丁寧なナデ調整である。器形の特徴から5世紀前半に位置づけられる。

2は鉄製の刀子である。全長12.7㎝、刃長8.9㎝、刃幅最大2.0㎝、茎部長3.8㎝、茎部幅1.5㎝である。刃関は角関で、全体に残りも良く、しっかりした造りである。

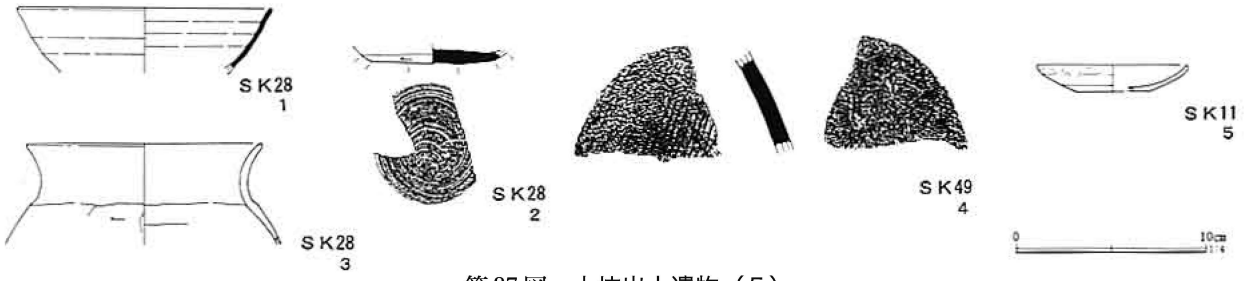
第22号土坑出土遺物（第36図3・4）

3は土師器の坩形土器の体部破片である。破片のため全体の器形は不明である。体部外面は横方向のヘラ削り後ミガキに近いナデを施す。体部内面下位に粘土帯接合痕の段差を明瞭に残し、木口状工具によるナデを丁寧に施す。4は土師器の高坏形土器である。口径17.2㎝、器高16.2㎝、裾部径13.9㎝を測る。口縁部の一部を欠損する。坏部は内外面ともやや雑にナデを施し、内面に一部ミガキを施す。坏部底面は器面が荒れている。脚部は外面に幅広のナデを施す。脚部内面は粘土紐の巻き上げ痕や絞目を明瞭に残し、整形はやや雑である。時期的には第3号土坑と同じく5世紀前半に位置づけられる。

平安時代の遺物

第28号土坑出土遺物（第37図1～3）

1・2は須恵器の坏である。2は底部糸切り離し



第37図　土坑出土遺物（５）

第10表　第28号土坑出土遺物観察表（第37図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
1	須恵坏	(13.4)			ＡＨＪ	良好	灰	15	覆土	
2	須恵坏			6.4	ＡＧＨＪ		灰	40	覆土	底部糸切り後周辺及び下端左回転ヘラ削り
3	土師甕	(12.3)			ＡＢＪ	普通	灰褐	20	覆土	

第11表　第49号土坑出土遺物観察表（第37図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
4	須恵甕				ＡＧＨＪ	良好	黄灰	破片	覆土	外面平叩き目 内面無文当て具 外面自然釉

第12表　第11号土坑出土遺物観察表（第37図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
5	陶器平皿	(7.8)	1.4	(3.8)	A	良好	にぶい黄橙	20	覆土	淡緑色の灰釉を施釉

後周辺及び体部下端をヘラ削りする。底部内面は不定方向のナデを施す。両者とも南比企窯の製品で、８世紀後葉に位置づけられる。

３は土師器甕の破片である。本来はコの字状口縁の小型台付甕と考えられる。内面に煤が付着する。

第49号土坑出土遺物（第37図４）

４は須恵器甕の体部破片である。外面は平行叩き目、内面は無文の当て具痕を残す。外面に光沢のある自然釉が付着する。南比企窯の製品である。

近世の遺物

第11号土坑出土遺物（第37図５）

薄く透明釉を施釉した平皿である。釉には細かく貫入がはいる。18世紀末葉以降の製品で、灯明具として使用されたものである。

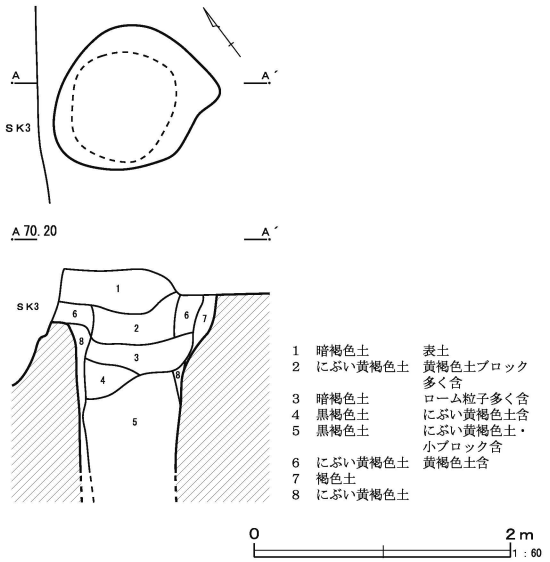
（３）井戸跡

井戸跡は調査区北端に１基のみ検出された。素掘りの井戸で、時期を示す遺物はないが、近世の井戸跡であろう。

第１号井戸跡（第38図）

Ａ区北端のＡ－１グリッドに位置する。北西側に第３号土坑が接している。平面形は円形で、規模は長径1.34ｍ、短径1.14ｍ、主軸方向はＮ－50°－Ｗである。掘り下げた深さは1.18ｍで、断面形は漏斗形を呈する。埋土の堆積状況は人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、埋土の状況から近世のものと考えられる。



第38図　第１号井戸跡

（4）溝跡

第１号溝跡（第40図）

Ｂ－１・２グリッドに位置する。調査区西側から緩やかに屈曲しながら南東方向へ延び、第３号溝跡に合流する。幅0.55ｍ、深さ0.45ｍを測り、断面Ｖ字形を呈する。時期を示す遺物は出土しなかった。

第２号溝跡（第40図）

Ｂ－２グリッドに位置する。調査区西側から東方向へ直線的に延び、第３号溝跡に合流する。幅0.95～1.25ｍ、深さ0.3ｍ前後を測り、断面逆台形を呈する。底面は凹凸が著しい。第３号溝に切られる。

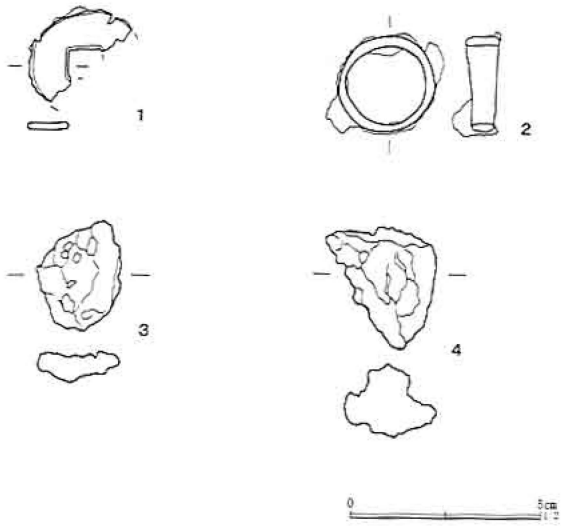
時期を示す遺物は出土しなかった。

第３号溝跡（第39・40図）

Ａ－３・４、Ｂ－２・３・４、Ｃ－２・３グリッドに位置する。調査区の制約のため全体の形態は不明であるが、東西20.6ｍ、南北10.6ｍを長方形に囲繞した区画溝である。北辺は緩やかに曲線を描きながら東から西へと延び、第１号溝跡を合流しながら南へと直角に曲がり、西辺では第２・６号溝跡と直交する。そして、南西隅部で一部途切れ、東へと第４号溝跡と並走しながら直線的に延び、東端で南へと大きく屈曲し、調査区外へ延びる。

溝の規模は北辺で幅0.8ｍ前後、深さ0.55ｍ、西辺で幅1.4ｍ、深さ1.1ｍ、南辺で幅0.6～0.8ｍ、深さ1.1ｍを測り、断面Ｖ字形を呈する。

遺物は近世の陶磁器片のほか、鉄製円環、鉄銭、鉄滓がある。１は鉄製の円盤である。中央に四角い孔が開くことから、銭貨であろう。直径３㎝程に復元される。２は直径2.5㎝の鉄製円環である。幅0.6～0.9㎝の延板を円環状に丸めたもので、用途は不明。鍛造品であろう。このほか図示しなかったが第４号溝跡との重複部分から刷毛目丸碗、染付け碗の破片が出土している。赤褐色の細かい胎土の刷毛目碗で、18世紀の唐津系の製品である。



第39図　第３号溝出土遺物

第４号溝跡（第40図）

Ｂ－３・４、Ｃ－３グリッドに位置する。第３号溝跡の南辺に接するように東西方向に直線的に延びる。長さ18.4ｍ、幅1.1ｍ、深さ0.6ｍを測り、断面Ｖ字形を呈する。第３号溝跡を切っている。

時期を示す遺物は出土しなかった。

第５号溝跡（第40図）

Ｂ－４グリッドに位置する。西から東へ向かって緩やかに走行し調査区外へと延びる。長さ8.0ｍ、最大幅1.7ｍ、深さ0.8ｍを測り、断面は階段状を呈する。遺構の時期を示す遺物として近世の瀬戸産の陶器鉢の破片が出土した。

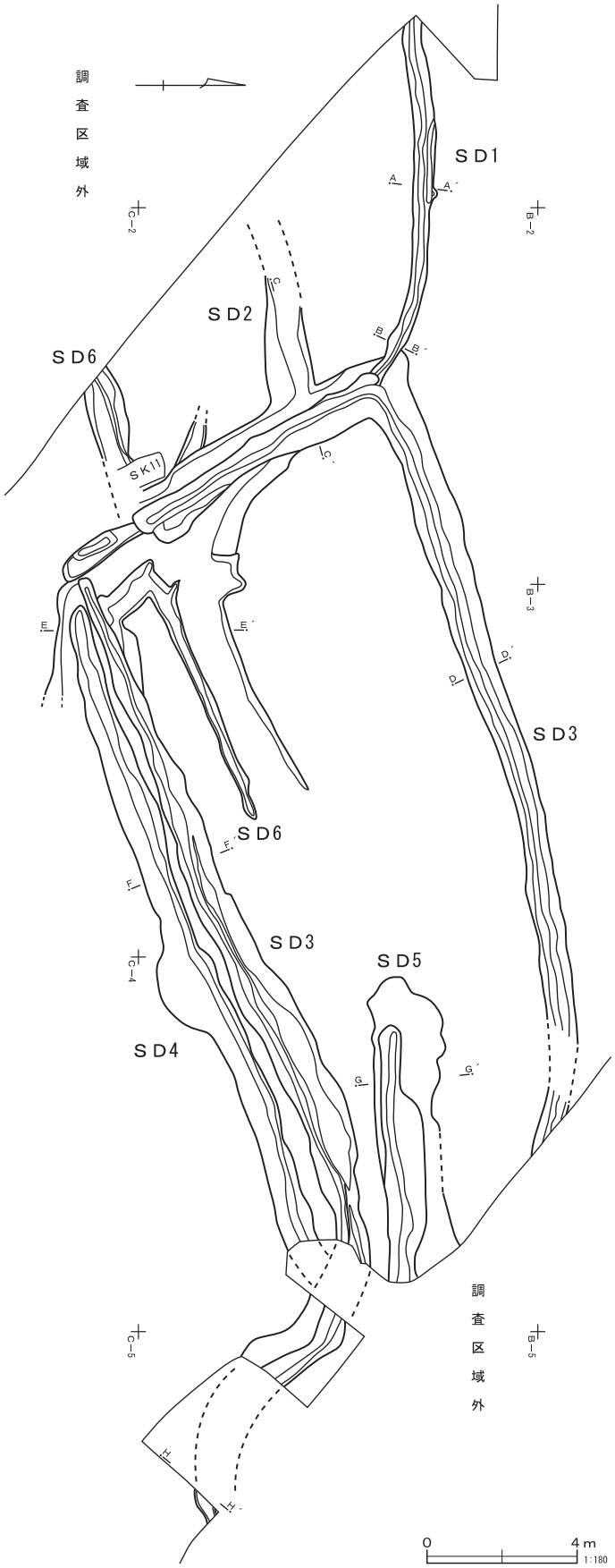
第６号溝跡（第40図）

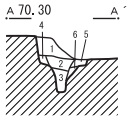
Ｂ－２・３、Ｃ－２グリッドに位置する。長さ12.5ｍ、幅0.35～1.0ｍ、深さ0.2～0.36ｍを測り、北側に幅広の平坦面をもつ。第３号溝跡に切られる。

時期を示す遺物は出土しなかった。

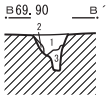
第13表　第３号溝跡出土遺物計測表（第39図）

番号	器　種	計　測　値	出土位置	備　　考
1	銭貨	直径3.0㎝　厚さ0.2㎝　孔径0.9×0.8㎝	覆土	鉄製　一部欠損
2	鉄製環状品	直径2.5㎝　幅0.6～0.9㎝　厚さ0.2㎝	覆土	用途不明 完存 鉄板を環状に丸める 鍛造
3	鉄滓	長さ2.9㎝　幅2.3㎝　厚さ0.9㎝	覆土	
4	鉄滓	長さ3.3㎝　幅2.9㎝　厚さ2.0㎝	覆土	

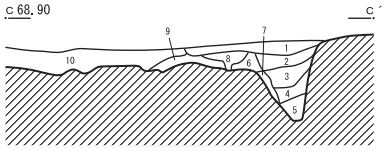




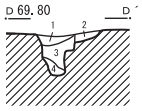
A－A´
1　暗褐色土
2　黒褐色土　締まりなし
3　ローム・黒褐色土混合土
4　暗褐色土　褐色土多く含
5　黒褐色土
6　ローム　　黒褐色土含

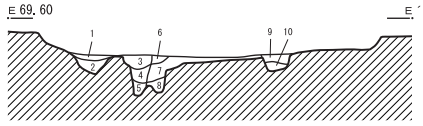


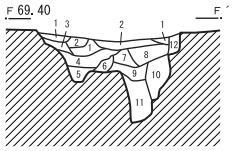
B－B´
1　黒褐色土
2　ローム
3　ローム・黒褐色土混合土



C－C´
1　暗褐色土　締まりなし
2　暗褐色土　ロームブロック若干含　締まりなし
3　黒褐色土　ローム粒子・ロームブロック含
4　黒色土
5　黒色土　　ロームブロック多く含
6　暗褐色土　ロームブロック若干含
7　黒色土　　黄褐色土若干含
8　暗褐色土
9　黒褐色土　ロームブロック多く含
10　黒褐色土　ロームブロック含

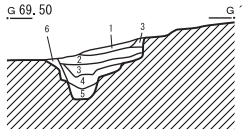




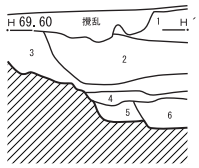


D－D´・E－E´
1　黒褐色土　　砂質
2　黒褐色土　　粗粒　黄褐色土粒含
3　黒褐色土　　ロームブロック若干含
4　黒褐色土　　ロームブロック多く含
5　ロームブロック・黒褐色土混合土
6　黒褐色土
7　黒褐色土　　ロームブロック極多く含
8　ロームブロック
9　灰黄褐色土　ロームブロック含
10　ローム

F－F´
1　黒褐色土　ロームブロック・黄褐色土多く含
2　黒褐色土　ロームブロック若干含
3　黒褐色土
4　黒褐色土　粗粒　黄褐色土粒子含
5　黒褐色土　砂質
6　ローム
7　明黄褐色土
8　黒褐色土　　ロームブロック多く含
9　黒褐色土　　砂質
10　ロームブロック・黒褐色土混合土
11　ロームブロック
12　黒褐色土　　締まりなし



G－G´
1　黒褐色土　ロームブロック含
2　黒褐色土
3　ロームブロック
4　黒褐色土　ロームブロック含
5　黒褐色土　黄褐色土粒子多く含
6　暗褐色土



H－H´
1　にぶい黄褐色土　ローム粒子含
2　灰黄褐色土　　ローム粒子・ロームブロック極多く含
3　黒褐色土　　ローム粒若干　締まりなし
4　暗褐色土　　黄褐色土多く含
5　にぶい黄褐色土　暗褐色土含
6　黒褐色土　　ロームブロック若干含

0　4m
1:100

第40図　第1～6号溝

（5）ピット

検出されたピットは、合計44基である。分布状況はＡ区北端のＡ－１～３グリッドと住居跡周辺のＤ－４・５グリッドの２箇所にややまとまりが認められた。

建物跡を構成するような並びをもつピット群は確認できなかったが、縄文土器や石器の破片を出土するものも若干あることから、縄文時代の住居跡に伴う柱穴などが含まれている可能性は残る。

以下、遺物を出土したものを中心に詳述する。

ピット３（第41図）

Ａ－１グリッドに位置する。規模は長径44㎝、短径40㎝、深さ27㎝を測る。遺物は堀之内１式の深鉢片が出土した。

ピット６（第41図）

Ａ－２グリッドに位置し、第２号土坑と重複する。規模は長径78㎝、短径約70㎝、深さ35㎝を測る。遺物は堀之内式期の深鉢片と磨石片が出土した。

ピット７（第41図）

Ａ－２グリッドに位置し、第２号土坑と重複する。規模は長径35㎝、短径30㎝、深さ64㎝で、覆土に焼土粒を若干含む。遺物は堀之内２式の深鉢片が出土した。

ピット10（第28図）

Ａ－２グリッドに位置する。第６号土坑と重複していたため形状及び規模について詳細を確認できなかった。遺物は前期前葉の縄文土器片が出土した。

ピット11（第41図）

Ａ－２グリッドに位置する。規模は長径60㎝、短径40㎝、深さ84㎝を測る。遺物は縄文中期末葉～後期初頭の深鉢片が出土した。

ピット22（第42図）

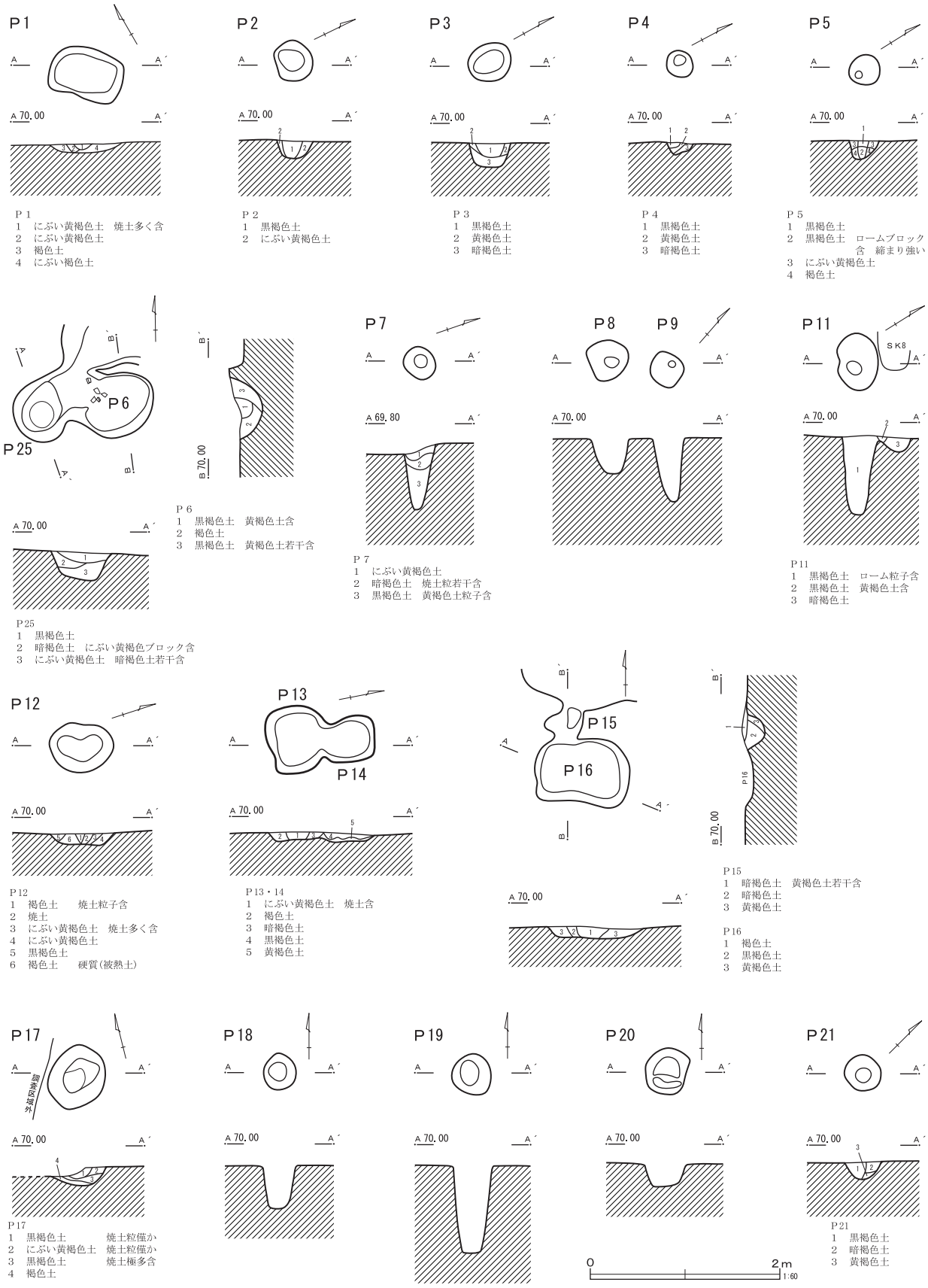
Ａ－２グリッドに位置する。規模は長径33㎝、短径25㎝、深さ29㎝を測る。遺物は堀之内２式の深鉢片が出土した。

ピット33（第42図）

Ａ－２グリッドに位置し、第２号土坑と重複する。規模は長径51㎝、短径50㎝、掘り下げた深さは106㎝である。遺物は石皿の破片が出土した。

第14表　ピット一覧表

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	遺　物
P1	A-1	78	52	9	
P2	A-1	42	41	20	
P3	A-1	44	40	27	縄文土器
P4	B-1	30	28	32	
P5	A-1	33	30	13	
P6	A-2	78	(70)	35	縄文土器、磨石、礫器
P7	A-2	35	30	64	縄文土器
P8	A-2	43	42	34	縄文土器
P9	A-2	35	33	65	
P10	A-2	60	(58)	24	縄文土器、土師器
P11	A-2	60	40	84	縄文土器、礫器
P12	A-2	68	51	12	
P13	A-2	72	(59)	8	
P14	A-2	(55)	49	7	
P15	A-2	(42)	40	26	
P16	A-2・3	100	66	20	
P17	A-3	68	57	22	
P18	A-3	38	34	42	
P19	A-3	42	42	90	
P20	A-3	49	44	27	土師器
P21	A-2	38	37	19	
P22	A-2	33	25	29	縄文土器
P23	A-2	(101)	82	23	
P24	A-2	(36)	(27)	32	
P25	A-2	67	52	27	
P26	D-4	46	44	54	土師器
P27	D-4	44	36	13	縄文土器
P28	D-4	56	40	36	礫器
P29	D-4	49	37	17	
P30	D-4	59	58	47	
P31	D-5	38	35	21	土師器
P32	D-5	(44)	44	19	
P33	A-2	51	50	106以上	縄文土器、石皿
P34	D-5	40	38	66	
P35	D-5	63	56	66	
P36	D-5	33	30	19	縄文土器
P37	D-5	27	24	16	
P38	D-5	25	24	27	
P39	D-5	30	21	45	
P40	D-5	30	25	29	
P41	D・E-6	61	39	32	土師器
P42	C-5	28	22	18	縄文土器、土師器
P43	E-6	50	48	21	
P44	H-10・11	34	33	7	



P1
1　にぶい黄褐色土　焼土多く含
2　にぶい黄褐色土
3　褐色土
4　にぶい褐色土

P2
1　黒褐色土
2　にぶい黄褐色土

P3
1　黒褐色土
2　黄褐色土
3　暗褐色土

P4
1　黒褐色土
2　黄褐色土
3　暗褐色土

P5
1　黒褐色土
2　黒褐色土　ロームブロック含　締まり強い
3　にぶい黄褐色土
4　褐色土

P6
1　黒褐色土　黄褐色土含
2　褐色土
3　黒褐色土　黄褐色土若干含

P7
1　にぶい黄褐色土
2　暗褐色土　焼土粒若干含
3　黒褐色土　黄褐色土粒子含

P11
1　黒褐色土　ローム粒子含
2　黒褐色土　黄褐色土含
3　暗褐色土

P25
1　黒褐色土
2　暗褐色土　にぶい黄褐色ブロック含
3　にぶい黄褐色土　暗褐色土若干含

P12
1　褐色土　焼土粒子含
2　焼土
3　にぶい黄褐色土　焼土多く含
4　にぶい黄褐色土
5　黒褐色土
6　褐色土　硬質(被熱土)

P13・14
1　にぶい黄褐色土　焼土含
2　褐色土
3　暗褐色土
4　黒褐色土
5　黄褐色土

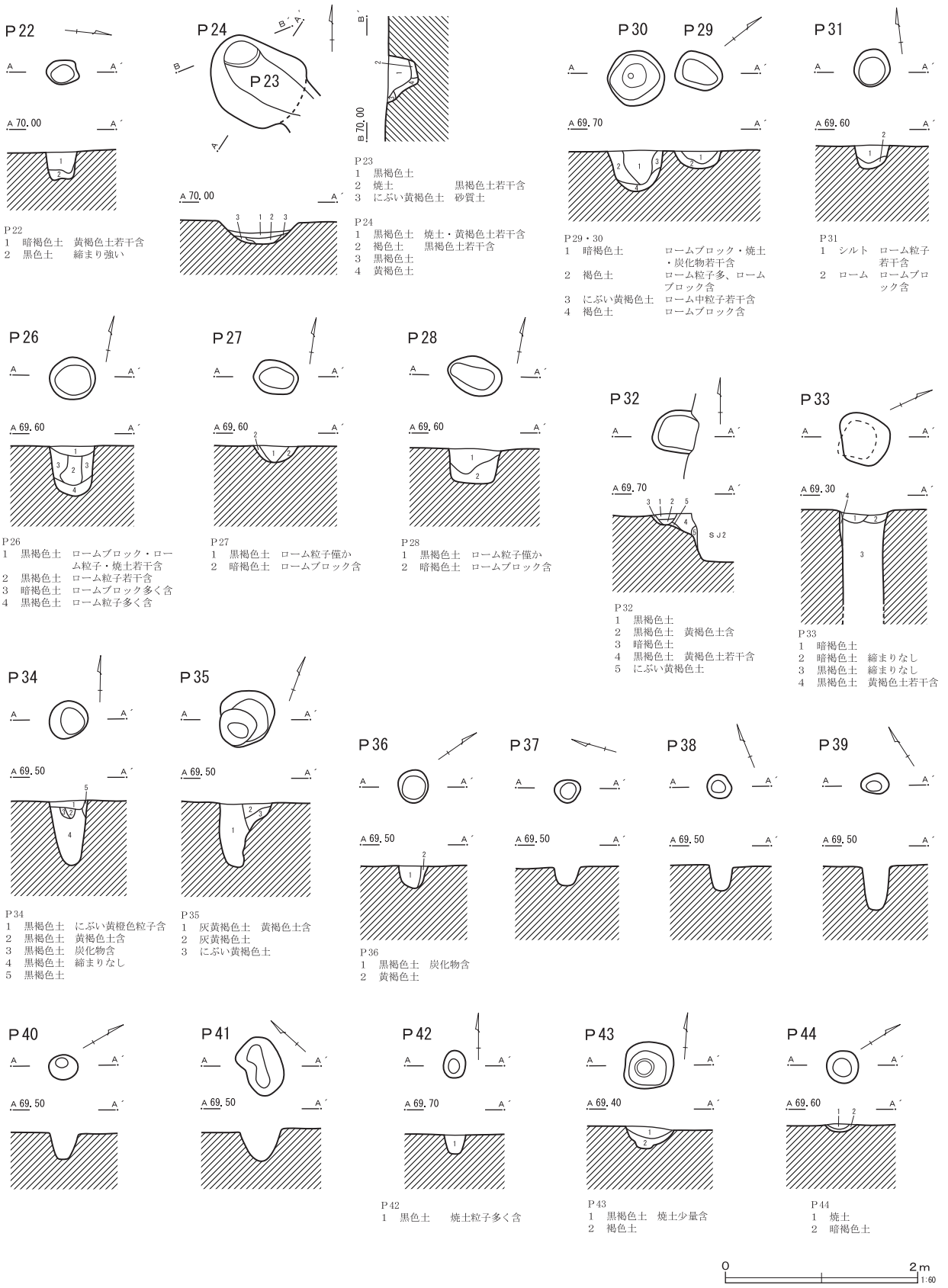
P15
1　暗褐色土　黄褐色土若干含
2　暗褐色土
3　黄褐色土

P16
1　褐色土
2　黒褐色土
3　黄褐色土

P17
1　黒褐色土　焼土粒僅か
2　にぶい黄褐色土　焼土粒僅か
3　黒褐色土　焼土極多含
4　褐色土

P21
1　黒褐色土
2　暗褐色土
3　黄褐色土

第41図　ピット（1）



P22
1　暗褐色土　黄褐色土若干含
2　黒色土　締まり強い

P23
1　黒褐色土
2　焼土　黒褐色土若干含
3　にぶい黄褐色土　砂質土

P24
1　黒褐色土　焼土・黄褐色土若干含
2　褐色土　黒褐色土若干含
3　黒褐色土
4　黄褐色土

P29・30
1　暗褐色土　ロームブロック・焼土・炭化物若干含
2　褐色土　ローム粒子多、ロームブロック含
3　にぶい黄褐色土　ローム中粒子若干含
4　褐色土　ロームブロック含

P31
1　シルト　ローム粒子若干含
2　ローム　ロームブロック含

P26
1　黒褐色土　ロームブロック・ローム粒子・焼土若干含
2　黒褐色土　ローム粒子若干含
3　暗褐色土　ロームブロック多く含
4　黒褐色土　ローム粒子多く含

P27
1　黒褐色土　ローム粒子僅か
2　暗褐色土　ロームブロック含

P28
1　黒褐色土　ローム粒子僅か
2　暗褐色土　ロームブロック含

P32
1　黒褐色土
2　黒褐色土　黄褐色土含
3　暗褐色土
4　黒褐色土　黄褐色土若干含
5　にぶい黄褐色土

P33
1　暗褐色土
2　暗褐色土　締まりなし
3　黒褐色土　締まりなし
4　黒褐色土　黄褐色土若干含

P34
1　黒褐色土　にぶい黄橙色粒子含
2　黒褐色土　黄褐色土含
3　黒褐色土　炭化物含
4　黒褐色土　締まりなし
5　黒褐色土

P35
1　灰黄褐色土　黄褐色土含
2　灰黄褐色土
3　にぶい黄褐色土

P36
1　黒褐色土　炭化物含
2　黄褐色土

P42
1　黒色土　焼土粒子多く含

P43
1　黒褐色土　焼土少量含
2　褐色土

P44
1　焼土
2　暗褐色土

第42図　ピット（2）

縄文時代の遺物

ピット３出土遺物（第43図１）

堀之内１式の深鉢である。水平口縁上にＣ字状の貼付文をもつ。口縁直下に段をもち、横位の楕円形区画文が描かれる。区画内部には列点文が充填される。胴部には平行沈線により三角形の区画文を描く。縄文は施文されない。

ピット６出土遺物（第43図２～４）

２は無文の頸部で、胴部との境を横位の平行沈線で区画するものとみられる。３は無文地に沈線文の描かれる深鉢胴部である。いずれも堀之内式期のものと考えられる。４は磨石片で、両面使用される。石材は黒雲母花崗岩である。

ピット７出土遺物（第43図５）

平行沈線を用いた磨消文様のみられる胴部で、堀之内式２式と考えられる。

ピット10出土遺物（第43図６）

前期前葉の繊維土器口縁部である。無節の縄文が施文されるが、圧痕が浅く使用原体は不明である。

ピット11出土遺物（第43図７）

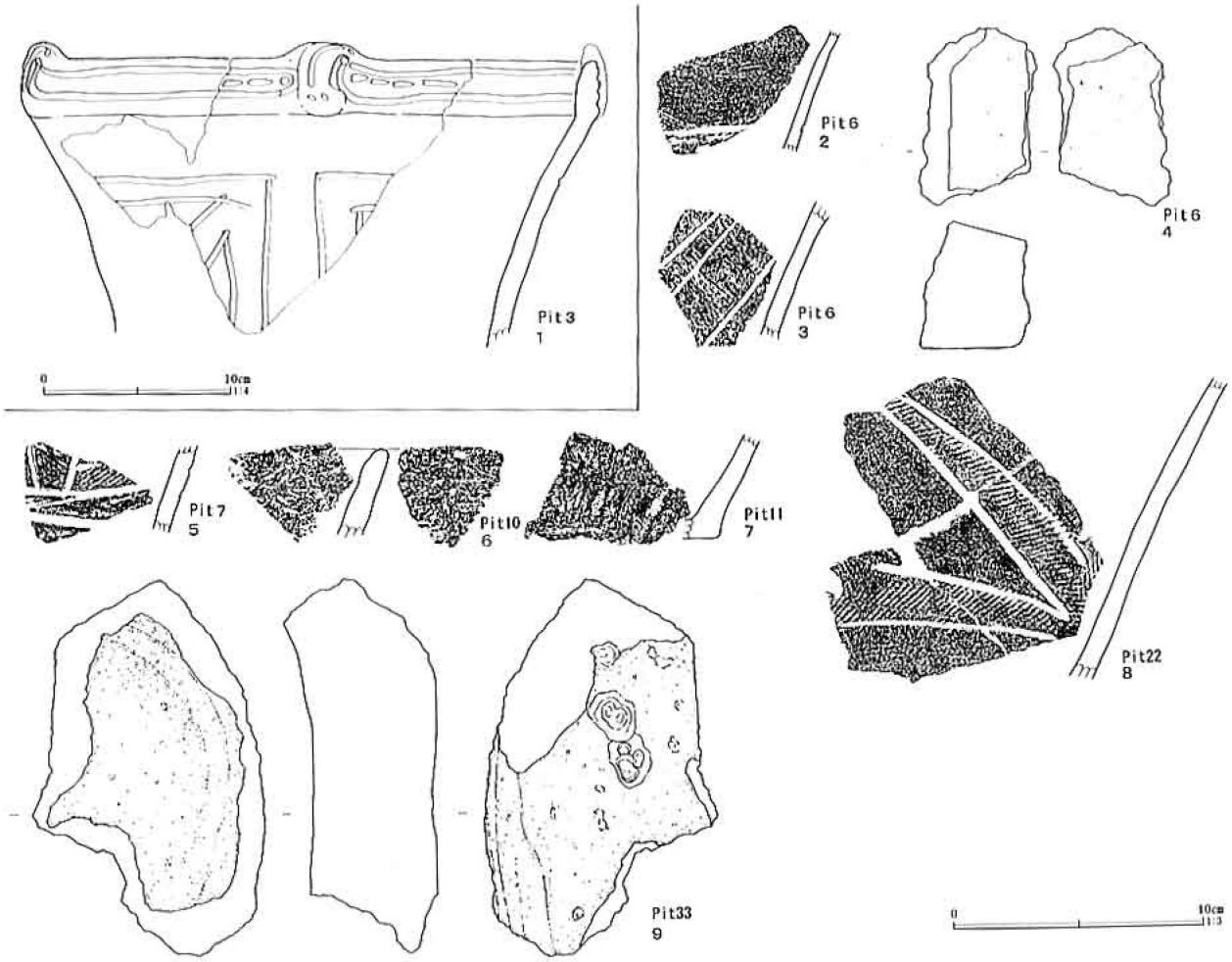
深鉢底部で、縦位の沈線が垂下し、全面に研磨が徹底される。中期末葉～後期初頭と考えられる。

ピット22出土遺物（第43図８）

堀之内２式の深鉢胴部である。文様帯上下端を帯縄文で区画し、内部を斜位の帯縄文で分割して三角形のパネル状区画を構成する。

ピット33出土遺物（第43図９）

石皿片である。多孔質の安山岩を使用する。楕円形の自然礫を使用しているものとみられる。背面は凹石として再利用されている。



第43図　ピット出土遺物

（6）グリッド出土遺物

縄文時代の遺物（第44～46図）

１・２は絡条体圧痕がみられる早期の土器である。３は早期末葉の繊維土器で、貝殻条痕文が施文される。４～13は前期初頭の繊維土器である。いずれも地文縄文で、12は羽状縄文である。

14・15は諸磯ｂ式である。14は爪形文と斜位の刻目文が重畳する。15は地文縄文上に半截竹管による平行沈線文が横位展開する。

16～19は諸磯ｃ式である。16の口縁部には円盤状の小突起が付される。

20は阿玉台式である。箆状工具先端による縦位の刺突が巡る。21～56は加曽利ＥⅢ式である。21・22はキャリパー系深鉢口縁部、23・24は口唇外屈して頸部にタガ状の隆帯が巡る特異な深鉢口縁部である。

25～30は口縁部文様帯を喪失する深鉢である。25は地文縄文上に縦位の集合沈線が施文される。26は微隆起線により磨消文様が描かれる。27～30は口縁下を沈線で区画するもので、28は称名寺式の可能性がある。31・32は両耳壺の口縁部である。

33～44は磨消懸垂文の胴下半部である。47～49は微隆起線文により磨消文様が描かれる。50は集合沈線文を地文とする深鉢口縁部である。

51～55は縄文のみ施文される胴部破片である。56は無文の底部直上部分である。

57～85は称名寺式である。57～63・65は縄文、64および66以下は無文ないし列点文の土器である。

57は山形波状口縁で、口縁部直下に沈線に区画された縄文帯を持つ。60は文様帯の下端を波状に区画する帯縄文の一部が確認される。

64は口縁部に単独で付される朝顔形の突起である。66～80は地文を持たない沈線のみの土器である。67・68にはＪ字文の一部がみられる。81～85は沈線間に列点文が充填される。

86～123は堀之内１式である。86～88に口縁部の突起を一括した。86は短沈線と盲孔を伴うＣ字状の貼付文である。87は片流れの山形突起で、中央に貫通孔を穿ち、左右に盲孔を配する。

90～92・95は口縁下に段を持ち、１条の沈線が巡る。91は段上に刻みを施す。93・94は平行沈線による区画を持ち、93では区画内に列点文を充填する。97・98は直立に近く口端内面が張り出すもので、97では頸部を平行沈線で区画している。

99・100は頸部の区画線上に８字状の貼付文を配するものである。109は半粗製的な土器の口縁部で、地文縄文上に斜位の集合沈線を施文する。

101～108、110～123は平行沈線文のみられる胴部である。多く２本ないし３本単位の沈線によって文様を描出する。101・102・104は地文縄文。110は109に類似の半粗製的な土器である。106は中央に列点を伴う連鎖状の隆帯が垂下する。

113は壺ないし注口土器のような特殊な器形をなすものと思われる。

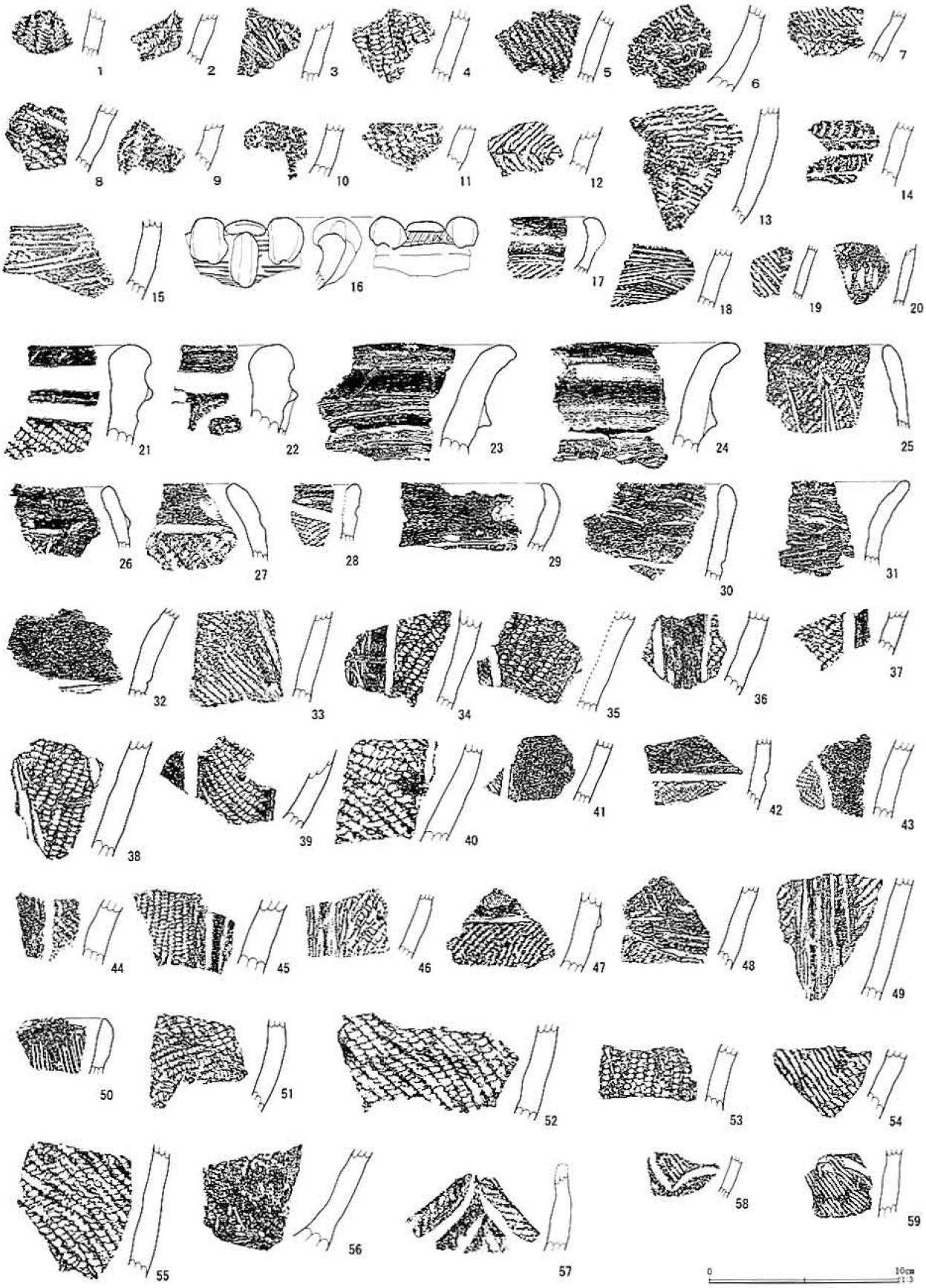
121は隆帯状に円形竹管の刺突を配する。122は２条の刺突列が垂下する。123が横位の区画内に円形刺突が充填される。

124～129は堀之内２式である。124～130は精製深鉢の口縁部だが、一部に浅鉢が混じる可能性がある。口縁直下に刻みを伴う隆帯が巡り、124・127・128は内文を持つ。

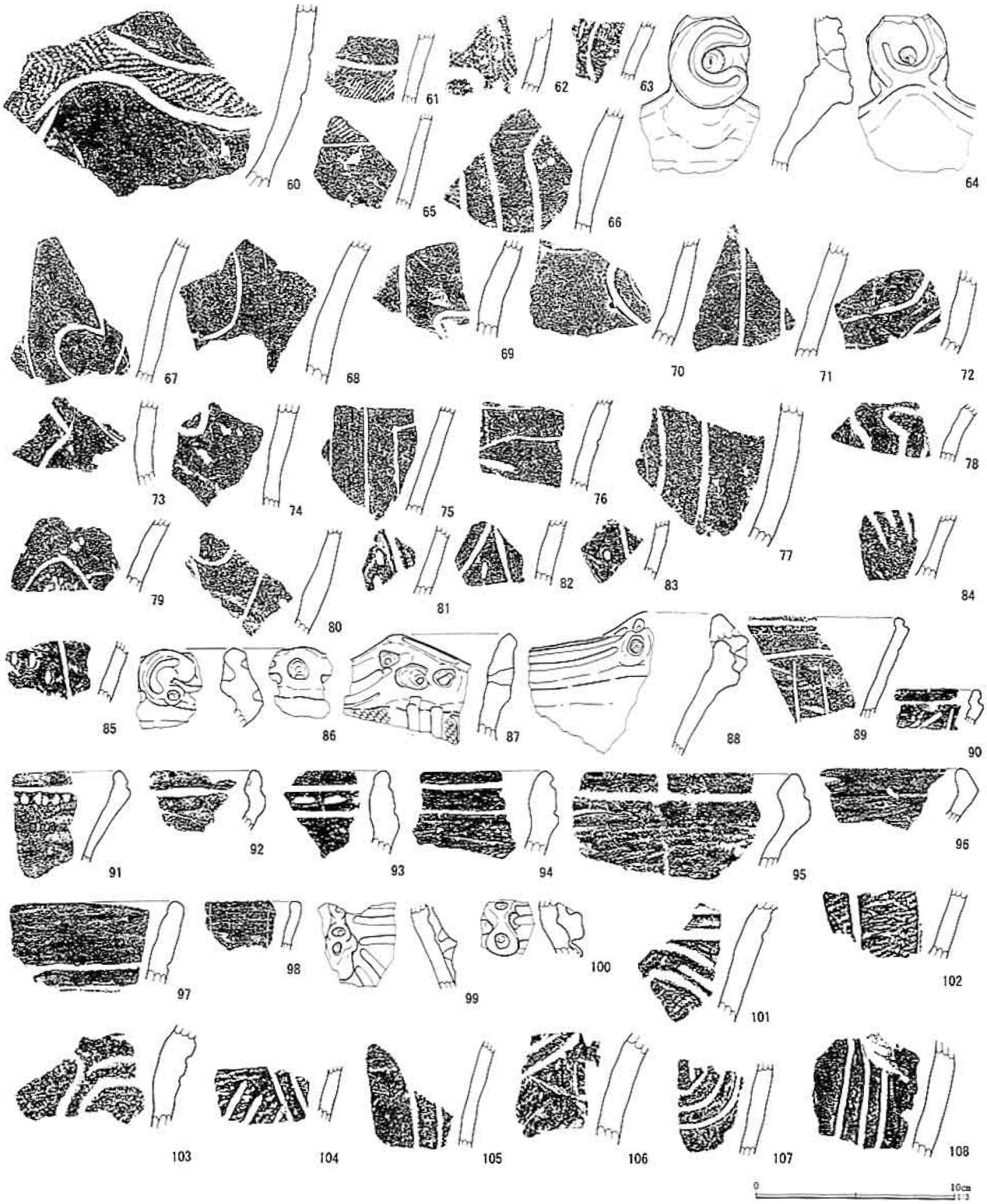
131～134は精製深鉢の胴部である。135・136・138・139は注口土器である。139はドーム状に立ち上がる口縁部で、口端に「の」の字状の小突起を配する。

140は南関東系の下北原式で、単沈線によるＨ字文を描く。141は加曽利Ｂ式である。142～145は底部を一括した。145は底面に網代圧痕を持つ。

146以下は石器である。146は基部欠損、147は刃部欠損する打製石斧で、前者はホルンフェルス、後者は安山岩を使用する。148は磨石片で、黒雲母花崗岩を使用する。149は無脚凹基の石鏃で、逆刺部分だけが残存する。石材は黒曜石である。



第44図　グリッド出土遺物（1）



第45図　グリッド出土遺物（2）

第46図　グリッド出土遺物（3）

V　北久米遺跡

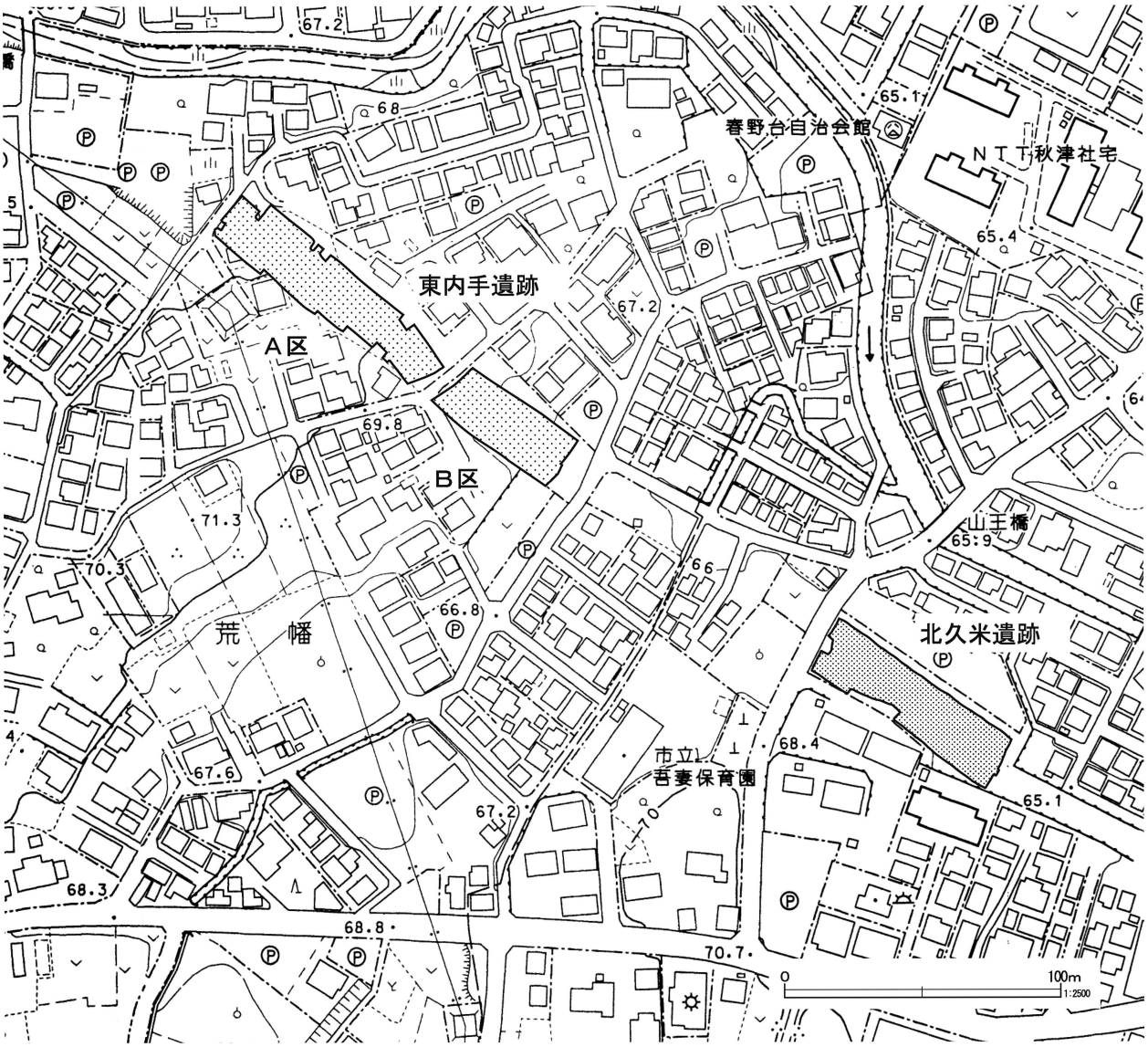
1　遺跡の概要

北久米遺跡は所沢市久米に所在し、狭山丘陵の東端部にあたり丘陵北側のなだらかな北に向かって低くなる傾斜地に位置し、標高68ｍほどの柳瀬川右岸に立地する。東内手遺跡とは柳瀬川から北西に入り込む小支谷を挟んで東西に対峙している。

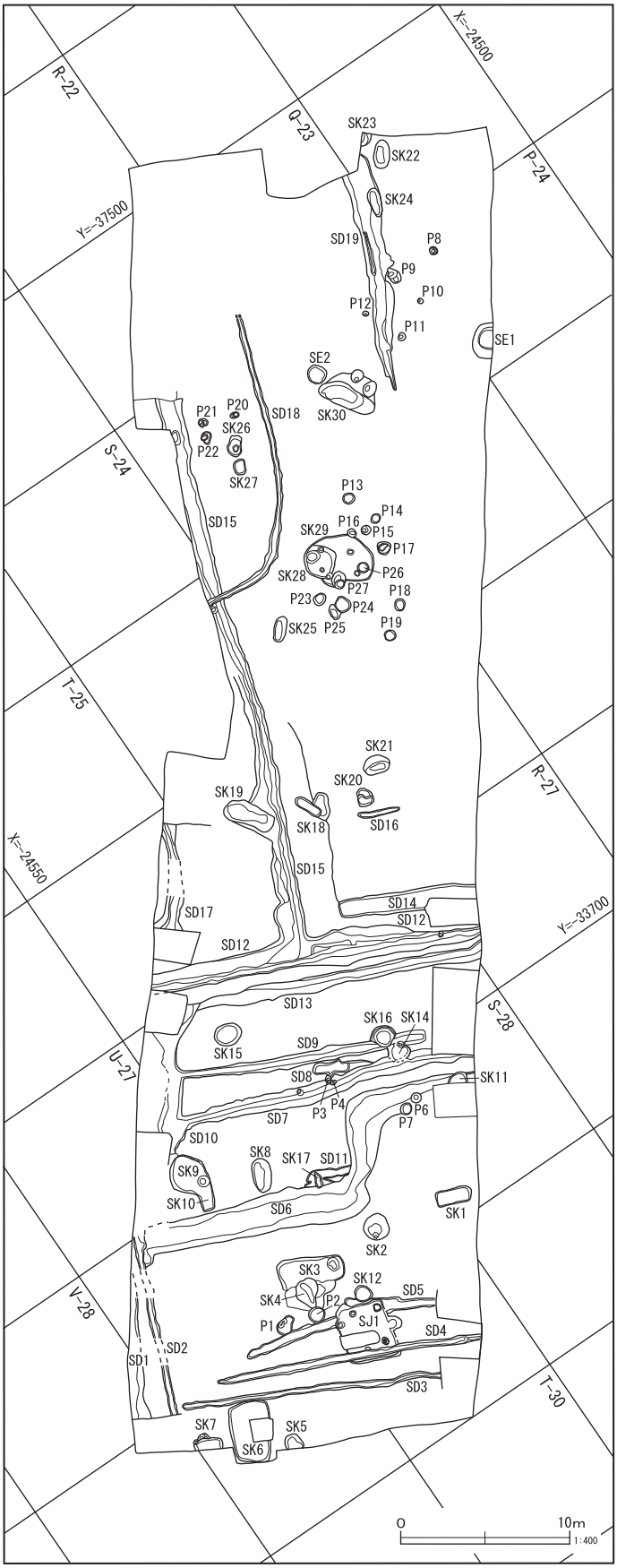
北久米遺跡はこれまで所沢市教育委員会により４回の調査が行われており、石器集中区４箇所、古墳時代住居跡９軒、中世の地下式坑１基、井戸跡１基が検出されている。

今回の調査は第５次調査にあたり、調査区は市教育委員会が調査した遺跡南部ではなく、遺跡の北端で柳瀬川右岸に近接した平坦地であった。縄文時代の土坑９基、平安時代の住居跡１軒のほか時期は不明であるが土坑20基、井戸跡２基、炉跡１基、溝跡18条、ピット26基が検出された。

したがって、北久米遺跡は南部が縄文時代・古墳時代が主体、北部は縄文時代・平安時代が主体であることが確認できた。



第47図　北久米遺跡調査区位置図



第48図　北久米遺跡全測図

2　遺構と遺物

(1) 住居跡

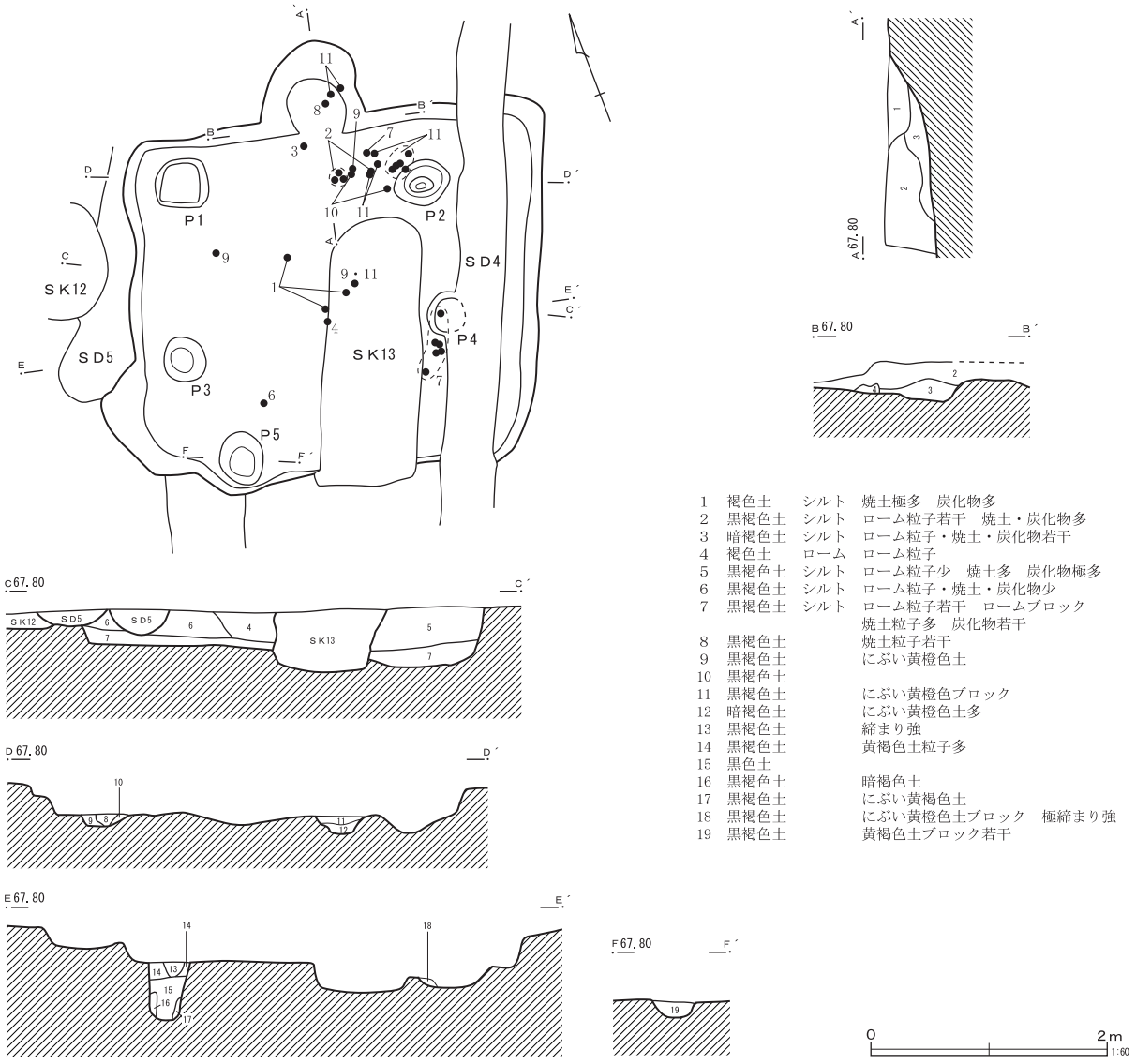
第１号住居跡（第49・50図）

Ｔ－29グリッドに位置する。第13号土坑、第４・５号溝と重複し、第13号土坑と第４号溝には床面下まで掘り込まれている。重複遺構すべてが住居跡より新しい。規模は主軸長南北3.05ｍ、東西3.50ｍ、深さ12～26㎝を測る。平面形は、長方形を呈する。主軸方位は、Ｎ－23°－Ｅを指す。

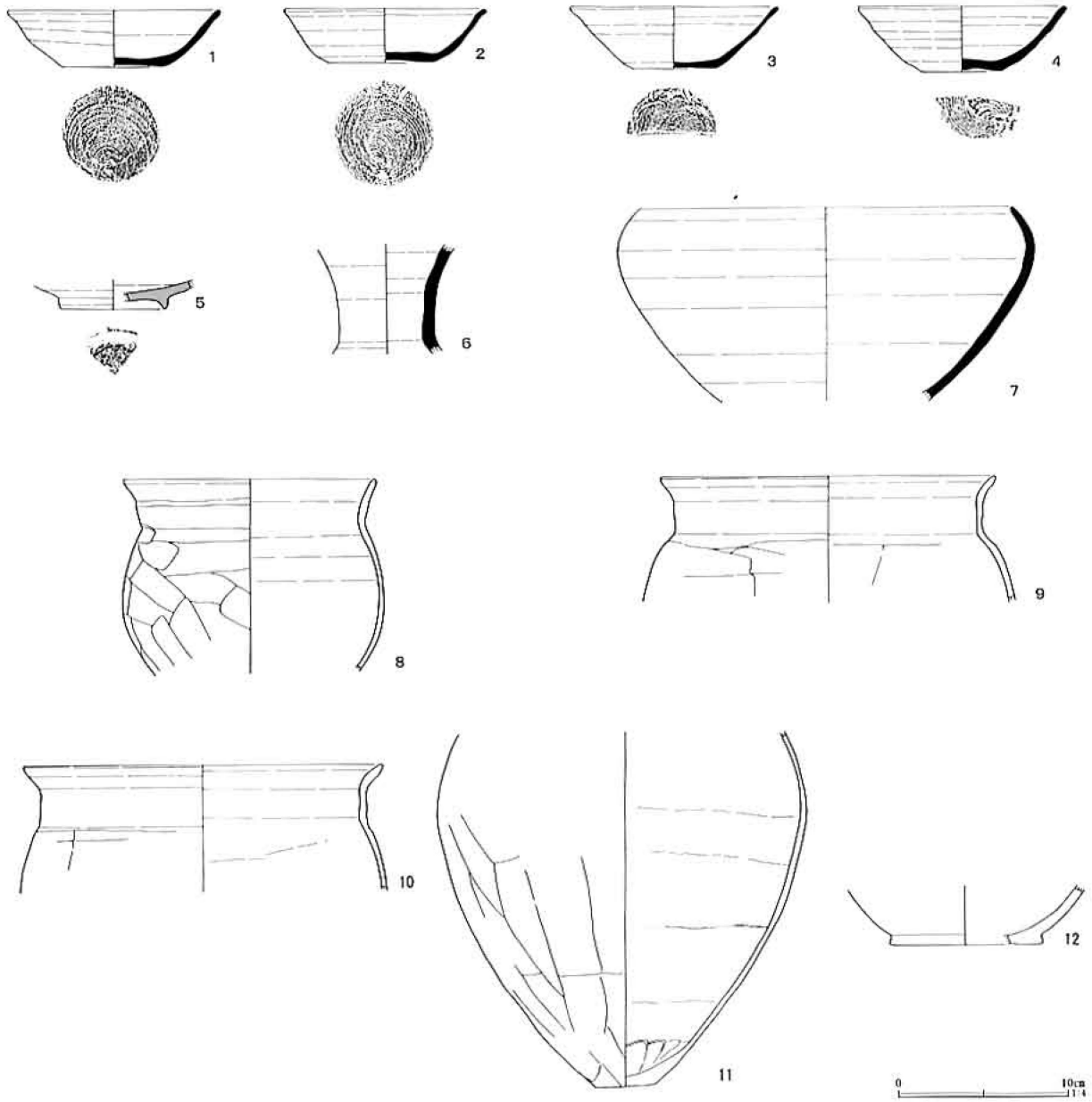
カマドは、北壁に設けられている。77㎝×90㎝を測り、深さは床面と同じ高さである。

柱穴は、４本確認できた。方形及び円形でＰ１は42㎝×45㎝、深さ７㎝、Ｐ２は径40～48㎝、深さ11㎝、Ｐ３は径35～40㎝、深さ48㎝、Ｐ４は径38㎝、深さ８㎝を測る。南壁際のＰ５は径38～45㎝深さ10㎝程を測る。

遺物は、須恵器坏・長頸瓶頸部・鉢、土師器甕、灰釉陶器高台付椀が出土した。



第49図　第１号住居跡



第50図　第1号住居跡出土遺物

第15表　第1号住居跡出土遺物観察表（第50図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置	備　　考
1	須恵坏	12.6	3.4	5.7	ＡＦＪＫ	普通	にぶい橙	70	覆土	糸引き抜き痕体部外面下半に及ぶ 一部酸化焔焼成
2	須恵坏	12.0	3.2	6.1	ＣＦＨＪ	普通	灰	75	覆土	
3	須恵坏	(12.3)	3.8	(4.7)	ＡＪＫ	普通	灰	45	覆土	
4	須恵坏	(12.2)	3.9	(4.8)	ＡＪＫ	普通	にぶい黄橙	35	覆土	
5	灰釉高台埦			(6.0)	Ｇ	良好	灰白	15	覆土	高台内底部ヘラ削り　ヘラ描き痕
6	須恵長頸瓶				ＡＦＧ	普通	灰	70	覆土	
7	須恵鉢	(22.0)			ＡＧＪＫ	良好	灰	20	覆土	
8	土師甕	14.8			ＡＢＦ	普通	褐	75	カマド	
9	土師甕	(19.6)			ＡＦ	普通	褐	15	覆土	
10	土師甕	(21.0)			ＡＢＦ	普通	暗褐	20	覆土	
11	土師甕				ＡＦ	普通	褐	60	カマド他	
12	土師甕			(9.0)	ＡＤＦ	普通	褐	30	覆土	

（２）土坑

第１号土坑（第51図）

Ｓ－28グリッドに位置する。規模は、主軸長208㎝×90㎝、深さ18㎝を測る。平面形は、長方形を呈する。主軸方位は、Ｎ－23°－Ｅを指す。

第２号土坑（第51図）

Ｔ－28グリッドに位置する。規模は、径150～157㎝、深さ38㎝を測る。平面形は、円形を呈する。長軸方位は、Ｎ－55°－Ｗを指す。

第３号土坑（第51図）

Ｔ・Ｕ－28グリッドに位置する。第４号土坑と重複し、第４号土坑が古い。規模は、主軸長395㎝×150㎝、深さ22㎝を測る。平面形は、長方形を呈する。主軸方位は、Ｎ－22°－Ｅを指す。

第４号土坑（第51・53図）

Ｔ・Ｕ－28グリッドに位置する。第３号土坑と重複し西壁上部が壊され、第３号土坑が新しい。規模は、主軸長3.20㎝×1.90㎝以上、深さ62㎝を測る。平面形は、不整形を呈する。主軸方位は、Ｎ－22°－Ｅを指す。

遺物は、縄文土器片・石器片が出土した。

第５号土坑（第51図）

Ｕ－29グリッドに位置する。東側の一部が調査区域外となっている。規模は、主軸長108㎝以上×90㎝、深さ33㎝を測る。平面形は、楕円形を呈すると推定される。主軸方位は、Ｎ－81°－Ｅを指す。

第６号土坑（第51図）

Ｕ－29グリッドに位置する。規模は、主軸長356㎝×240㎝、深さ30㎝を測る。平面形は、長方形を呈する。主軸方位は、Ｎ－64°－Ｗを指す。

第７号土坑（第51・55図）

Ｕ－29グリッドに位置する。東側が調査区域外となっている。規模は、主軸長156㎝×74㎝以上、深さ46㎝を測る。平面形は、方形及び長方形を呈すると推定される。主軸方位は、Ｎ－30°－Ｅを指す。

遺物は、縄文土器片が出土した。

第８号土坑（第51図）

Ｔ－28グリッドに位置する。規模は、主軸長200㎝×110㎝、深さ25㎝を測る。平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、Ｎ－65°－Ｗを指す。

第９号土坑（第52図）

Ｕ－27グリッドに位置する。第10土坑と重複するが新旧関係は不明である。規模は、主軸長210㎝以上×212㎝、深さ23㎝を測る。平面形は、方形を呈する。主軸方位は、Ｎ－45°－Ｅを指す。

第10号土坑（第52図）

Ｕ－27・28グリッドに位置する。規模は、主軸長㎝220以上×86㎝、深さ12㎝を測る。平面形は、長方形を呈すると推定される。主軸方位は、Ｎ－70°－Ｗを指す。

第11号土坑（第52図）

Ｓ－28グリッドに位置し、南東側は調査区域外となっている。規模は、径110㎝×64㎝以上、深さ30㎝を測る。平面形は、円形を呈すると推定される。主軸方位は、Ｎ－35°－Ｅを指す。

第12号土坑（第52図）

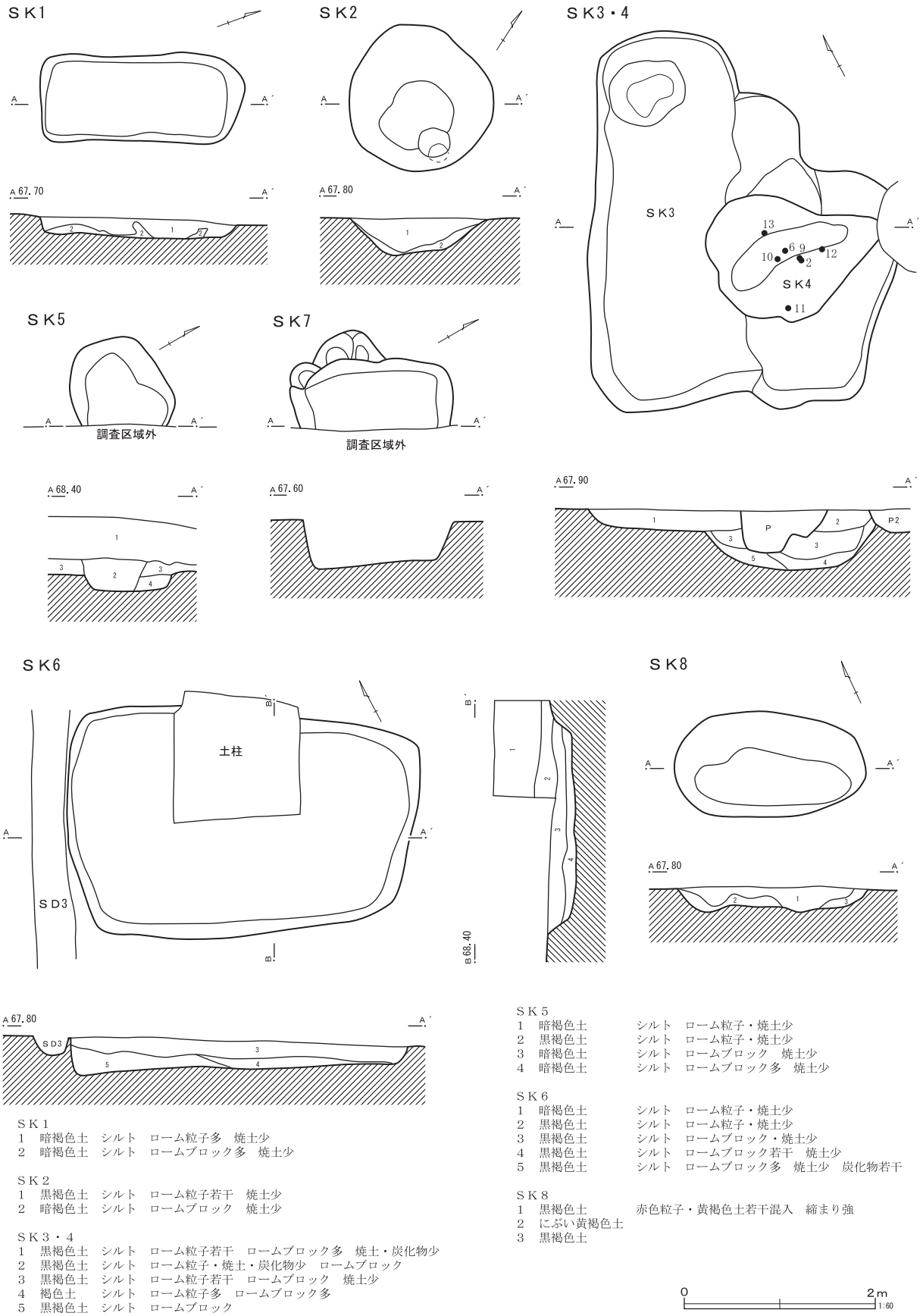
Ｔ－28・29グリッドに位置する。第５号溝と重複し溝に壊されていることから溝が新しい。規模は、計95㎝×100㎝、深さ14㎝を測る。平面形は、不整円形を呈する。主軸方位は、Ｎ－28°－Ｅを指す。

第13号土坑（第52図）

Ｔ－29グリッドに位置する。第１号住居跡と重複し、第１号住居跡を切っていることから住居跡より新しい。規模は、主軸長227㎝×83㎝、深さ53㎝を測る。平面形は、長方形を呈する。主軸方位は、Ｎ－23°－Ｅを指す。

第14号土坑（第52・55図）

Ｓ－27グリッドに位置する。第７・第９号溝と重複し、東側が第７号溝に西側が第９号溝に壊されていることから両溝のほうが新しい。規模は、南北長132㎝、深さ26㎝を測る。平面形は、円形を呈すると推定される。遺存部を主軸とすると、主軸方



ＳＫ１
1　暗褐色土　シルト　ローム粒子多　焼土少
2　暗褐色土　シルト　ロームブロック多　焼土少

ＳＫ２
1　黒褐色土　シルト　ローム粒子若干　焼土少
2　暗褐色土　シルト　ロームブロック　焼土少

ＳＫ３・４
1　黒褐色土　シルト　ローム粒子若干　ロームブロック多　焼土・炭化物少
2　黒褐色土　シルト　ローム粒子・焼土・炭化物少　ロームブロック
3　黒褐色土　シルト　ローム粒子若干　ロームブロック　焼土少
4　褐色土　シルト　ローム粒子多　ロームブロック多
5　黒褐色土　シルト　ロームブロック

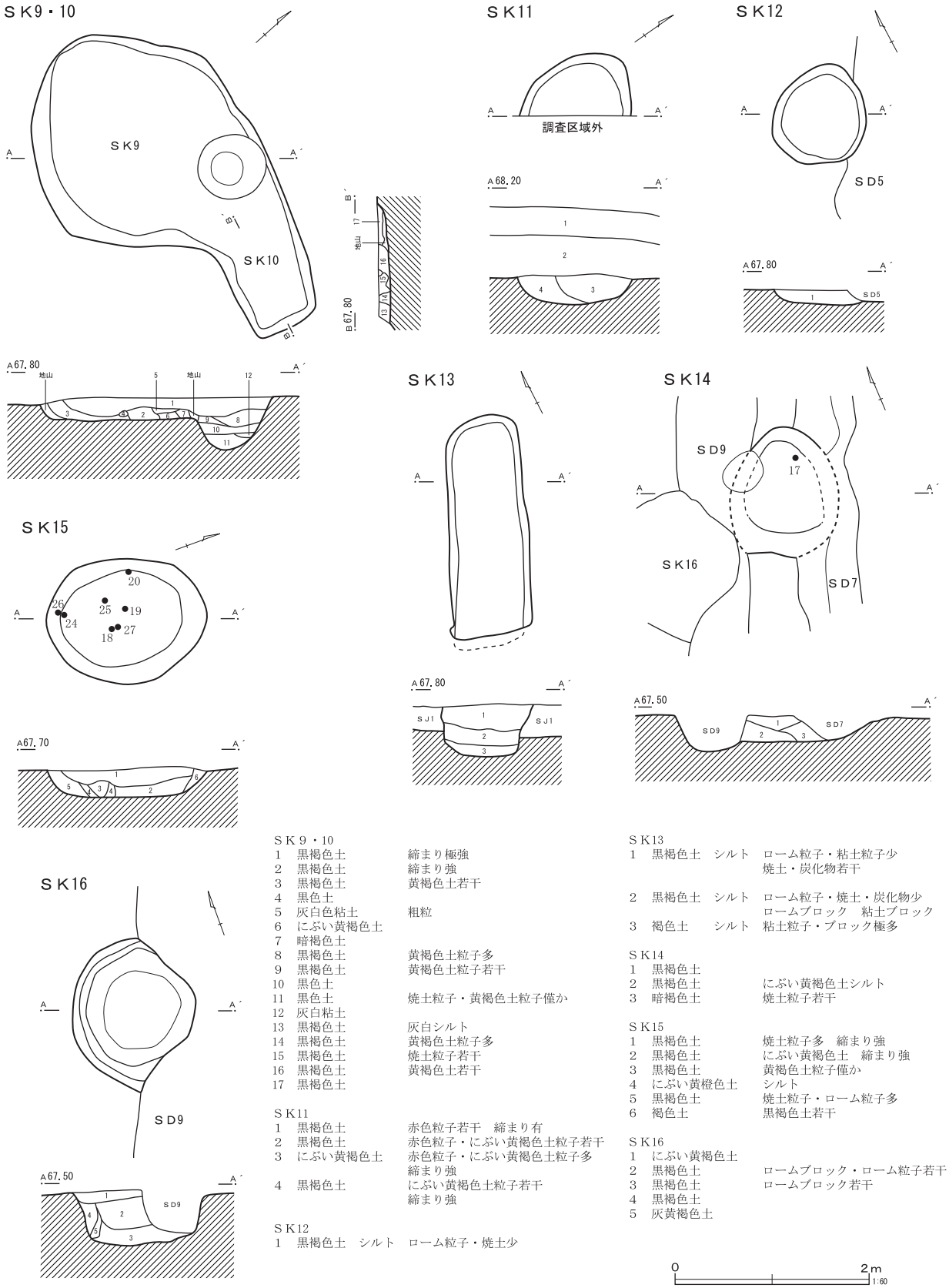
ＳＫ５
1　暗褐色土　シルト　ローム粒子・焼土少
2　黒褐色土　シルト　ローム粒子・焼土少
3　暗褐色土　シルト　ロームブロック　焼土少
4　暗褐色土　シルト　ロームブロック多　焼土少

ＳＫ６
1　暗褐色土　シルト　ローム粒子・焼土少
2　黒褐色土　シルト　ローム粒子・焼土少
3　黒褐色土　シルト　ロームブロック・焼土少
4　黒褐色土　シルト　ロームブロック若干　焼土少
5　黒褐色土　シルト　ロームブロック多　焼土少　炭化物若干

ＳＫ８
1　黒褐色土　赤色粒子・黄褐色土若干混入　締まり強
2　にぶい黄褐色土
3　黒褐色土

0　2m
1:60

第51図　土坑（1）



ＳＫ９・10
1　黒褐色土　締まり極強
2　黒褐色土　締まり強
3　黒褐色土　黄褐色土若干
4　黒色土
5　灰白色粘土　粗粒
6　にぶい黄褐色土
7　暗褐色土
8　黒褐色土　黄褐色土粒子多
9　黒褐色土　黄褐色土粒子若干
10　黒色土
11　黒色土　焼土粒子・黄褐色土粒子僅か
12　灰白粘土
13　黒褐色土　灰白シルト
14　黒褐色土　黄褐色土粒子多
15　黒褐色土　焼土粒子若干
16　黒褐色土　黄褐色土若干
17　黒褐色土

ＳＫ11
1　黒褐色土　赤色粒子若干　締まり有
2　黒褐色土　赤色粒子・にぶい黄褐色土粒子若干
3　にぶい黄褐色土　赤色粒子・にぶい黄褐色土粒子多　締まり強
4　黒褐色土　にぶい黄褐色土粒子若干　締まり強

ＳＫ12
1　黒褐色土　シルト　ローム粒子・焼土少

ＳＫ13
1　黒褐色土　シルト　ローム粒子・粘土粒子少　焼土・炭化物若干
2　黒褐色土　シルト　ローム粒子・焼土・炭化物少　ロームブロック　粘土ブロック
3　褐色土　シルト　粘土粒子・ブロック極多

ＳＫ14
1　黒褐色土
2　黒褐色土　にぶい黄褐色土シルト
3　暗褐色土　焼土粒子若干

ＳＫ15
1　黒褐色土　焼土粒子多　締まり強
2　黒褐色土　にぶい黄褐色土　締まり強
3　黒褐色土　黄褐色土粒子僅か
4　にぶい黄橙色土　シルト
5　黒褐色土　焼土粒子・ローム粒子多
6　褐色土　黒褐色土若干

ＳＫ16
1　にぶい黄褐色土
2　黒褐色土　ロームブロック・ローム粒子若干
3　黒褐色土　ロームブロック若干
4　黒褐色土
5　灰黄褐色土

第52図　土坑（2）

位は、N－23°－Eを指す。

遺物は、縄文土器片が出土した。

第15号土坑（第52・55図）

T－27グリッドに位置する。規模は、主軸長162㎝×127㎝、深さ28㎝を測る。平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、N－20°－Eを指す。

遺物は、縄文土器片が出土した

第16号土坑（第52・55図）

S－27グリッドに位置する。第9号溝と重複し壊されていることから、溝のほうが新しい。規模は、主軸長155㎝×127㎝、深さ56㎝を測る。平面形は、円形を呈すると推定される。両壁が遺存する南北方向を主軸とすると主軸方位は、N－29°－Eを指す。

遺物は、縄文土器片が出土した。

第17号土坑（第53図）

T－28グリッドに位置する。第6・11号溝と重複し、第6号溝に壊されているが、第11号溝を切っていることから、第6号溝が最も新しく、第11号溝が最も古い。規模は、主軸長95㎝×40㎝、深さ35㎝を測る。平面形は、不整楕円形を呈する。主軸方位は、N－76°－Wを指す。

第18号土坑（第53図）

S－26グリッドに位置する。第15号溝と重複し、溝を切っていることから当土坑のほうが新しい。

規模は、楕円形部は主軸長172㎝×68㎝、深さ70㎝を測る。主軸方位は、N－64°－Eを指す。
台形部は、主軸長148㎝×67～117㎝、深さ18㎝を測る。主軸方位は、N－53°－Wを指す。楕円形の土坑に浅い台形の土坑が重なっているが切り合い関係は見られない。

第19号土坑（第53・56図）

S－26グリッドに位置する。第15号溝と重複し、切られていることから溝のほうが新しい。規模は、主軸長300㎝×120㎝、深さ65㎝を測る。平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、N－50°－Eを指す。

遺物は、縄文土器片が出土した。

第20号土坑（第53・56図）

R・S－26グリッドに位置する。規模は、主軸長110㎝×53㎝、深さ22～53㎝を測る。楕円形の浅い土坑と深い土坑が重なっており、深い土坑のほうが新しい。深い土坑は不整楕円形で主軸長93㎝×70㎝を測る。主軸方位は、N－64°－Eを指す。浅い土坑は主軸長97㎝×45㎝以上を測る。主軸方位は、N－87°－Eを指す。

遺物は、縄文土器片が出土した。

第21号土坑（第53図）

R－26グリッドに位置する。規模は、主軸長157㎝×110㎝、深さ30㎝を測る。平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、N－8°－Eを指す。

第22号土坑（第53・56図）

P－23グリッドに位置する。規模は、主軸長165㎝×93㎝、深さ123㎝を測る。平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、N－57°－Wを指す。

遺物は、縄文土器片が出土した。

第23号土坑（第53図）

P－23グリッドに位置する。南西側、北西側が調査区域外となっており全体の1/4程度の検出である。確認できた規模は、82㎝×53㎝、深さ51㎝を測る。平面形は、円形を呈すると推定される。

第24号土坑（第54図）

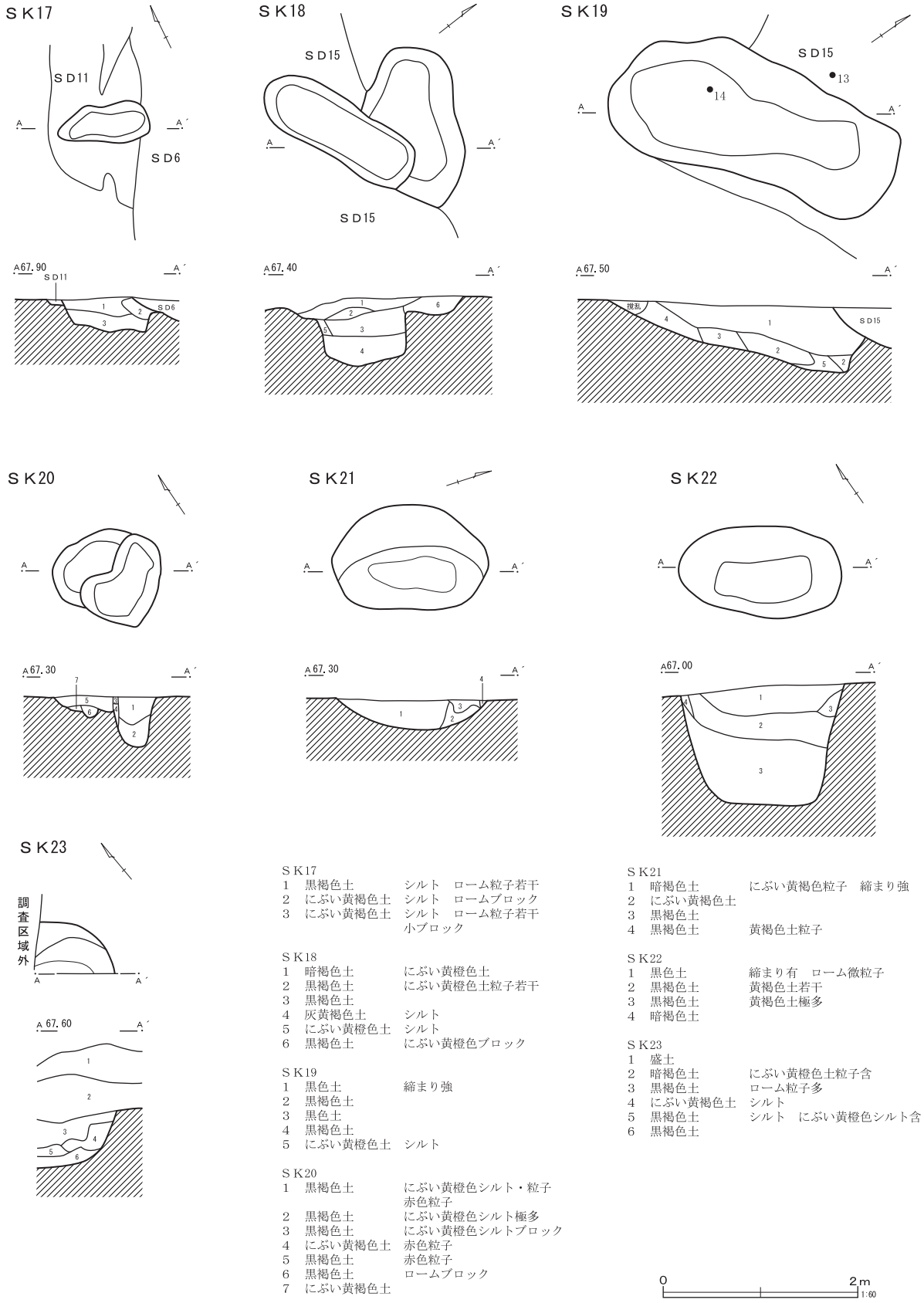
P・Q－23グリッドに位置する。第19号溝と重複し、上部が掘り込まれている。規模は、主軸長170㎝×71㎝、深さ27㎝を測る。平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、N－67°－Wを指す。

第25号土坑（第54図）

R－25グリッドに位置する。規模は、主軸長150㎝×70㎝、深さ80㎝を測る。平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、N－43°－Wを指す。

第26号土坑（第54図）

R－24グリッドに位置する。規模は、主軸長124㎝×80㎝、深さ28㎝を測る。平面形は、不整楕円形を呈する。主軸方位は、N－67°－Wを指す。



ＳＫ17
1　黒褐色土　シルト　ローム粒子若干
2　にぶい黄褐色土　シルト　ロームブロック
3　にぶい黄褐色土　シルト　ローム粒子若干
小ブロック

ＳＫ18
1　暗褐色土　にぶい黄橙色土
2　黒褐色土　にぶい黄橙色土粒子若干
3　黒褐色土
4　灰黄褐色土　シルト
5　にぶい黄橙色土　シルト
6　黒褐色土　にぶい黄橙色ブロック

ＳＫ19
1　黒色土　締まり強
2　黒褐色土
3　黒色土
4　黒褐色土
5　にぶい黄橙色土　シルト

ＳＫ20
1　黒褐色土　にぶい黄橙色シルト・粒子
赤色粒子
2　黒褐色土　にぶい黄橙色シルト極多
3　黒褐色土　にぶい黄橙色シルトブロック
4　にぶい黄褐色土　赤色粒子
5　黒褐色土　赤色粒子
6　黒褐色土　ロームブロック
7　にぶい黄褐色土

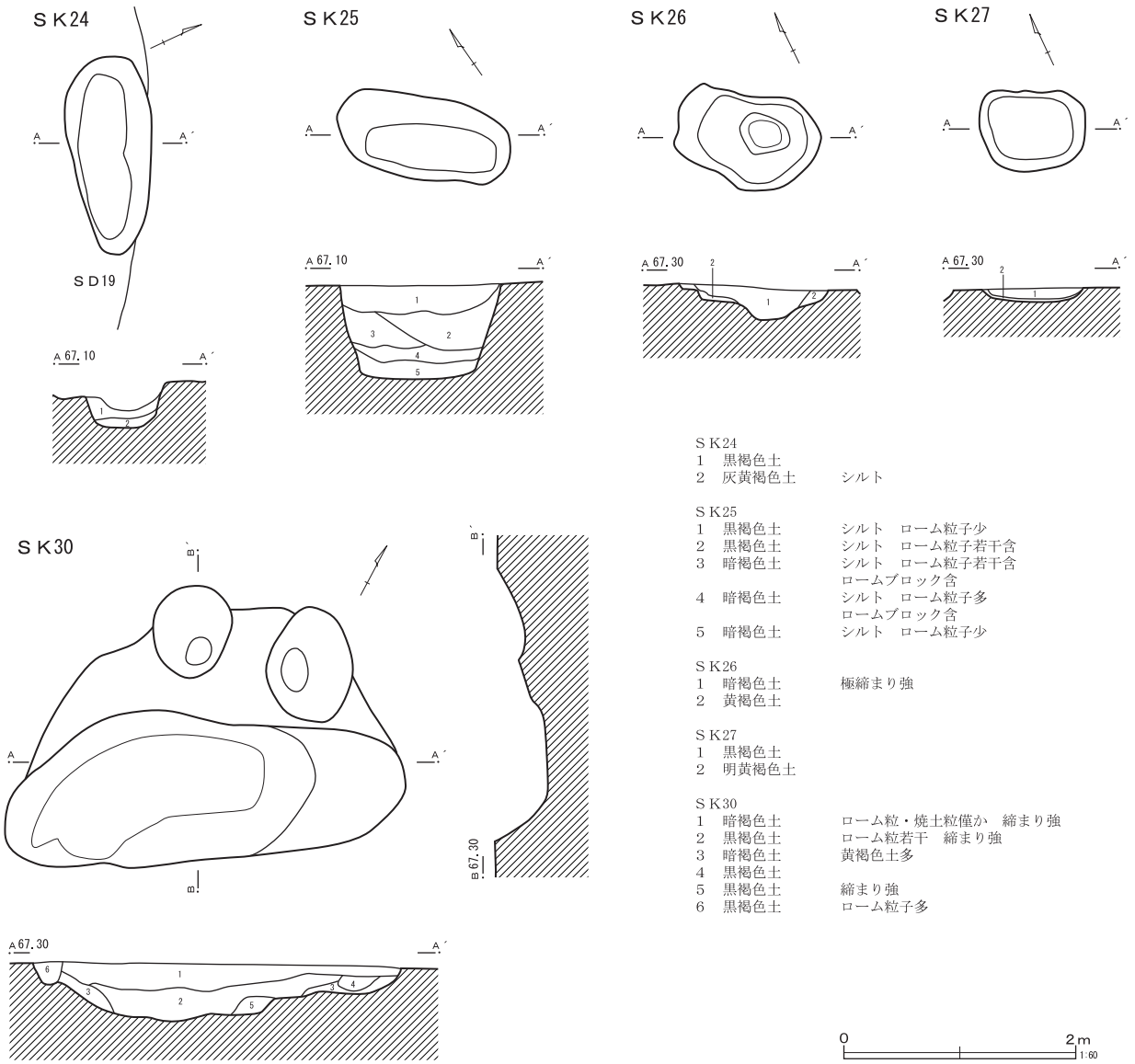
ＳＫ21
1　暗褐色土　にぶい黄褐色粒子　締まり強
2　にぶい黄褐色土
3　黒褐色土
4　黒褐色土　黄褐色土粒子

ＳＫ22
1　黒色土　締まり有　ローム微粒子
2　黒褐色土　黄褐色土若干
3　黒褐色土　黄褐色土極多
4　暗褐色土

ＳＫ23
1　盛土
2　暗褐色土　にぶい黄橙色土粒子含
3　黒褐色土　ローム粒子多
4　にぶい黄褐色土　シルト
5　黒褐色土　シルト　にぶい黄橙色シルト含
6　黒褐色土

0　2m
1:60

第53図　土坑（3）



ＳＫ24
1　黒褐色土
2　灰黄褐色土　　シルト

ＳＫ25
1　黒褐色土　　シルト　ローム粒子少
2　黒褐色土　　シルト　ローム粒子若干含
3　暗褐色土　　シルト　ローム粒子若干含
　　ロームブロック含
4　暗褐色土　　シルト　ローム粒子多
　　ロームブロック含
5　暗褐色土　　シルト　ローム粒子少

ＳＫ26
1　暗褐色土　　極締まり強
2　黄褐色土

ＳＫ27
1　黒褐色土
2　明黄褐色土

ＳＫ30
1　暗褐色土　　ローム粒・焼土粒僅か　締まり強
2　黒褐色土　　ローム粒若干　締まり強
3　暗褐色土　　黄褐色土多
4　黒褐色土
5　黒褐色土　　締まり強
6　黒褐色土　　ローム粒子多

第54図　土坑（4）

第27号土坑（第54図）

Ｒ－24グリッドに位置する。規模は、主軸長90㎝×70㎝、深さ12㎝を測る。平面形は、方形を呈する。主軸方位は、Ｎ－66°－Ｗを指す。

第30号土坑（第54・56図）

Ｑ－24グリッドに位置する。規模は、主軸長345㎝×210㎝、深さ50㎝を測る。平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、Ｎ－57°－Ｅを指す。

遺物は、縄文土器片が出土した。

土坑出土の縄文土器

第４号土壙出土遺物（第55図）

１は加曾利ＥⅡ式で、断面半円形の隆帯により蛇行懸垂文を描く胴下半部である。２は加曾利Ｅ３式の口縁部である。口縁部区画帯は失われ、Ｌ無節の縄文が口端に沿って横位回転で施文される。３・４は後期初頭称名寺式の胴部破片である。３は単沈線によるＪ字モチーフが上下に交錯する。いずれも地文を持たない。称名寺式としては末期のもので、堀之内式期に掛かる可能性がある。

５～11は堀之内１式であろう。５は口縁直下に隆帯による段を形成し、１条の沈線が巡る。６は３本沈線による幾何学モチーフ、７は頸部で、平行沈線による区画帯の直下に渦巻文を配し、両側に集合沈線文が垂下する。８～10は無文地に沈線文が描かれる。11は半截竹管による条線が描かれる胴部である。

12は石棒片であろう。全面研磨されるが、明確な擦り面を持たないため、石棒と考えた。砂岩系の石材を用い、表面に著しい赤化がみられる。13は磨石で、表裏に擦り面を持ち、片面は凹石として転用されている。閃緑花崗岩を使用する。

第７号土壙出土遺物（第55図）

14は深鉢胴部破片で、称名寺式と考えられる。単沈線でＪ字モチーフが描かれ、地文縄文を持たない。15は櫛歯状工具による条線が施文される。16は無文の胴部で、縦方向の調整痕が観察される。

第14号土壙出土遺物（第55図）

17は称名寺式の深鉢口縁部である。４単位の大波状口縁をなし、口端が「く」の字に内屈する。波頂部には大型の立体突起が配され、両側に盲孔と短沈線を組み合わせたＣ字状のモチーフが描かれる。

第15号土壙出土遺物（第55図）

18は称名寺式～堀之内１式の深鉢口縁部である。波状口縁で口端「く」の字に内屈する。波頂部上面にはドーナツ状の貼付文が配され、頸部にかけて隆帯＋沈線によるＪ字状の貼付文が配される。

19～21は堀之内１式であろう。19は深鉢口縁部で、口端内屈して１条の沈線が巡り、盲孔を伴う小突起が配される。20も同様の口縁部で、口縁下に広い無文部を持つ。21は断面外削ぎ状の口縁部で、19・20のような沈線を伴わない。22～25は沈線文のみられる胴部破片である。22・24は平行沈線間に列点文を伴う称名寺Ⅱ式、その他も称名寺式～堀之内１式のいずれかと考えられる。25は器面に細かな擦痕が観察される。26は無文の胴下半部で、胎土への黒雲母の混入が顕著である。

27は底部である。縦位の隆帯が垂下し、ＬＲ単節縦位回転の縄文が施文される。裾張りの特異な器形ながら、中期の加曾利ＥⅡ式と考えられる。

第16号土壙出土遺物（第55図）

いずれも後期初頭の称名寺式と考えられる。28・29は平行沈線間に列点文が描かれる称名寺Ⅱ式で、表面に擦痕が観察される。

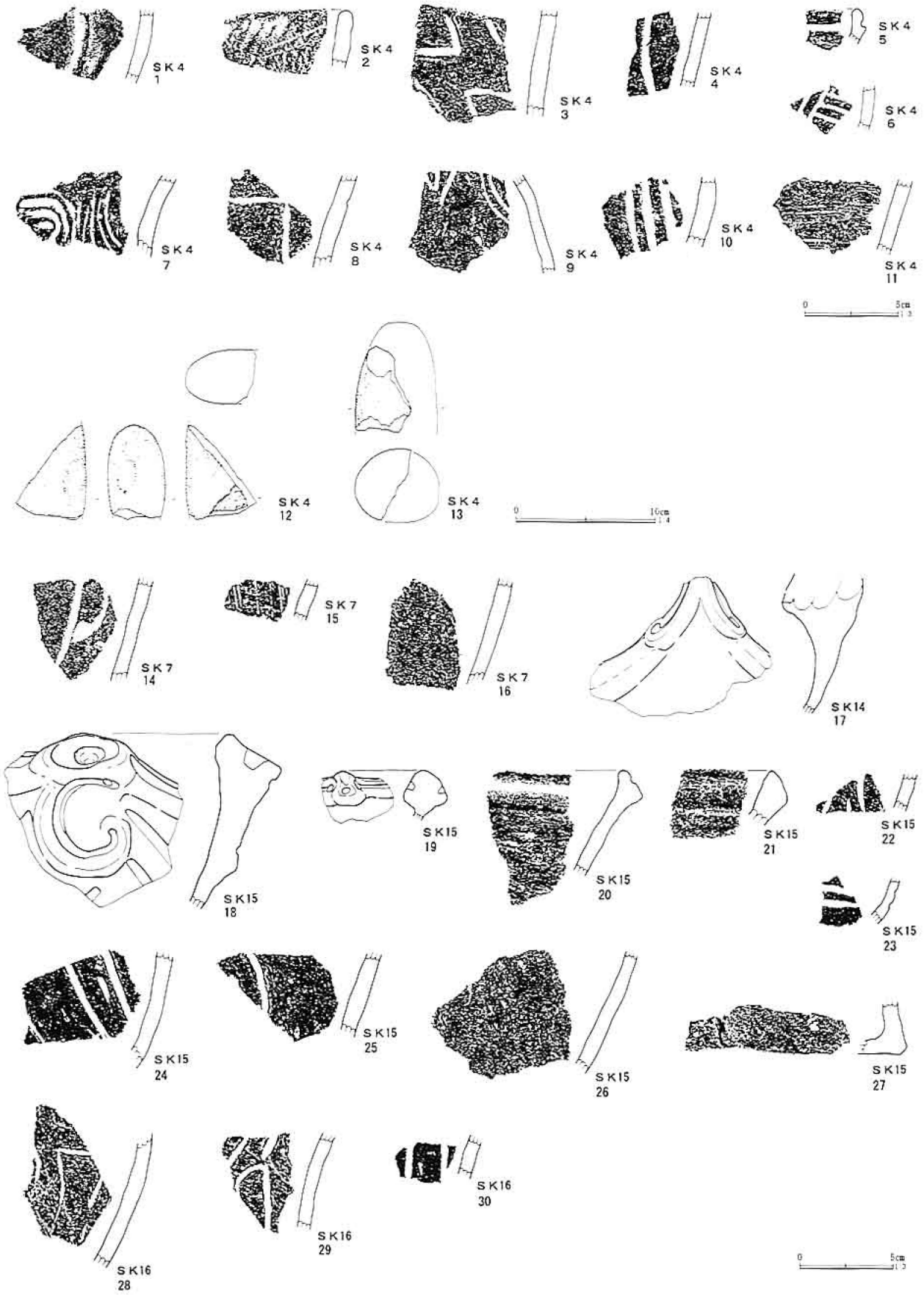
第19号土壙出土遺物（第56図）

１～９は堀之内１式である。１・２は口縁部で、口端直下に１条の沈線が巡る。３は緩やかな波状口縁で、波頂部に貫通孔を持つ。胴部には平行沈線による幾何文が描かれ、斜沈線が充填される。地文はＬＲ単節の縄文である。４の胴部にも同種の斜沈線を伴う沈線文が描かれる。９は注口土器の把手部分で、背面に盲孔と短沈線が配される。

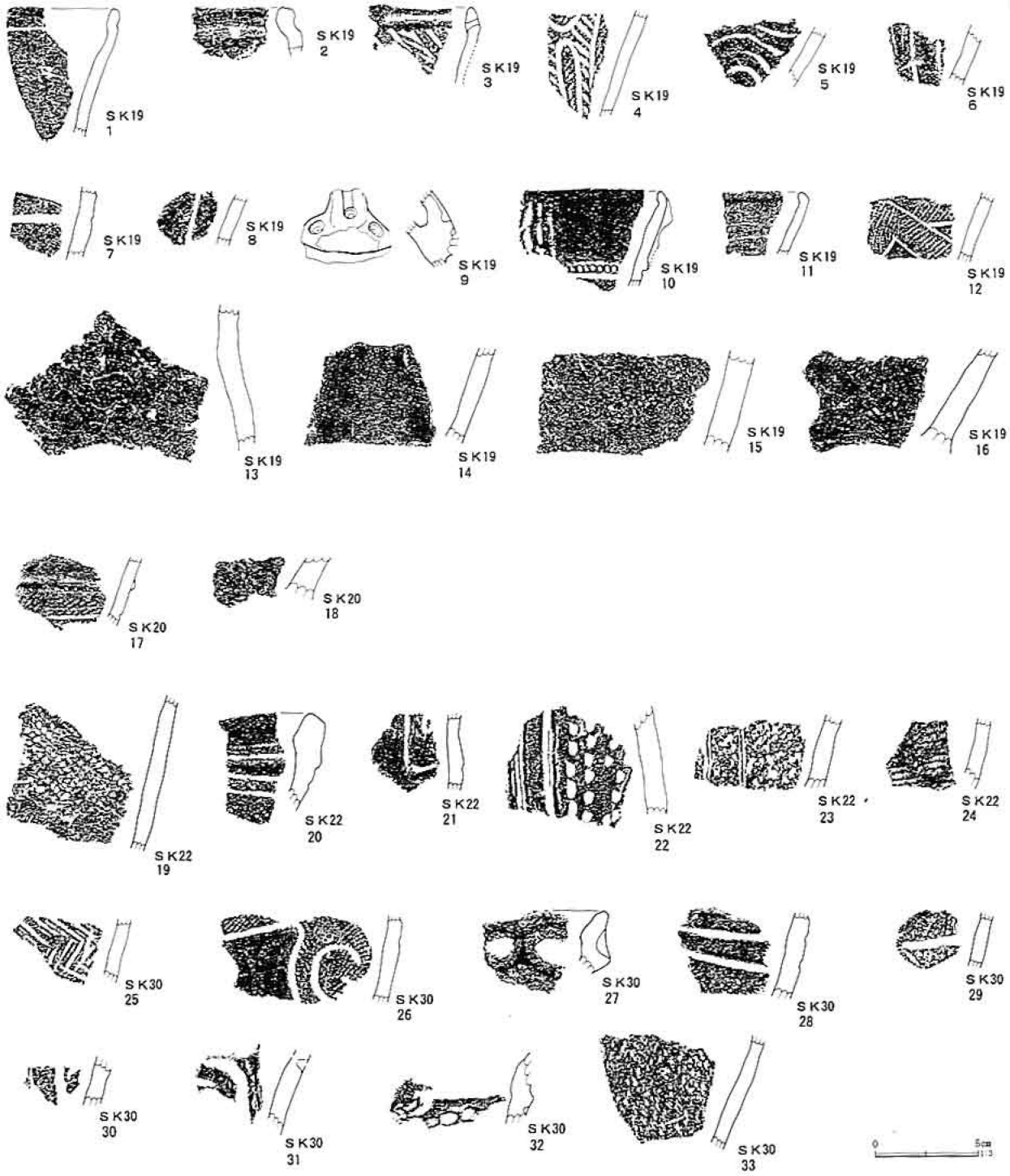
10～12は堀之内２式である。10は軽微に内屈する口縁で、頸部に刻みを伴う隆帯が巡り、口端から連鎖状の隆帯が垂下する。11は無文の口縁で、やはり口端が内屈する。12は精製深鉢の胴部である。直線的な磨消縄文による幾何学モチーフが描かれ、内部にＬＲ単節の縄文が充填される。13～16は無文の胴部破片である。

第20号土壙出土遺物（第56図）

17は堀之内２式の精製深鉢である。頸部に刻みを伴う隆帯が巡り、胴部に磨消縄文による幾何学モチーフが描かれる。地文はＬＲ単節の縄文である。18は無文の胴部破片である。



第55図　土坑出土遺物（1）



第56図　土坑出土遺物（2）

第22号土壙出土遺物（第56図）

19は前期前半の繊維土器である。ＲＬ単節横位回転の縄文が施文され、焼成は比較的良好である。20は阿玉台式の口縁部とみられ、胎土に雲母の混入が顕著である。21は称名寺式の胴部である。22・23は堀之内1式の胴部であろう。22は縦位の平行沈線間に棒状工具先端を用いた斜位の刺突列が充填される。23は半截竹管による平行沈線が垂下し、地文はＬ無節の縄文が横位回転で施文される。24は縄文のみ施文される胴部である。

第30号土壙出土遺物（第56図）

25は前期後半の諸磯式とみられ、半截竹管状工具による綾杉状の集合沈線が施文される。26は称名寺Ⅰ式である。平行沈線によるＪ字モチーフの末端がみられ、ＬＲ単節の縄文が充填施文される。27～32は堀之内Ⅰ式である。27は口縁部で、盲孔を伴う小突起を基点として口縁下に１条の沈線が巡る。28以下は沈線文のみられる胴部で、29にはＬＲ単節の粗雑な縄文が施文される。32は横位の平行沈線間に刺突列が巡る。30は無文の胴部破片である。

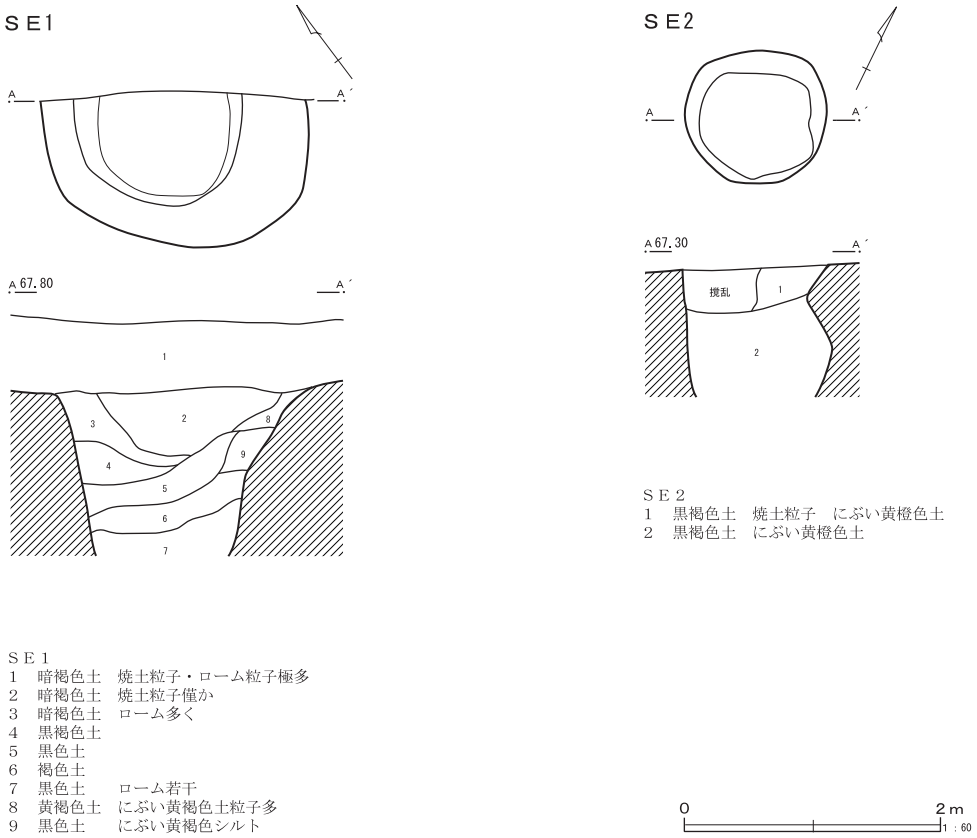
（３）井戸跡

第１号井戸跡（第57図）

Ｐ－24グリッドに位置する。北東側は調査区域外で全体の1/2程度の検出である。規模は、径208㎝程で、深さ135㎝以上を測る。

第２号井戸跡（第57図）

Ｑ－24グリッドに位置する。規模は、径105～110㎝で、深さ110㎝以上を測る。



第57図　井戸跡

（４）溝跡

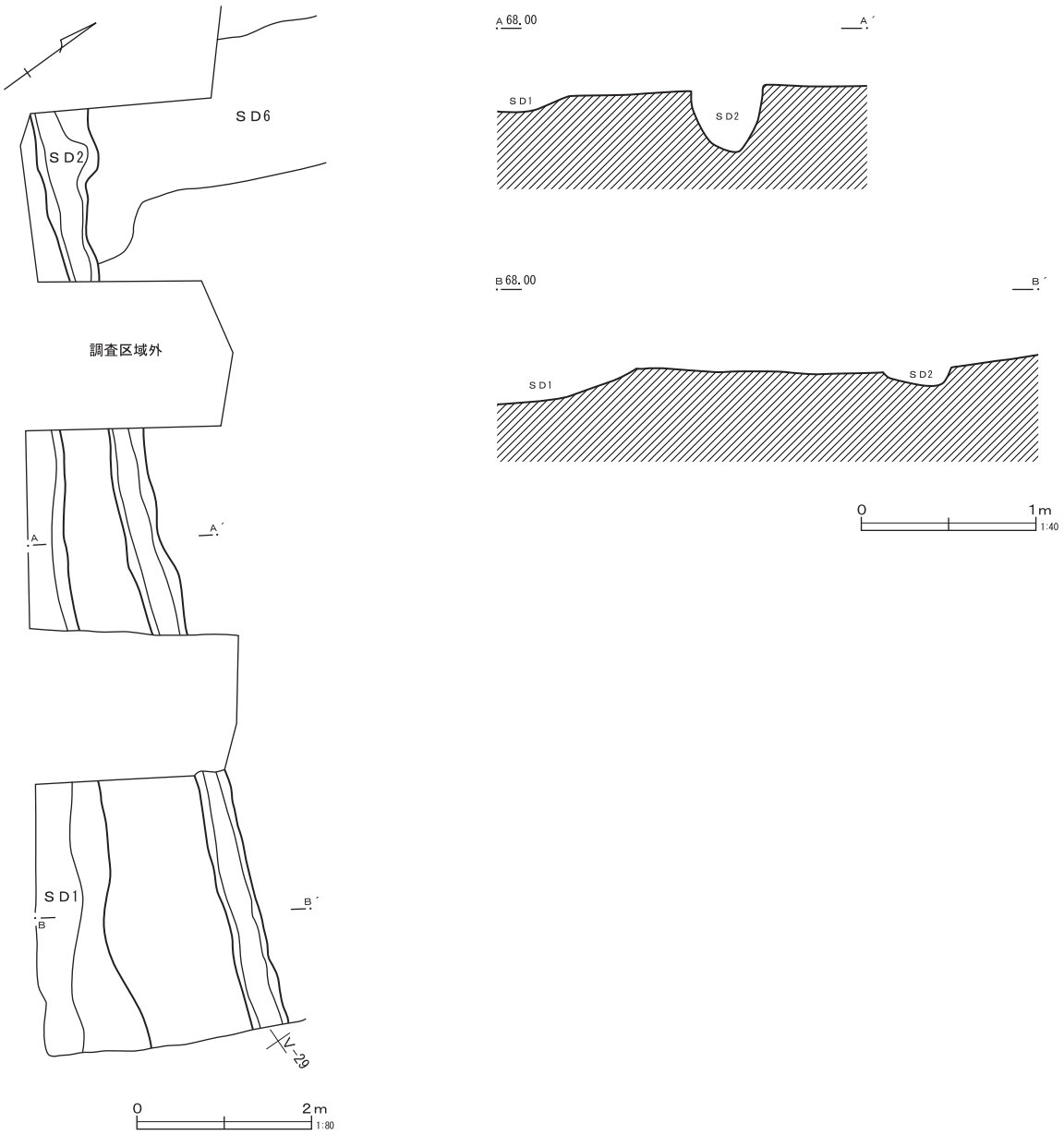
第１号溝（第58図）

調査区南東端の南側のＵ・Ｖ－28グリッドに位置し、やや偏り東西方向に延びる。南西側は調査区域外となり、幅は1/2以上確認できなかった。

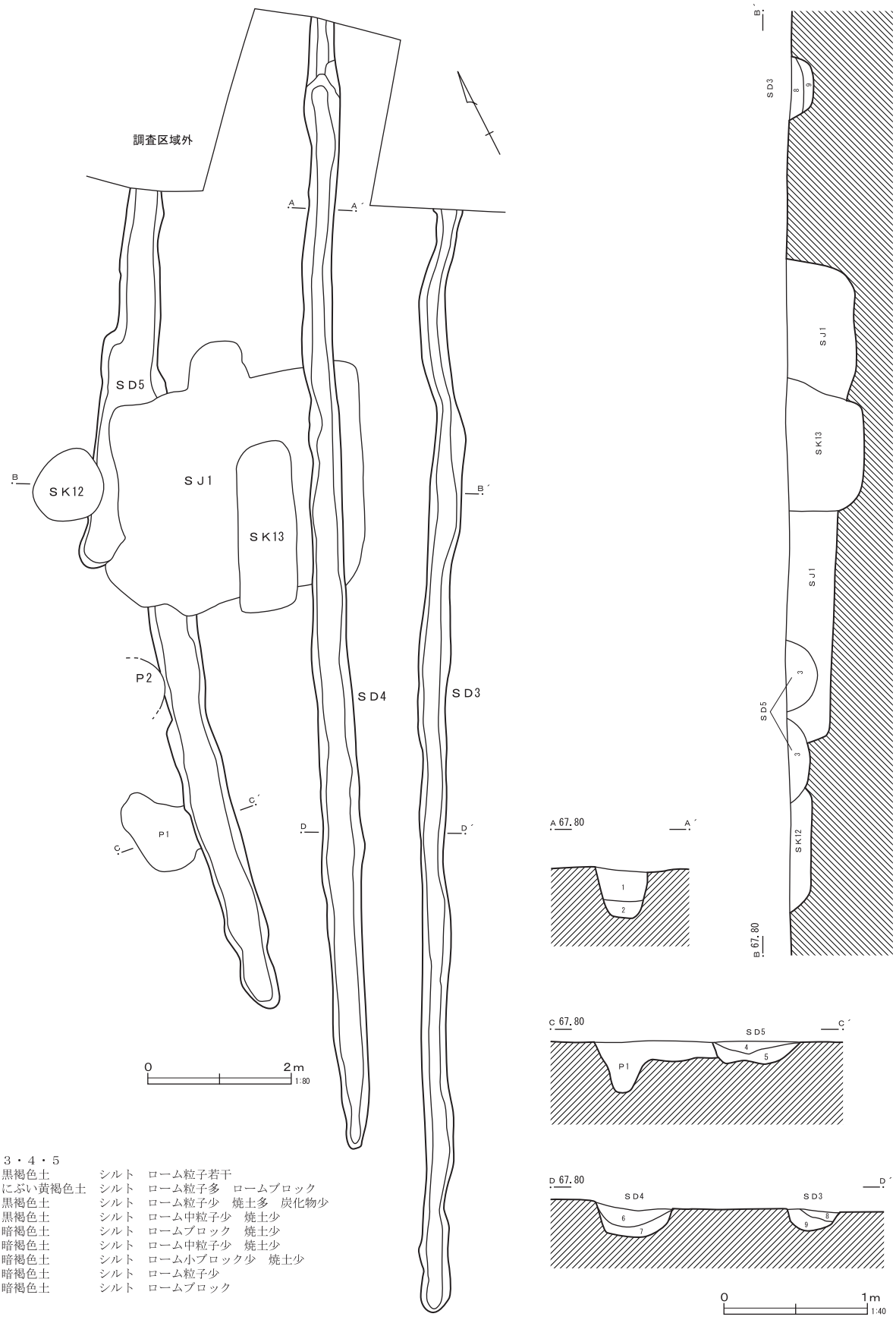
規模は、確認できた全長7.7ｍ、確認できた幅50～120㎝、深さ25㎝を測る。延長方向は、Ｎ－61°－Ｗを指す。

第２号溝（第58図）

調査区南東端の南側のＵ－28グリッドに位置し、やや偏り東西方向に延びる。東端・西端ともに調査区域外となる。規模は、確認できた全長11.2ｍ、幅35～50㎝、深さ10～40㎝を測る。断面形はＵ字状を呈する。延長方向は、Ｎ－65°－Ｗを指す。



第58図　第１・２号溝



SD3・4・5

1	黒褐色土	シルト	ローム粒子若干
2	にぶい黄褐色土	シルト	ローム粒子多　ロームブロック
3	黒褐色土	シルト	ローム粒子少　焼土多　炭化物少
4	黒褐色土	シルト	ローム中粒子少　焼土少
5	暗褐色土	シルト	ロームブロック　焼土少
6	暗褐色土	シルト	ローム中粒子少　焼土少
7	暗褐色土	シルト	ローム小ブロック少　焼土少
8	暗褐色土	シルト	ローム粒子少
9	暗褐色土	シルト	ロームブロック

第59図　第3～5号溝

第３号溝（第59図）

調査区南東端のＴ－29・30グリッドに位置し、やや偏り南北方向に延びる。北端は調査区域外である。

規模は、確認できた全長15.3ｍ、幅32～43㎝、深さ15㎝程を測る。延長方向は、Ｎ－27°－Ｅを指す。

第４号溝（第59図）

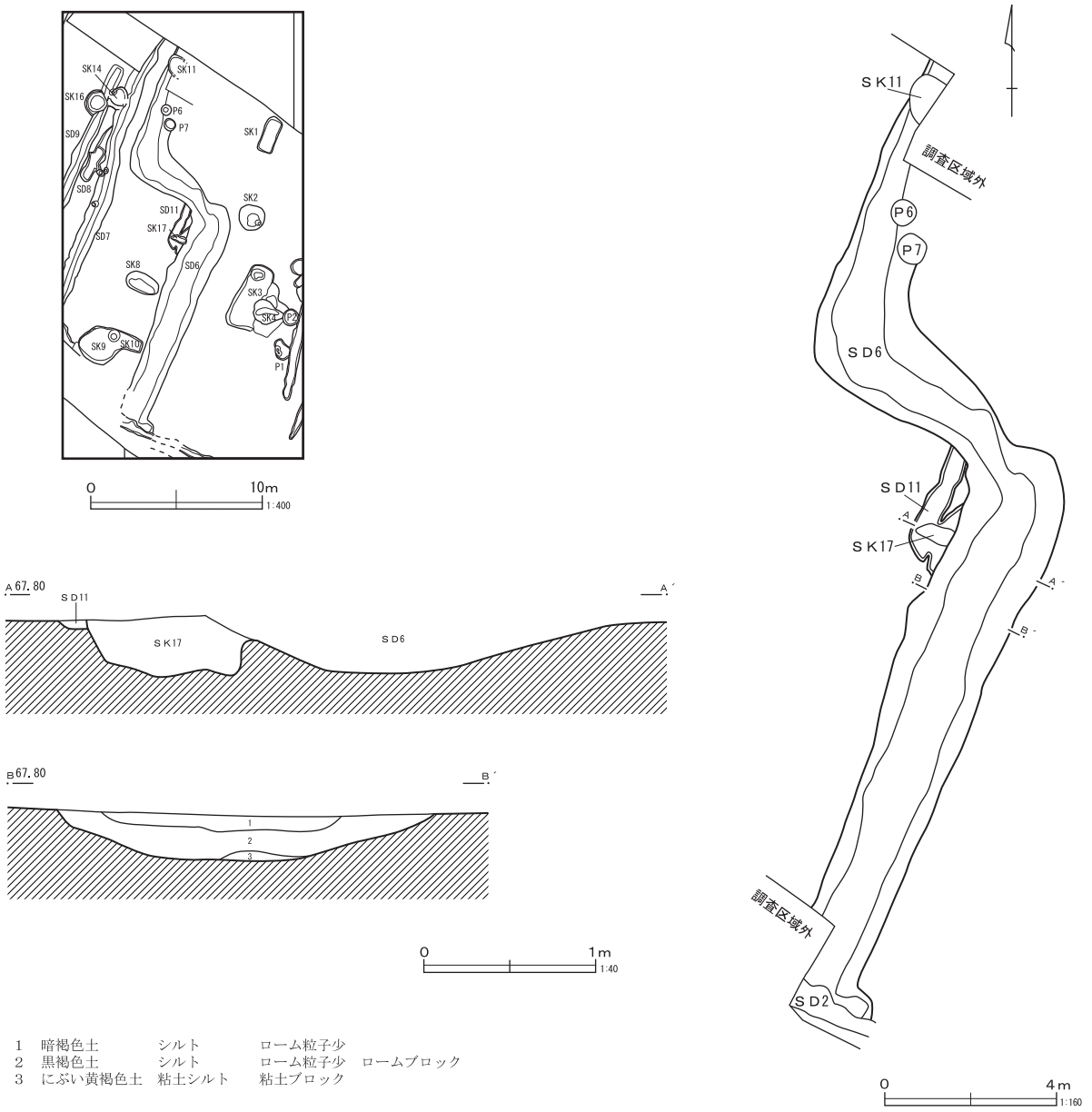
調査区南東端のＴ－29・30グリッドに位置し、やや偏り南北方向に延びる。第１号住居跡と重複するが住居跡より古い。

規模は、確認できた全長15.7ｍ、幅48～54㎝、深さ20～30㎝を測る。延長方向は、Ｎ－24°－Ｅを指す。

第５号溝（第59図）

調査区南東端のＴ－29、Ｕ－28・29グリッドに位置し、やや片寄って緩やかに湾曲して南北方向に延びる。北端は調査区域外である。第１号住居跡・第12号土坑と重複し、住居跡・土坑より新しい。

規模は、確認できた全長11.6ｍ、幅52～80㎝、



第60図　第６・11号溝

深さ13～21㎝を測る。

第６号溝（第60図）

調査区南東部のＳ・Ｔ・Ｕ－28グリッドに位置し、クランク状に南北に延び調査区を横断する。南端で第２号溝に接続する。第11・17号土坑、第11号溝と重複し、第11号が最も新しく、第17号土坑・第11号溝のほうが古い。

規模は、確認できた全長24.8ｍ、幅123～165㎝、深さ27～30㎝を測る。

第11号溝（第60図）

調査区南東部のＴ－28グリッドに位置し、Ｖ字状に延び第17号土坑、第６号溝と重複する。土坑と溝の両遺構に切られることから当溝が最も古い。

規模は、確認できた全長2.4ｍ、幅40～55㎝、深さ５～７㎝を測る。

第７号溝（第61図）

調査区南東部のＳ－27・28、Ｔ－27グリッドに位置し、やや片寄って南北方向に延びる。調査区を横断し南端で第10号溝と接続する。第14号土坑、第８号溝と重複し、両遺構を切っていることから当溝が最も新しい。

規模は、確認できた全長17.5ｍ、幅75～115㎝、深さ24～30㎝を測る。延長方向は、Ｎ－22°－Ｅを指す。

第８号溝（61第図）

調査区南東部のＳ・Ｔ－27グリッドに位置し、第７号溝と重複し切られている。

規模は、確認できた全長3.65ｍ、幅60㎝、深さ５㎝を測る。

第９号溝（第61図）

調査区南東部のＳ・Ｔ－27グリッドに位置し、やや片寄って南北方向に延びる。調査区を横断し南端で第10号溝と接続する。第14・16号土坑と重複し、両土坑を切っている。

規模は、確認できた全長14.4ｍ、幅40～82㎝、深さ25～38㎝を測る。断面形は逆台形を呈する。延長方向は、Ｎ－23°－Ｅを指す。

第10号溝（第61図）

調査区南東部のＴ・Ｕ－27グリッドに位置し、南西側は調査区域外となり、幅は1/2以上確認できなかった。北東壁側で第７・９号溝と接続し、テラス状を有し南西側で更に深くなる。北西端で第13号溝と接続する。

規模は、確認できた全長8.5ｍ、確認できた幅215㎝、深さ58㎝を測る。

第12号溝（第62図）

調査区中央部付近のＴ－26、Ｒ・Ｓ・Ｔ－27グリッドに位置し、やや偏り南北方向に延び調査区を横断する。西壁中央部付近で第15号溝と接続する。南半部では第13号溝と重複している。

規模は、確認できた全長19.7ｍ、幅78～300㎝、深さ48～80㎝を測る。延長方向は、Ｎ－21°－Ｅを指す。

第13号溝（第62図）

調査区中央部付近のＴ－26、Ｒ・Ｓ・Ｔ－27グリッドに位置し、やや偏り南北方向に延び調査区を横断する。第12号溝の東に隣接し、やや偏り南北方向に延び調査区を横断する。南半部では第13号溝と重複し、南端で第10号溝と重複している。

規模は、確認できた全長19.5ｍ、幅67～125㎝、深さ20～30㎝を測る。延長方向は、Ｎ－25°－Ｅを指す。

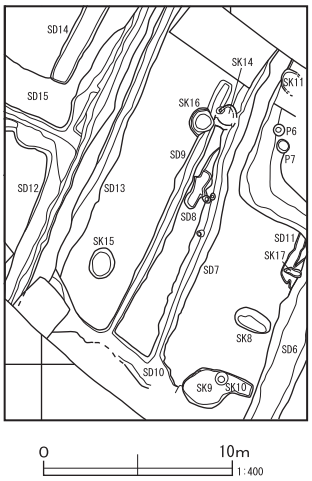
第14号溝（第62図）

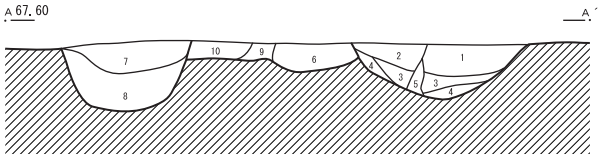
調査区中央部付近のＲ・Ｓ－27グリッドに位置し、やや片寄って南北方向に延びる。北端は調査区域外となっている。

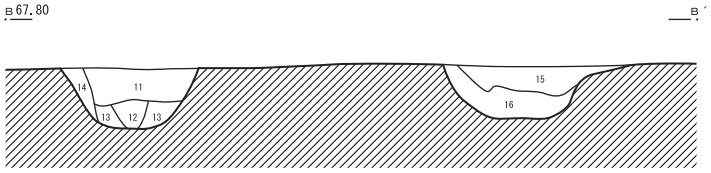
規模は、確認できた全長8.2ｍ、幅108～125㎝、深さ６～８㎝を測る。延長方向は、Ｎ－28°－Ｅを指す。

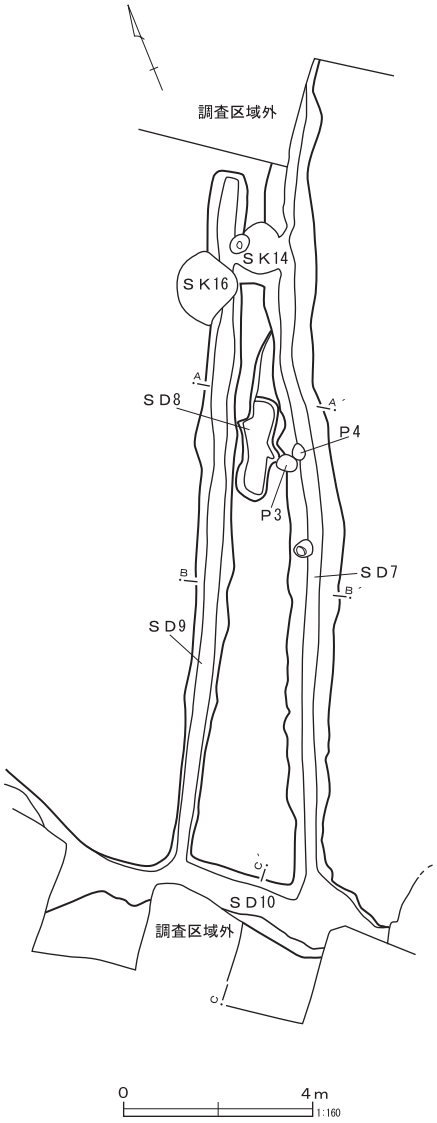
第15号溝（第63図）

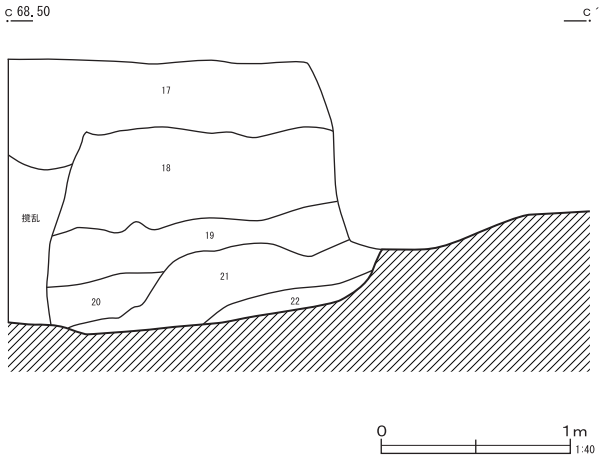
調査区南端中央部のＲ－24・25、Ｓ－25～27グリッドに位置し、やや片寄って東西方向に延びる。第18・19号土坑、第18号溝と重複し、第18号土坑が最も新しく、当溝、第19号土坑の順に古くなる。







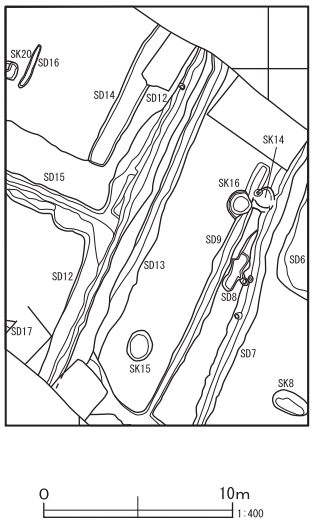


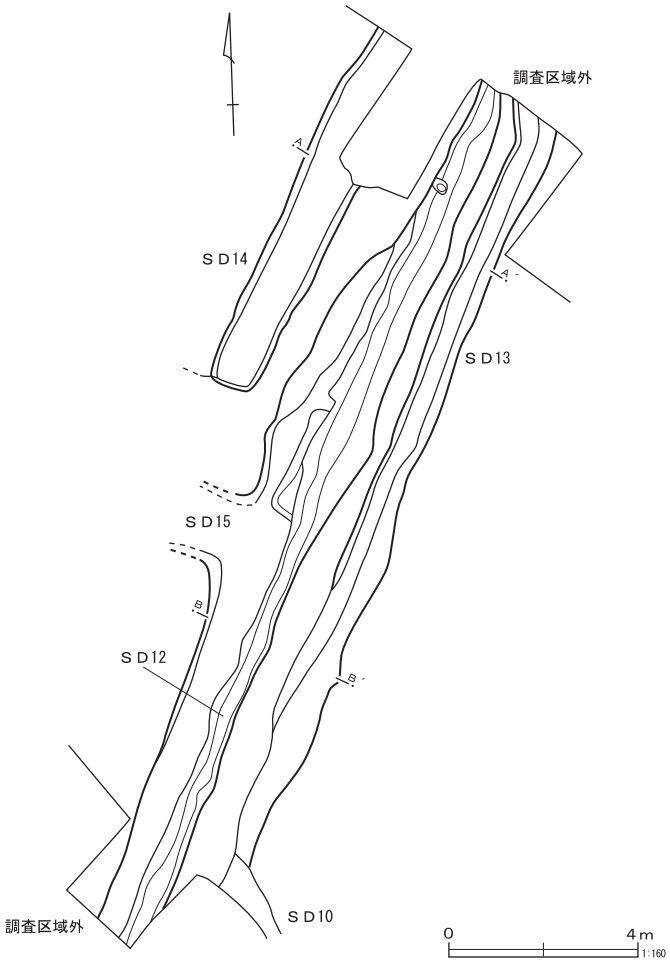


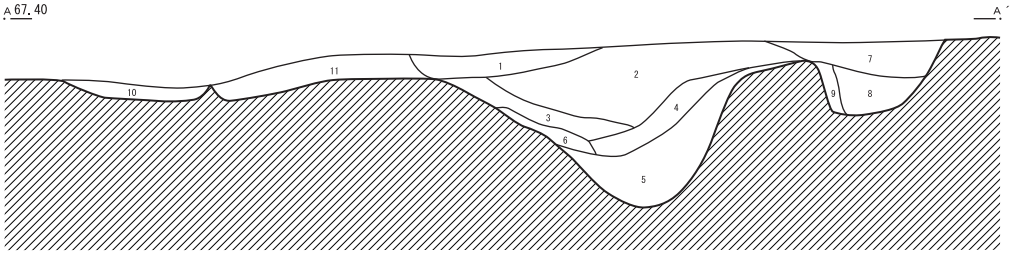
SD7・8・9・10

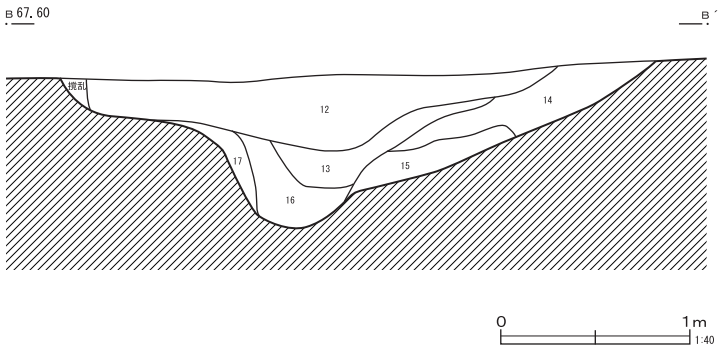
1	黒褐色土		黄褐色土
2	黒褐色土		ローム粒子僅か　締まり強
3	黒褐色土		黄褐色土若干
4	褐色土		黒褐色土若干
5	褐色土	シルト	黒褐色土
6	黒色土		締まり有　粗粒
7	黒褐色土		粗粒
8	黒褐色土		ローム粒子若干
9	灰黄褐色土		締まり極く強
10	黒褐色土		焼土粒子僅か
11	暗褐色土		締まり強
12	黒褐色土		にぶい黄橙色シルト
13	にぶい黄橙色土	シルト	
14	黒褐色土		にぶい黄橙色シルト
15	暗褐色土		ローム粒子多　締まりやや有
16	黒褐色土		ローム粒子多　砂質
17	盛土		
18	黒褐色土		炭化物粒子　にぶい黄橙色粒子
19	黒褐色土		明黄褐色土　明黄褐色土粒子若干
20	暗褐色土		明黄褐色土ブロック　明黄褐色土粒子多
21	灰黄褐色土		明黄褐色土若干
22	にぶい黄褐色土	シルト	灰黄褐色土多

第61図　第7～10号溝





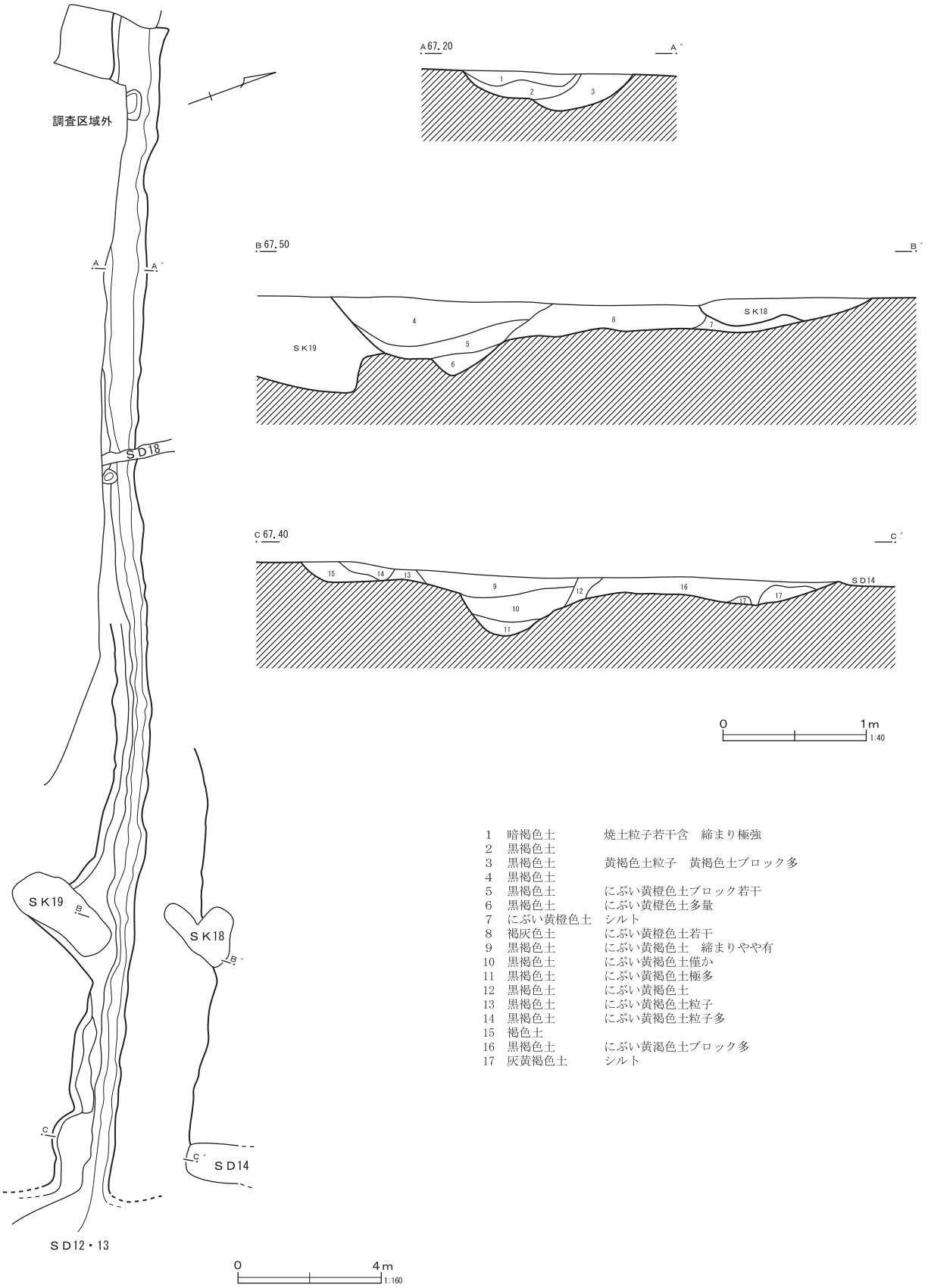




SD12・13・14

1	黒褐色土	にぶい黄褐色土粒子
2	黒褐色土	粗粒　締まり強
3	黒褐色土	にぶい黄褐色土ブロック
4	暗褐色土	
5	にぶい黄褐色土	
6	黒褐色土	にぶい黄橙色土シルト
7	暗褐色土	黄褐色土粒子
8	黒褐色土	にぶい黄橙色土小ブロック多　粗粒
9	黒褐色土	にぶい黄橙色土
10	黒褐色土	ローム小ブロック
11	黒褐色土	黄褐色土
12	黒褐色土	ローム粒子多
13	灰黄褐色土	にぶい黄橙色土シルト粒子多
14	灰黄褐色土	にぶい黄橙色土シルト多
15	にぶい黄橙色土	シルト　灰黄褐色土多
16	にぶい黄渇色土	焼土粒子　黄褐色土粒子若干
17	灰黄褐色土	シルト

第62図　第12～14号溝



1　暗褐色土　焼土粒子若干含　締まり極強
2　黒褐色土
3　黒褐色土　黄褐色土粒子　黄褐色土ブロック多
4　黒褐色土
5　黒褐色土　にぶい黄橙色土ブロック若干
6　黒褐色土　にぶい黄橙色土多量
7　にぶい黄橙色土　シルト
8　褐灰色土　にぶい黄橙色土若干
9　黒褐色土　にぶい黄褐色土　締まりやや有
10　黒褐色土　にぶい黄褐色土僅か
11　黒褐色土　にぶい黄褐色土極多
12　黒褐色土　にぶい黄褐色土
13　黒褐色土　にぶい黄褐色土粒子
14　黒褐色土　にぶい黄褐色土粒子多
15　褐色土
16　黒褐色土　にぶい黄渇色土ブロック多
17　灰黄褐色土　シルト

第63図　第15号溝

第18号溝は当溝を掘り込んでいる。

規模は、確認できた全長32.0ｍ、幅88～137㎝、深さ14～62㎝を測る。延長方向は、Ｎ－69°－Ｗを指す。

第16号溝（第64図）

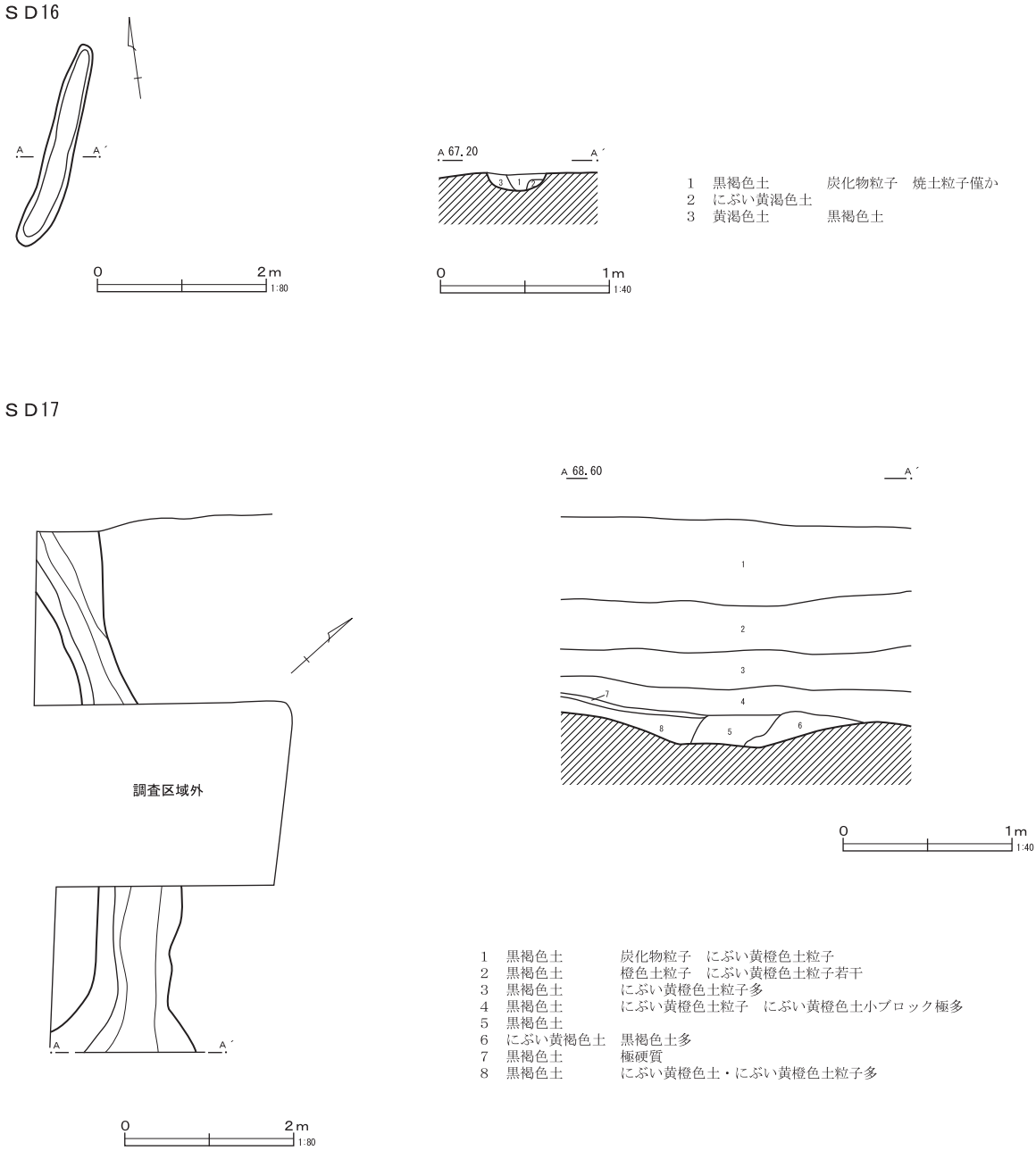
調査区中央部のＲ・Ｓ－26グリッドに位置し、やや片寄って南北方向に延びる。

規模は、全長250ｍ、幅31～35㎝、深さ４～17㎝を測る。延長方向は、Ｎ－27°－Ｅを指す。

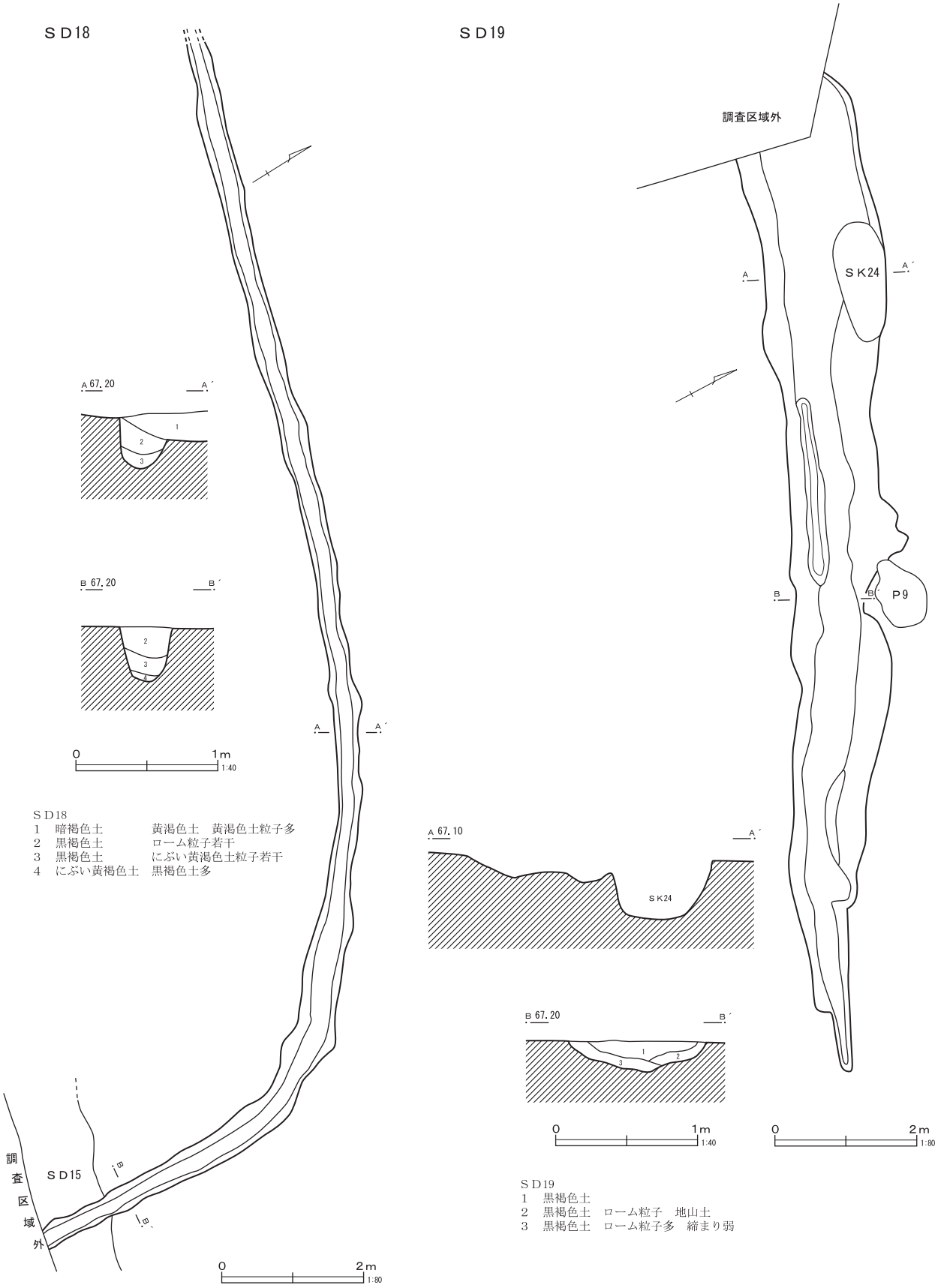
第17号溝（第64図）

調査区中央部南西端のＴ－26グリッドに位置し、僅かに湾曲してやや片寄って東西方向に延びる。

規模は、確認できた全長6.0ｍ、幅43～90㎝、深さ10㎝ほどを測る。



第64図　第16・17号溝



第65図　第18・19号溝

第18号溝（第65図）

調査区北西部のＲ－23～25、Ｓ－25グリッドに位置し、Ｌ字状に延びる。第15号と重複し、切り込んでいる。

規模は、確認できた全長18.5ｍ、幅30～50㎝、深さ８～32㎝を測る。

第19号溝（第65図）

調査区北西端のＰ・Ｑ－23、Ｑ－24グリッドに位置し、やや片寄って東西方向に延びる。西から東に向かい幅と深さが漸次減少している。

規模は、確認できた全長14.0ｍ、幅106～168㎝、深さ８～17㎝を測る。延長方向は、Ｎ－65°－Ｗを指す。

（５）ピット

ピットは、26基確認されたが並ぶようなものはなく、単独のものである。ピット５は欠番である

ピット１（第66図）

Ｕ－28グリッドに位置する。平面形は、不整楕円形を呈する。規模は、主軸長123㎝×83㎝、深さ37㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－11°－Ｗを指す。

ピット２（第66・68図）

Ｔ－28・29、Ｕ－28グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。第４号土坑、第５号溝と重複し、両遺構より新しい。規模は、径92～96㎝、深さ25㎝を測る。

遺物は、縄文土器片が出土した。

ピット３（第66図）

Ｔ－27グリッドに位置する。第７号溝と重複する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、主軸長46㎝×36㎝、深さ74㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－69°－Ｗを指す。

ピット４（第66図）

Ｔ－27グリッドに位置する。第７号溝と重複する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、主軸長36㎝×26㎝、深さ64㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－０°を指す。

ピット６（第66図）

Ｓ－28グリッドに位置する。第６号溝と重複する。平面形は、円形を呈する。規模は、径58～60㎝、深さ20㎝を測る。

ピット７（第66図）

Ｓ－28グリッドに位置する。第６号溝と重複する。平面形は、円形を呈する。規模は、径66～73㎝、深さ25㎝を測る。

ピット８（第66図）

Ｐ－24グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径46～50㎝、深さ64㎝を測る。

ピット９（第66図）

Ｑ－24グリッドに位置する。第19号溝と重複する。平面形は、不整形を呈する。規模は、主軸長102㎝×65㎝、深さ33㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－81°－Ｅを指す。

ピット10（第66図）

Ｑ－24グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径29～34㎝、深さ53㎝を測る。

ピット11（第66図）

Ｑ－24グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径42～47㎝、深さ55㎝を測る。

ピット12（第66図）

Ｑ－24グリッドに位置する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、主軸長36㎝×30㎝、深さ15㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－21°－Ｅを指す。

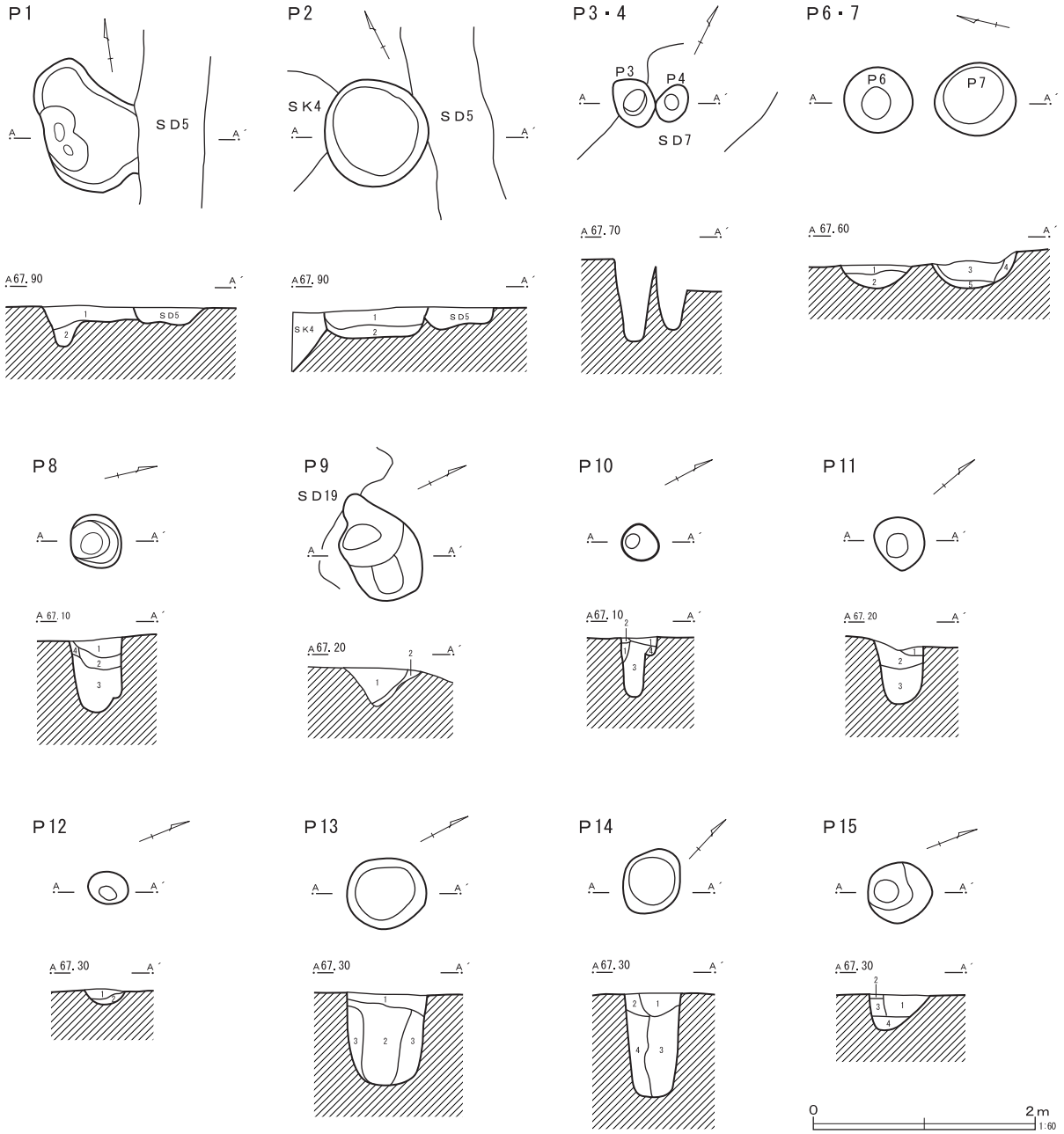
ピット13（第66・68図）

Ｒ－25グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径64～73㎝、深さ83㎝を測る。

遺物は、縄文土器片が出土した。

ピット14（第66・68図）

Ｒ－25グリッドに位置する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、主軸長63㎝×52㎝、深さ92㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－11°－Ｗを指す。



Ｐｉｔ１
1　暗褐色土　シルト　ローム中粒子若干
2　暗褐色土　シルト　ロームブロック

Ｐｉｔ２
1　暗褐色土　シルト　ローム粒子多
　　焼土粒子少
　　締まりやや有
2　暗褐色土　シルト　ロームブロック
　　焼土粒子少
　　締まりやや有

Ｐｉｔ６・７
1　黒褐色土
2　褐色土
3　黒褐色土　にぶい黄橙色土
4　黒褐色土
5　褐色土

Ｐｉｔ８
1　黒褐色土　　ローム粒子若干
2　黒褐色土
3　黒褐色土　　黄褐色土若干
4　灰黄褐色土

Ｐｉｔ９
1　暗褐色土
2　にぶい黄褐色土

Ｐｉｔ10
1　暗褐色土
2　黒褐色土　締まり強
3　黒色土
4　にぶい黄褐色土

Ｐｉｔ11
1　暗褐色土
2　黒褐色土　暗褐色土若干
3　黒褐色土

Ｐｉｔ12
1　黒色土　黄褐色土
2　褐色土

Ｐｉｔ13
1　黒褐色土　　締まり強
2　黒褐色土　　黄褐色土粒・焼土魂
3　灰黄褐色土　　黄褐色土

Ｐｉｔ14
1　黒褐色土　　にぶい黄橙色土粒子
　　焼土粒子含　締まり有
2　黒褐色土　　にぶい黄橙色土粒子
　　黄褐色土含　締まり有
3　黒褐色土　　黄褐色土粒子
4　黒褐色土　　黄褐色土粒子　黄褐色土

Ｐｉｔ15
1　黒色土　　ローム粒子
2　にぶい黄褐色土
3　黄褐色土
4　黒色土

第66図　ピット（1）

遺物は、縄文土器片が出土した。

ピット15（第66図）

R－25グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径53～57㎝、深さ33㎝を測る。

ピット16（第67図）

R－25グリッドに位置する。第1号性格不明遺構と重複する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、主軸長54㎝×47㎝、深さ45㎝を測る。主軸方位は、N－55°－Eを指す。

ピット17（第67・68図）

R－25グリッドに位置する。平面形は、不整円形を呈する。規模は、径81～82㎝、深さ85㎝を測る。

遺物は、縄文土器片が出土した。

ピット18（第67図）

R－25グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径59～71㎝、深さ50㎝を測る。

ピット19（第67図）

R－25グリッドに位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径63～70㎝、深さ70㎝を測る。

ピット20（第67図）

R－24グリッドに位置する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、主軸長54㎝×34㎝、深さ40㎝を測る。主軸方位は、N－15°－Eを指す。

ピット21（第67図）

R－24グリッドに位置する。平面形は、不整形を呈する。規模は、50㎝×57㎝、深さ46㎝を測る。

ピット22（第67図）

R－24グリッドに位置する。平面形は、不整形を呈する。規模は、57㎝×75㎝、深さ27㎝を測る。

ピット23（第67図）

R－25グリッドに位置する。平面形は、不整円形を呈する。規模は、径67～76㎝、深さ80㎝を測る。

ピット24（第67・68図）

R－25グリッドに位置する。ピット25と重複し、ピット25のほうが新しい。平面形は、方形を呈する。規模は、85㎝×95㎝、深さ24㎝を測る。主軸方位は、N－13°－Wを指す。

遺物は、縄文土器片が出土した。

ピット25（第67図）

R－25グリッドに位置する。平面形は、楕円形を呈する。規模は、主軸長92㎝×50㎝、深さ21㎝を測る。主軸方位は、N－77°－Wを指す。

ピット26（第67・68図）

R－25グリッドに位置する。第1号性格不明遺構と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は、円形を呈する。規模は、径61～66㎝、深さ69㎝を測る。

遺物は、縄文土器片が出土した。

ピット27（第67図）

R－25グリッドに位置する。第1号性格不明遺構と重複し、当ピットのほうが新しい。平面形は、楕円形を呈する。規模は、主軸長100㎝×82㎝、深さ49㎝を測る。主軸方位は、N－70°－Wを指す。

ピット出土の縄文土器（第68図）

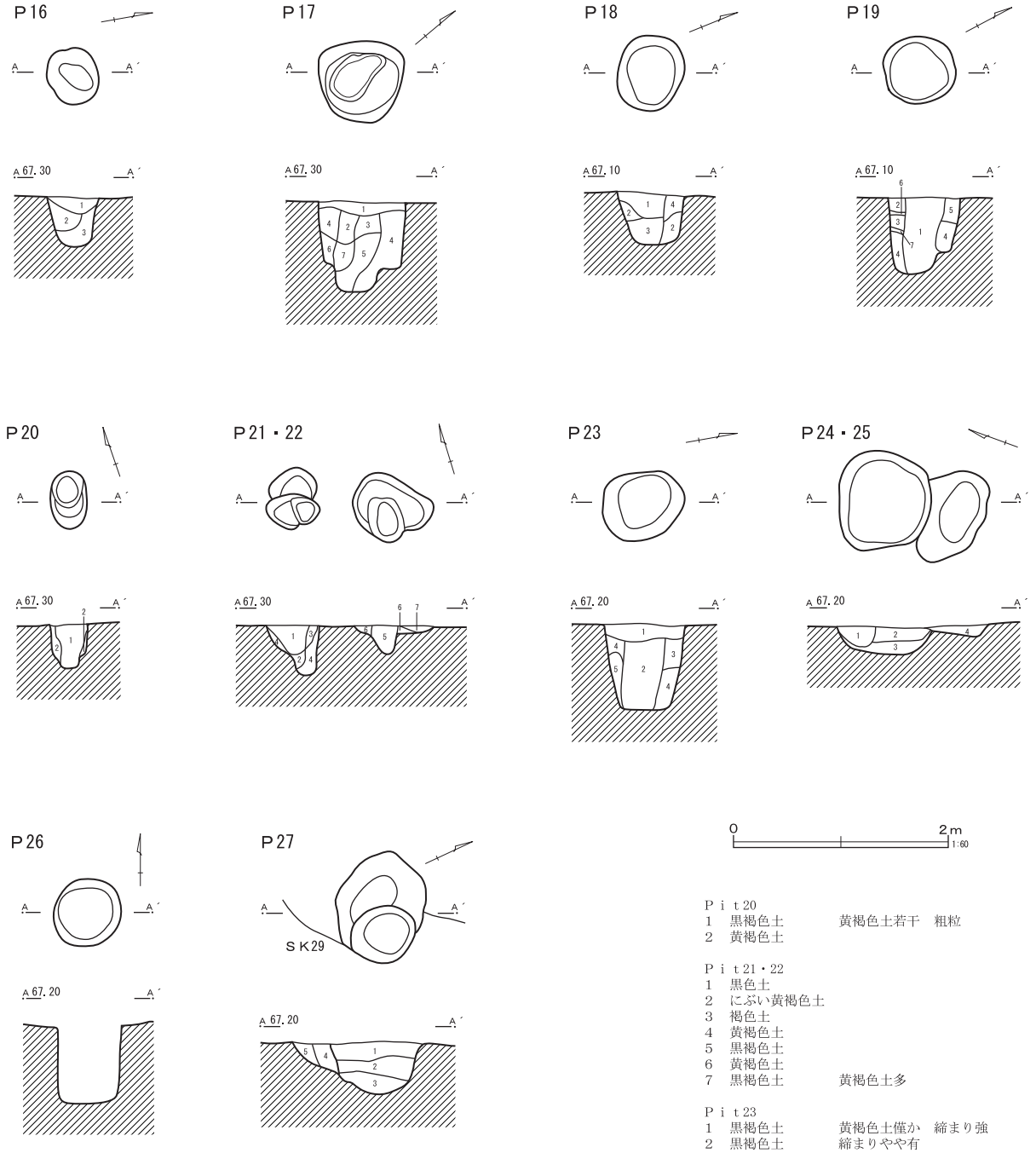
調査区全体から多数のピットが検出されたが、これらのうち縄文時代のものと思われるピットについて、その出土遺物を以下に一括した。

時期はいずれも縄文時代後期前葉の堀之内1式およびその前後の土器群と考えられるが、各遺構ごとに若干の様相の違いがみとめられ、若干の時期差を示すものと考えられる。

ピット2出土土器（1・2）

1は縄文時代前期後半の諸磯c式と考えられる。櫛歯状工具による集合沈線が間隔をおいて垂下する。地文は持たず、斜位の粗い擦痕が観察される。内面には棒状工具先端による粗い調整痕が観察される。

2は堀之内1式の口縁部である。薄手の器壁で口唇はいちじるしく肥厚し、断面ペン先状を呈して内面・外面に稜を持つ。地文は持たず、口縁部の文様帯もみられない。



Ｐｉｔ16
1　にぶい黄褐色土　ローム粒子　締まり有
2　黒褐色土　黄褐色土　締まり有
3　黒褐色土　締まり有

Ｐｉｔ17
1　黒褐色土　白色粒子・焼土粒子
2　暗褐色土　にぶい黄橙色シルト
3　黒褐色土　焼土・炭化物僅か
4　黒褐色土　にぶい黄橙色シルト
5　黒褐色土　焼土・黄褐色土
6　黒褐色土　褐色土ブロック
7　暗褐色土　炭化物　焼土粒子
にぶい黄橙色シルト

Ｐｉｔ18
1　暗褐色土　黄褐色土粒子・焼土粒子
2　黒褐色土　黄褐色土多
3　黒色土
4　黒褐色土　黄褐色土粒子若干

Ｐｉｔ19
1　黒褐色土
2　黒褐色土　黄褐色土粒子
3　黒色土
4　暗褐色土　焼土若干
5　褐色土　黒褐色土若干
6　黄褐色土　黒褐色土
7　にぶい黄褐色土　シルト

Ｐｉｔ20
1　黒褐色土　黄褐色土若干　粗粒
2　黄褐色土

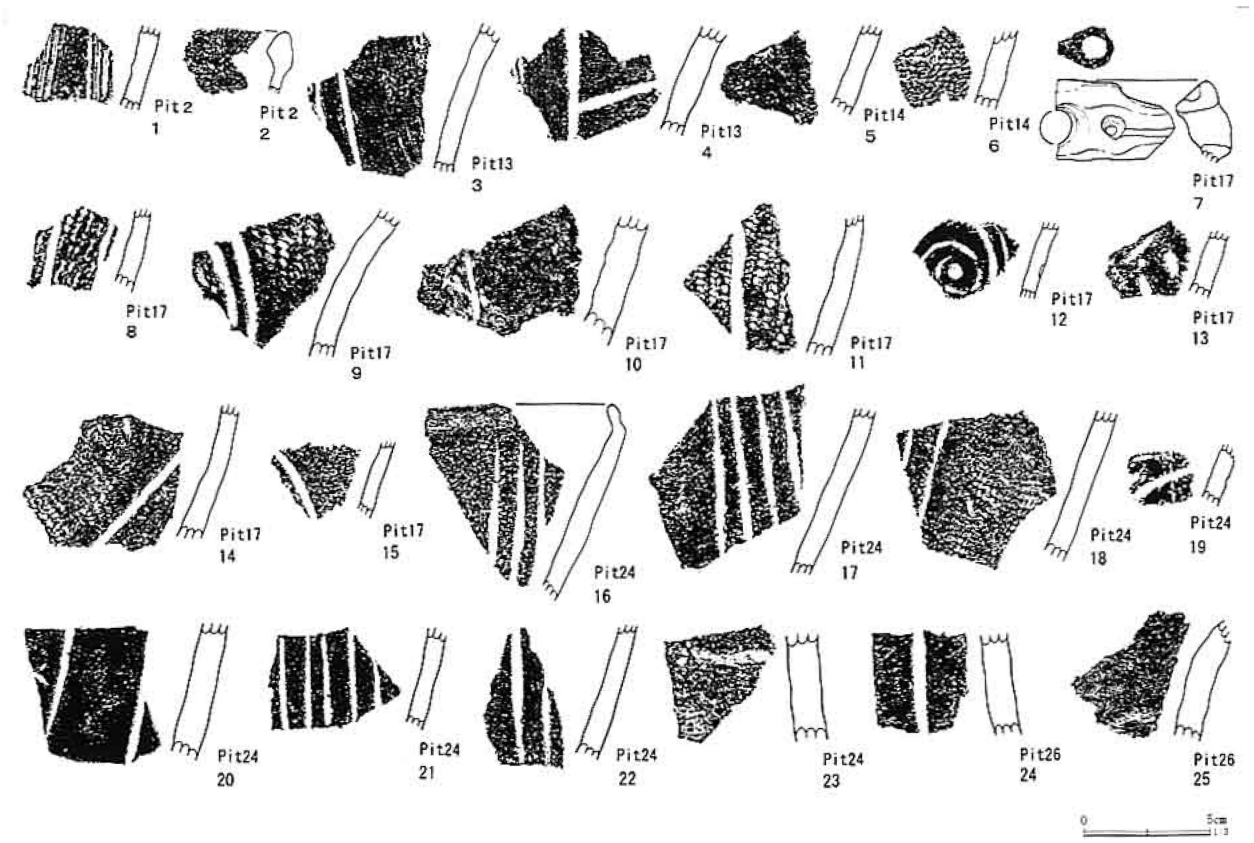
Ｐｉｔ21・22
1　黒色土
2　にぶい黄褐色土
3　褐色土
4　黄褐色土
5　黒褐色土
6　黄褐色土
7　黒褐色土　黄褐色土多

Ｐｉｔ23
1　黒褐色土　黄褐色土僅か　締まり強
2　黒褐色土　締まりやや有
3　黒褐色土　黄褐色土多
4　黒色土
5　灰黄褐色土

Ｐｉｔ24・25
1　暗褐色土　焼土粒子若干
2　黒褐色土　焼土粒子多
3　にぶい黄褐色土
4　黒色土

Ｐｉｔ27
1　黒褐色土
2　黒褐色土
3　暗褐色土　シルト　黒褐色土若干
4　黒褐色土　暗褐色土若干
5　にぶい黄褐色土

第67図　ピット（2）



第68図　ピット出土遺物

ピット13出土土器（3・4）

棒状工具による平行沈線文を施文した後、外面に研磨が施される。

4は縦位の平行沈線と、これに直交する平行沈線によってパネル状の区画が構成されるものと思われる。地文縄文はみられない。

ピット14出土土器（5・6）

5は無文の胴部破片である。外面は縦位の研磨が徹底される。胎土に凝灰岩の小礫を特徴的に含んでいる。

6は縄文のみ施文される胴部である。圧痕は薄く粗雑であるが、施文原体はＬＲの縄と考えられる。

ピット17出土土器（7～15）

7は水平口縁上に付される小突起の部分で、中央に貫通孔を有する。上面の平坦部には円形竹管状工具による盲孔を有するほか、外面貫通孔の左右にも盲孔を有し、これを起点として口縁直下に1条の沈線が巡らされるものとみられる。8以下は胴部破片である。大半が地文縄文上に沈線文が描かれるもので、半粗製的な個体であろう。10は内面に棒状工具先端による荒々しい調整痕を残している。

12・13は地文を持たない。12は盲孔を中心とする渦文が描かれ、13は平行沈線が交錯して4に類似のパネル文を構成するものとみられる。

ピット24出土土器（16～23）

棒状工具による集合沈線文が特徴的にみられる土器群である。地文を持たない破片が多く、胎土は砂質で器面の風化がいちじるしい。

16は口縁部から胴上半部にかけての破片である。口縁は先細りしつつ「く」の字に内屈し、口端は平坦に面取りされて断面角頭棒状を呈する。口縁直下にはごく浅い凹線がみとめられ、屈曲部分を起点として集合沈線文が垂下する。外面は風化するが、内面には入念な横位の研磨が残存する。

17は胴下半部の破片とみられる。縦位の集合沈線が垂下し、無文部分にＲＬ単節の縄文が疎らに施文される。18もこれに類似の破片で、ＬＲ単節の縄文が施文される。

19は無文で平行沈線間に列点文がみられる胴部であり、称名寺式の可能性がある。

20以下は無文地に集合沈線文がみられる胴部破片である。20は比較的焼成が良く、内面に横位の研磨が観察される。

23は縄文施文後に篦状工具の擦痕によってこれを磨り消したものとみられる。

ピット26出土土器（24・25）

24は無文地に縦位の平行沈線が垂下する胴部で、ピット13の出土土器に類似する。25はキャリパー形深鉢の頸部～胴上半部の破片と考えられる。無文で、指頭による粗い横位の調整痕が観察される。

（６）性格不明遺構

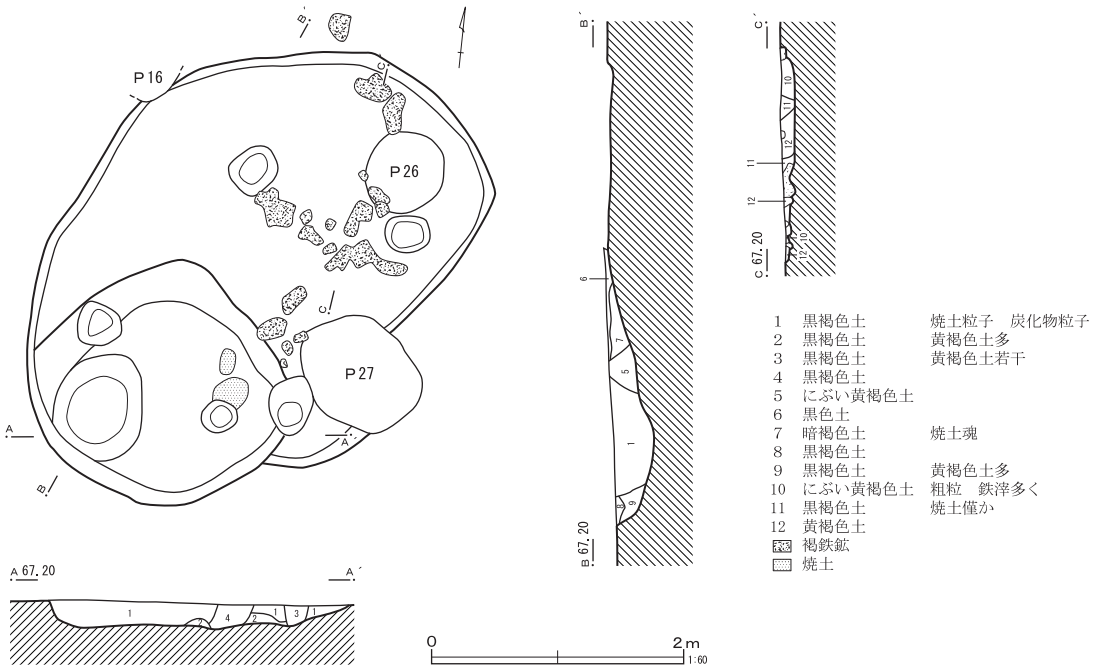
第１性格不明遺構（第69図）

調査時に第28号土坑・第29号土坑として番号を付したが、性格不明遺構として扱う。

Ｒ－25グリッドに位置する。ピット16・26・27と重複しており、ピット16・27のほうが新しい。規模は、主軸長407㎝×266㎝、深さ10～25㎝を測る。平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、Ｎ－32°－Ｅを指す。

北東側で褐鉄鉱とみられるものが検出された。南東に向かい深くなり、南東側で焼土塊や覆土中から焼土粒子・炭化物粒子が検出された。ほとんど削平され性格は不明である。

褐鉄鉱とみられるものは、最大で厚さ10㎝程度で、黒色粒子を多く含む部分と含まない部分がある。総重量は約35kgである。



第69図　第１号性格不明遺構

（７）グリッド出土遺物（第70図）

１～６は前期後半の諸磯式である。１はＲＬ単節の地文縄文上に浮線文を描くもので、諸磯ｂ式であろう。２～６は半截竹管状工具による集合沈線文が描かれる。５・６は特に密な綾杉状の沈線が器面を埋めるもので、諸磯ｃ式と考えられる。

７は中期中葉の勝坂式であろう。断面台形の隆帯により器面を縦横に区画した中に沈線文が描かれる。

８は後期初頭称名寺式の口縁部である。波状口縁で口唇が著しく肥厚し、口縁下に円形刺突を伴う幅広の沈線が巡り、直下に刻みを伴う隆帯が巡る。９～11は同時期の胴部とみられ、９には連鎖状の浮線文がみられる。

12～39は堀之内１式である。

12は口端内屈して口縁下に幅広の無文帯を持ち、頸部を１条の沈線で区画して、胴部に沈線文が描かれる。13・14は緩やかな波状口縁で、波頂部の盲孔を基点として１条の沈線が巡る。

15は口端内屈して１条の沈線が巡り、直下に同一工具による刻みが施される。16・17は沈線のみ巡る口縁部である。18は口縁下の沈線を基点として胴部に連鎖状のモチーフが垂下する。

19～37は胴部破片である。いずれも無文地に単沈線ないし平行沈線で文様が描かれる。21の大型破片は金魚鉢形を呈する浅鉢胴下半部であろう。

38は壺形土器口縁部で、縦位の橋梁状把手を配する。把手の背面には盲孔と、これを基点とする短沈線が描かれる。

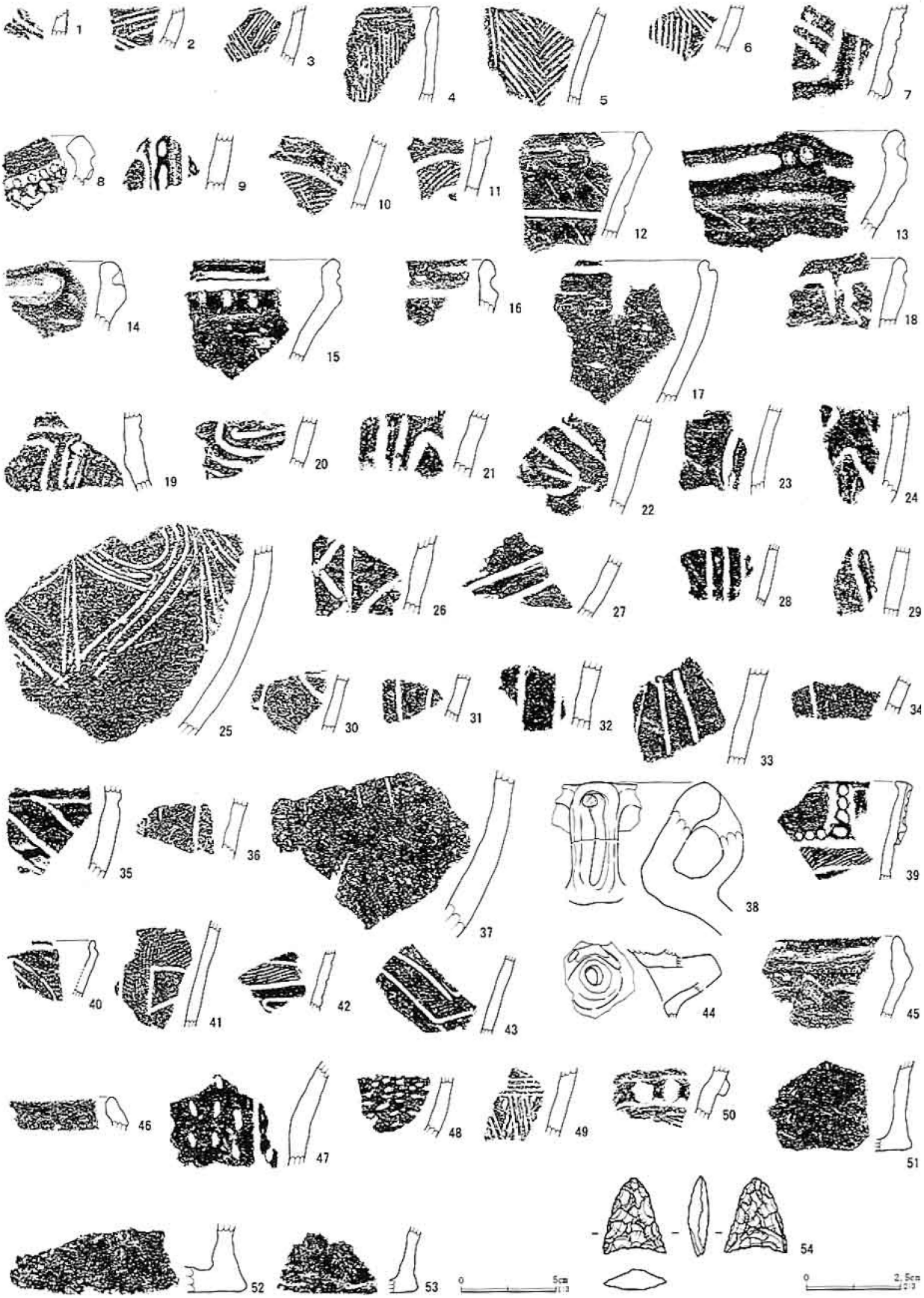
39～44は堀之内２式であろう。39は頸部に列点および単沈線が巡り、隆帯区画が省略される。口端から連鎖状浮線文が垂下し、ボタン状の貼付文と融合する。40は小型精製深鉢の口縁部で、口端内屈して１条の沈線が巡る。口縁下の無文帯は省略され、直接文様帯が描かれる。41～43は深鉢胴部で、平行沈線によるパネル状の文様が描かれる。

44は注口土器である。注口部の上に、これに癒着するかたちで橋梁状の把手が配される。把手両側面には単沈線がみられる。

45以下には後期とみられる破片を一括した。45・46は無文の口縁部で、いずれも「く」の字に内屈する。45は箆状工具による粗雑な調整痕が観察される。47・48は列点文がみられる胴部である。47は平行沈線間に列点文が施文されるほか、余白の部分にも列点文が充填される。48はやや薄手の器壁で、斜位の列点文が全面に施文されるものとみられる。

49は櫛歯状工具の条線が交錯する胴部破片で、地文としてＬ無節の縄文が施文される。50は条線地文で、指頭圧痕ある紐線文のみられる頸部である。51～53は底部破片である。

54は無茎凹基の石鏃である。石材は青灰色のチャートを使用している。



第70図　グリッド出土遺物

Ⅳ まとめ

膳棚東遺跡では、以前に第１号円墳跡の南西半を調査しており、今回の調査で粘土施設の主体部を検出した。また、新たに南西側に接して第２号墳が確認された。第１号墳の墳丘は削平されていたが主体部の最下部がかろうじて遺存しており、ガラス小玉・鉄製品の副葬品が出土した。墳丘径16.5ｍ、周溝径21.1ｍで南側にブリッジを有し、ブリッジの東側に土坑が付設されている。主体部は南西部が壊されているが、長さ1.8ｍ、確認できた最大幅0.9ｍの範囲で粘土が確認でき、粘土層の厚さは平均５㎝程、外周部では13㎝程の部分がある。第１号墳主体部出土のガラス小玉は40点で、ほぼ粘土層内より確認され、水色系のものが主体である。第２号墳は第１号墳の南西に接して検出され全体の１／３程度で明確ではないが墳丘径12.8ｍ、周溝径16.0～18.2でブリッジは不明である。

周辺の古墳は、山下後遺跡で２基、海谷遺跡で２基と小石室１基の計３基、村中遺跡で１基と膳棚東遺跡の２基を含めても４遺跡８基に過ぎない。

山下後第１号墳は、墳丘径9.36ｍ、周溝径11.6ｍでブリッジを有し、ブリッジ東側に土坑が付設されている。主体部は土坑内への木棺直葬で木棺外周部とみられるところに薄く粘土ブロックが敷かれている。

山下後第２号墳は墳丘径7.8ｍ、周溝径10.4ｍで、主体部は第１号墳と同様のものである。

山下後第１号墳と膳棚東第１号墳は規模に差異はあるがブリッジ・敷設土坑・主体部構造などの類似構造がとられていたことが窺える。

海谷第１号墳は墳丘形が不明であるが、横穴式石室に勾玉・切子玉・ガラス小玉・刀子・鉄鏃が副葬されていた。第２号墳は墳丘径24ｍ、周溝径28ｍで、主体部構造は横穴式石室である。海谷第１号墳ではガラス小玉は113点が出土し、膳棚東第１号墳出土のガラス小玉と大きさ・色調で類似するのものである。

内部構造が木棺直葬の竪穴系の膳棚東遺跡や山下後遺跡の古墳と横穴式石室の海谷遺跡の古墳の系譜が異なることは明らかである。海谷第１号墳と膳棚東第１号墳には副葬品にも大きな差があるが、類似したガラス小玉の副葬から想定される築造時期やガラス小玉の配布形態など不明な部分が多い。

引用・参考文献

上野真由美　1999 『膳棚東遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第215集

中島岐視生　2003 『第二椿峰遺跡群　海谷遺跡』 所沢市文化財調査報告書　第31集

並木　隆　1989 『山下後遺跡』 所沢市文化財調査報告書　第23集

平田一乗　2000 『海谷遺跡　―第10次調査・遺構編―』 所沢市埋蔵文化財調査報告書　第22集

　　2002 『海谷遺跡　―第10次調査・遺物編―』 所沢市埋蔵文化財調査報告書　第29集

昼間孝志　2000 『村中遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第261集

付編

はじめに

北久米遺跡第１号性格不明遺構から検出した鉱物について、理化学的な分析を実施した。

同遺構は、径４ｍ×2.6ｍ、深さ10～25㎝の楕円形で、全体に浅く、南西側に径1.5ｍ程度のやや深い掘り込みが見られる。このやや深い掘り込みの一部には被熱痕が認められ、北東側のやや浅い部分に鉱物が集積されていた。この鉱物は調査時には鉄滓と認識されていたが、遺物整理時に詳細な観察により鉄滓とは異なる点が見られたので、分析を行った。

鉱物の特徴

色調は褐色を呈し、多孔質でやや脆い。一部に黒色を帯びる部分や金属光沢を示す部分も見られる。細かい砂粒を少量含み、ごく一部には高師小僧状の鉱物も認められた。

図－１に鉱物質量のヒストグラムを示した。

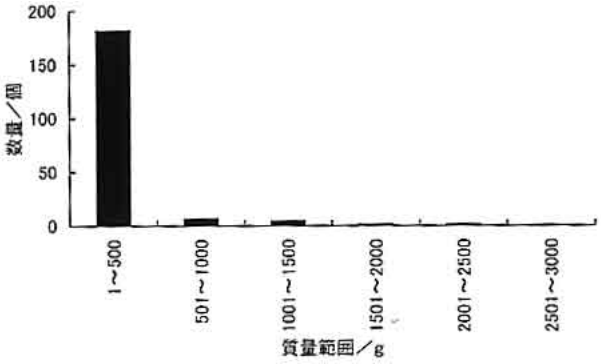
分析諸元

理化学的な分析は、元素組成の概要を得るために蛍光Ｘ線分析法を、鉱物組成の概要を得るためにＸ線回折分析法を実施した。

蛍光Ｘ線分析法の諸元は表－１のとおりである。

今回は表面分析に止まり、元素組成の概要を得る事が目的であったため、厳密な定量分析は行わず、ＦＰ法による半定量分析を実施した。

Ｘ線回折分析法の諸元は表－２のとおりである。



図－１　**出土鉱物の重量別ヒストグラム**

表－１　蛍光Ｘ線分析法の諸元

装置	ＺＳＸmini	型式	波長分散型
管球	Pd	雰囲気	真空
電圧	40kV	電流	1.20mA
サンプルスピン有り		計算法	ＦＰ法

表－２　Ｘ線回折分析法の諸元

ターゲット：Ｃｕ	モノクロ受光スリット：なし
管電圧：40kＶ	走査モード：連続
管電流：40mA	サンプリング幅：0.01°
カウンタモノクロメータ：固定	走査範囲：３～90／°
カウンタ：シンチレーションカウンタ	積算回数：１回
発散スリット：0.5mm	スキャンスピード：１°／min
発散縦制限スリット：10mm	走査軸２θ／θ°
散乱スリット：解放	θオフセット：なし
発行スリット：解放	光学系：平行ビーム法

表－３　元素組成の概要（ＦＰ法による半定量値）

元素名	Fe2O3	Al2O3	SiO2	TiO2	MnO	Na2O	MgO
含量/％	69	14	12	1	1	0.5	0.5
元素名	P2O5	Co2O3	SO3	K2O			
含量/％	0.3	0.3	0.2	0.1			

今回は、平行ビーム法で測定を行っているために、ややピーク幅が広がっている。

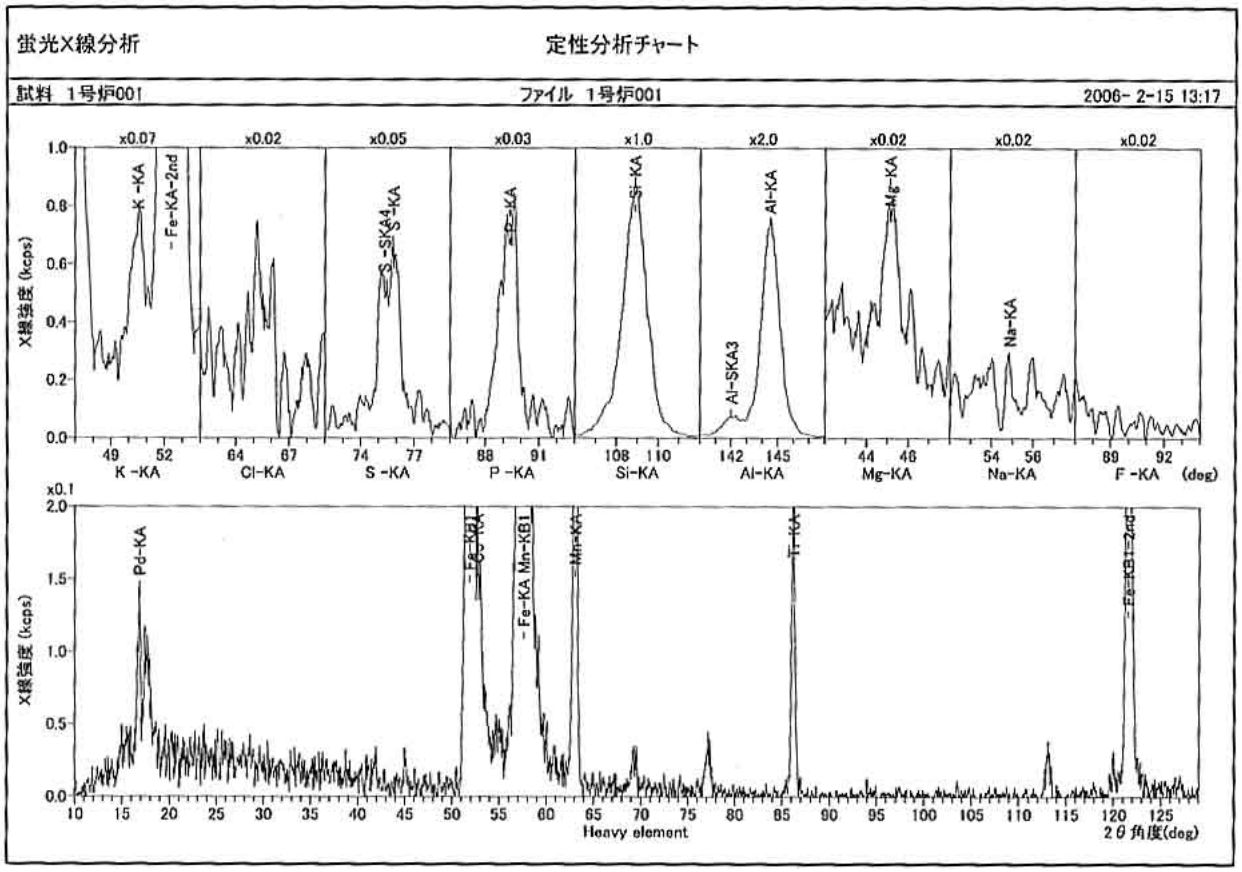
分析結果

蛍光Ｘ線分析法の結果は表－３に、チャートを図－２に示した。なお、各元素は酸化物換算で値を示した。当該試料の主成分はFeであり、Al2O3やSiO2は砂起源であると考えられた。

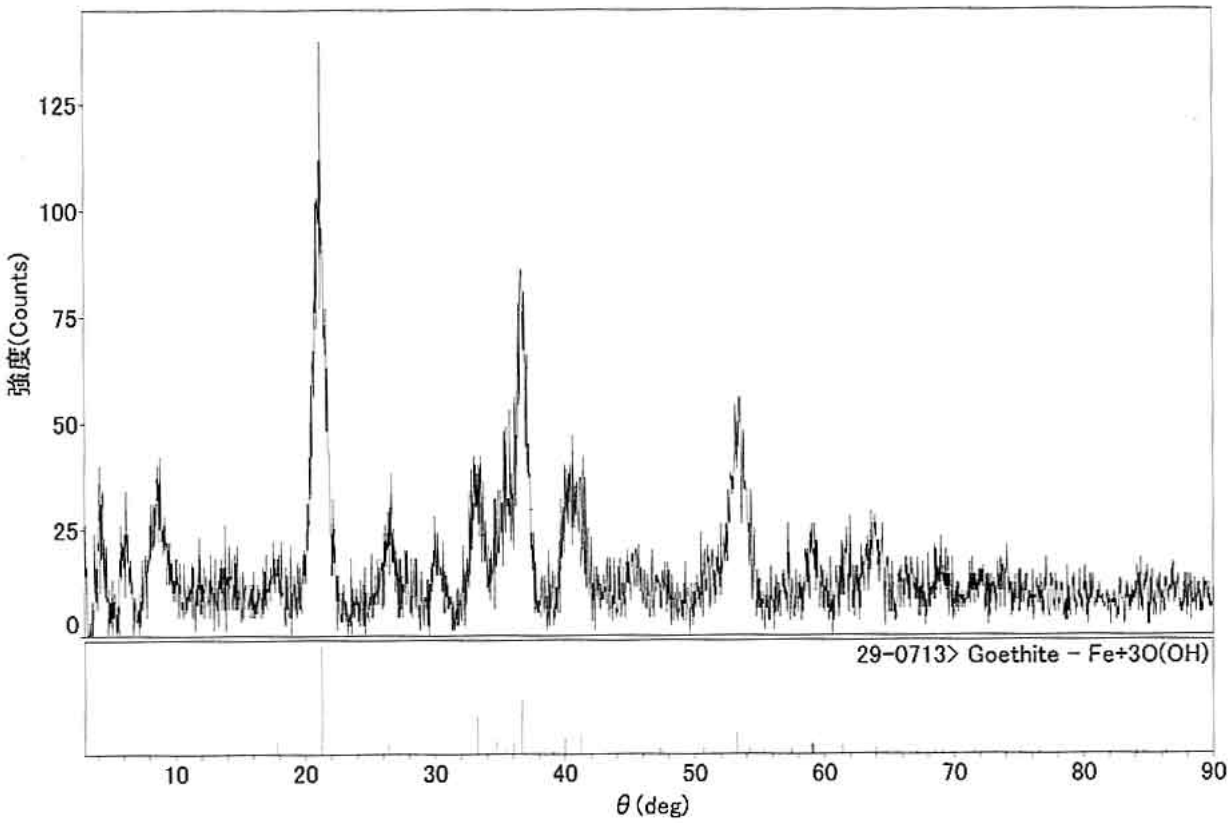
Ｘ線回折分析法の結果は、図－３に示した。試料の主成分は、Goethiteであると考えられた。

以上よりこの鉱物は褐鉄鉱であり、いわゆる沼鉄鉱であると判断した。従って本遺構は人為的に沼鉄鉱を集積したものであり、遺構に被熱痕跡が残されている事から、ベンガラ製作遺構の可能性が指摘できる。重量のヒストグラムからも、大きな塊で入手し、必要に応じて小割りして利用した状況が想定できた。

ここでは特に遺跡出土の褐鉄鉱について、従来は鉄滓と誤認されているものが多く存在する可能性を指摘しておきたい。



図－２　蛍光Ｘ線分析法の結果チャート



図－３　Ｘ線回折試験法の結果チャート